

史跡
福岡城跡
—東の丸の発掘調査—

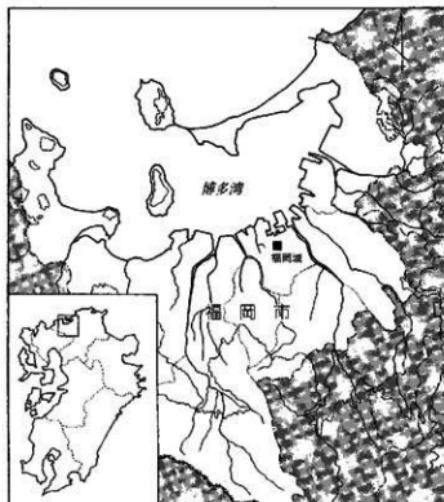
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第546集

1997

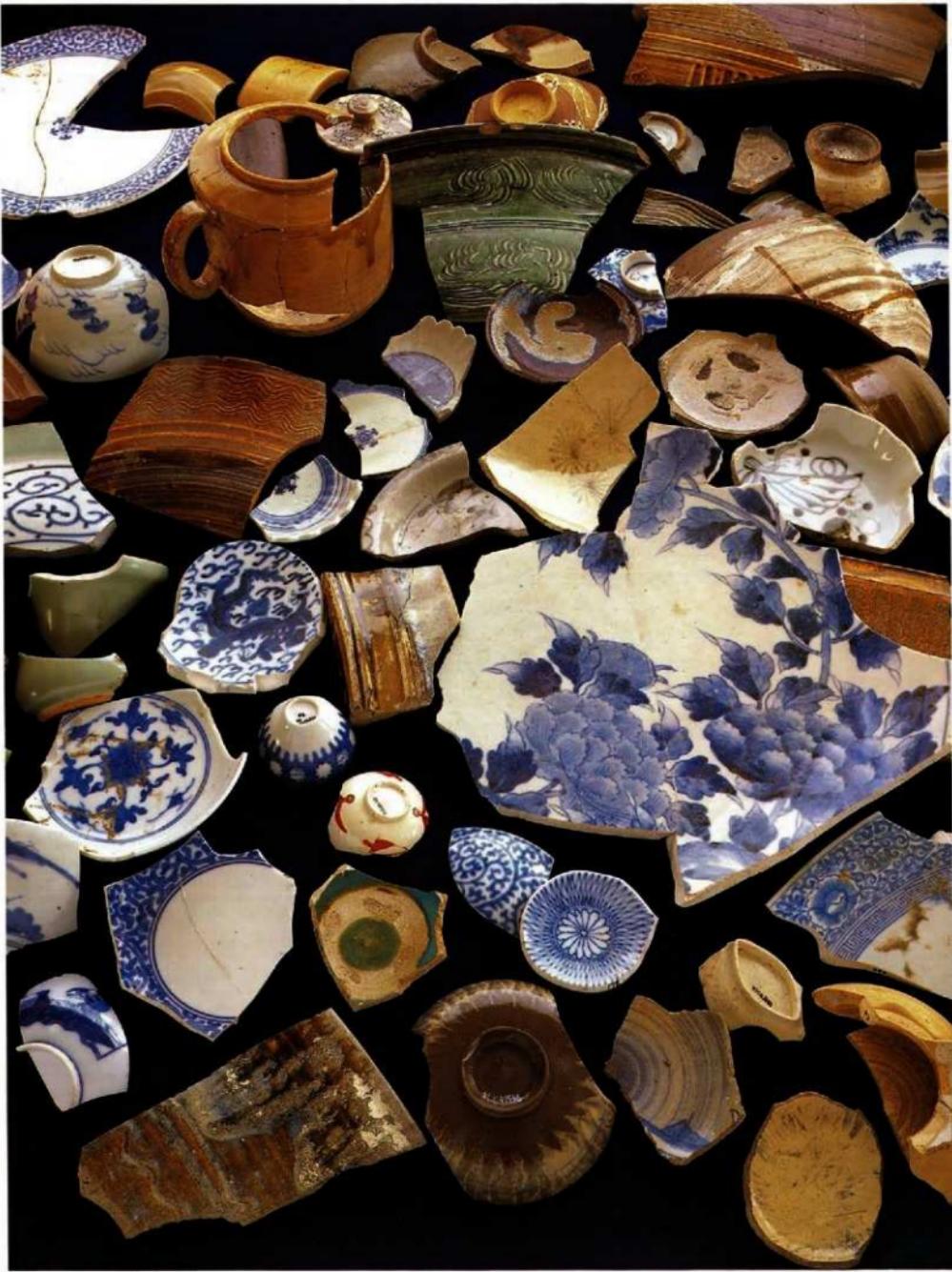
福岡市教育委員会

史 跡
福岡城跡
—東の丸の発掘調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第546集



平成 9 年
福岡市教育委員会



福岡城東の丸出土の陶磁器



序

黒田長政によって築かれた筑前国福岡城は、戦国期を代表する名城として昭和32年に国史跡に指定されました。博多湾に面して東西に堀をのばしたその姿が、優雅に飛翔する鶴の姿に似ていることから舞鶴城の愛称で市民に親しまれています。

本市では、「舞鶴城址将来構想」をもとに、市民の憩いの場として、また本市が果たしてきた歴史的な役割を具体的に理解、学習する場として活用されるよう年次計画を立て整備を進めていますが、域内で発見された浦臘館跡も第Ⅰ期調査区の発掘調査と環境整備が終了し、平成7年度に浦臘館跡展示館がオープンしました。館内に復元された建物や展示遺物などから、奈良・平安時代に繰り広げられた華やかな国際外交を偲ぶことが出来ることでしょう。

今回の発掘調査は、福岡城三の丸に建つ福岡高等裁判所付属舎と閑通施設の改築工事に先立って実施したものですが、当該地は史跡地や風致地区であることから、埋蔵文化財や環境を保護、保全することを第一の目的として発掘調査を行いました。

発掘調査によって、弥生時代から現代までの重要な遺構や遺物が発見され、この地の歴史が一層明らかになりましたが、福岡高等裁判所は、これを受けて地下の埋蔵文化財に影響のないような設計と慎重な改築工事を進めていただくことになりました。

発掘調査から本書の発行に至るまでは、多くの方々のご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。本書が史跡や埋蔵文化財に対する理解と認識を深める一助となり、また本市の歴史を研究する史料として広く活用していただけるように願っています。

平成8年11月30日

福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊



1 空から見た福岡城

例　言

1. 本書は国史跡福岡城にある福岡高等・地方・簡易裁判所合同庁舎（福岡市中央区域内1-2）の改築工事に伴い、平成6年（1994年）10月17日から平成7年2月24日まで実施した発掘調査の報告書である。
2. 福岡城の発掘調査は、城内、城外で平成8年度までに37か所で行われ、今回の調査は29次調査に当たるが、鴻臚館跡調査のように調査、目的がそれぞれ異なるために報告書の書名が統一されていない。発掘の次数や書名の整理が必要だが、今回は混乱を避けるため発掘調査地点を明記して、本書名を「史跡福岡城跡一東の丸の発掘調査」とした。
3. 造構、遺物の測量、実測、撮影、作図、および編集、執筆は力武卓治が行った。なお、各造構には数字の前に次のような記号を付けている。
溝状造構：SD　瓦溜め：SX　土壙：SK　その他：SA
4. 発掘調査によって弥生時代から現代までさまざまな遺物が出土した。掲載に当たっては、金属製品を除く陶磁器、土製品、ガラス製品などの遺物は縮尺を1/3に統一した。
5. 土器や陶磁器は、その種類の違いを示すために断面を網点などで区別した。須恵器は黒ベタ、磁器は白ヌキ、陶器は粗い網点、土製品、瓦類は密な網点に表現している。また陶磁器の一点破線は軸端を示す。
6. 陶磁器の文様、釉調などの表現は、実測図の線だけでは限界があり、またその実測には相当な時間を必要とするので、写真と並び合わせてその欠を補った。その省力化で得た時間を使って、できるだけ多くの点数を図化するように努めた。
7. 金属器については、福岡市埋蔵文化財センターに保存科学処理をお願いした。
8. 本書の作成に当たっては、多くの方々の援助を受けた。特に福岡城関連文献や瓦刻印の解説は文化財整備課の三木隆行さんに、陶器については福岡市美術館の尾崎直人さんと長崎県教育委員会の下川達也さんに、帽子については佐賀県有田町株式会社香蘭社の森知巳さんと株式会社セイブの福田正博さんに、ガラス瓶については養命酒製造株式会社の伊沢隆司さんより丁寧な教えを受けた。また文化財整備課鴻臚館跡調査担当の田中壽夫、瀧本正志、宮園富美枝さんには、事務処理、整理作業などの協力を受けた。ここに明記し、感謝いたします。
9. 発掘調査に関わる図面、写真などの記録類と出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管している。



「長政公像」重文 寛永9年（1632年）
(福岡市博物館)

本文・挿図目次

第1章　はじめに	1		
1. 発掘調査に至るまで	1		
2 福岡城絵図（正保3年）				
3 福岡城絵図（承保3年～元禄1年）				
4 福岡城絵図（文化9年）				
2. 福岡城のこれまでの調査	4		
5 これまでの発掘調査地点				
3. 東の丸の発掘調査	6		
6 空から見た東の丸				
7 昭和38、39年の発掘調査				
4. 試掘調査と発掘計画	8		
8 発掘区の設定				
5. 発掘調査の組織と構成	9		
9 試掘トレンチ				
10 試掘トレンチ実測図（縮尺1/200）				
第2章　発掘調査の記録	10		
1. 発掘調査の概要	10		
11 遺構配置図（縮尺1/300）				
2. A区の調査	12		
12 A区の遺構（西から）				
13 瓦溜め遺構の土層図（縮尺1/80）				
14 A区の遺構実測図（縮尺1/100）				
(1) 瓦溜め（SX-01）遺構	12		
15 瓦溜めの検出作業				
16 瓦溜め（東から）				
(2) 瓦溜め（SX-01）の遺物	14		
磁 器	14		
17 磁 小皿	18 鉢 皿	19 皿	20 裏底鉢	
陶 器				18
21 碗 蓋 植木鉢 徳利	22 檨鉢			
土 製 品				20
22 博多素焼				
瓦 類				22
軒丸瓦				22
23 三つ巴文瓦	24 三つ巴文瓦	三つ巴藤文瓦		
丸 瓦				24
25 丸瓦 刻印				
軒平瓦				25
26 軒平瓦(1)	27 軒平瓦(2)	28 軒平瓦(3)		
平 瓦				28
29 平瓦 敷瓦				
道具瓦				29
30 谷瓦 堆瓦				
3. B区の調査	30		
(1) 遺 構	30		

31	B区の全景				
32	B区の遺構（縮尺1/40）				
33	B2区の甕材と土層				
34	B区（西から）				
35	B区の土層図（縮尺1/80）				
(2)	A・B区（搅乱層）の遺物	32			
磁器		32			
36	碗 紅皿 盆	37 瓶	38 鉢 皿	39 鉢 盆	
40	鉢 蓋 瓶 壺	41 碗 青磁			
陶器		37			
42	碗	43 瓢	44 瓶 現川焼	45 鉢 尖入れ 植木鉢	
46	蓋 灯明皿 瓶 花生 髪水入れ	47 瓶 大鉢	48 遺鉢		
49	大鉢 壺				
土製品		47			
50	土師皿	51 烟壺壺	52 素焼き甕	53 土鉢	
ガラス製品		48			
54	ガラス製品				
石製品		49			
55	硯				
金属製品		49			
56	煙管・銅鏡				
磁子		49			
57	硯子				
瓦類		50			
軒丸瓦		50			
58	三つ巴文瓦	59 三つ巴文瓦 三つ巴藤文瓦			
丸瓦		52			
60	刺臼				
軒平瓦		53			
61	軒平瓦				
1.	C区の調査	54			
62	C区の遺構（縮尺1/300）				
63	C区の全景（北から）				
64	C区の全景（北西から）				
(1)	溝状遺構 (SD-05)	56			
65	溝状遺構の実測図（縮尺1/40）				
遺物		56			
66	須恵器 砕				
67	溝状遺構(1)				
68	溝状遺構(2)				
(2)	土 塚 (SK-04)	58			
69	土塚				
遺物		59			
70	磁器 博多素焼 瓦				
(3)	C区の遺物	60			
71	弥生土器 須恵器 壺器 陶器 携鉢				
72	布目瓦 軒平瓦				
73	硯石				
74	磁器 ガラス瓶				
第3章	おわりに	64			

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

筑前国黒田藩の居城であった福岡城は、黒田長政によって慶長6年（1601）から7年をかけて築城された。東側にのびていた外堀は、現在は埋め立てられ、福岡市のビジネス、商業の中心地として高層ビルが立ち並んでいる。また城内では、47を数えたという櫓のうち多門櫓、祈念櫓、塙見櫓（？）の三つを残すだけである。しかしそれでも石垣や土塁などの遺構は往時の姿をとどめ、城郭史上さわめて重要であることから、昭和32年8月29日に内堀より内側の482,496m²（約14万6千坪）が国史跡に指定されている。築城時のように、貝原益軒の『筑前国統風土記』に詳しく記録され、また城内では昭和26年から20回を超す発掘調査が行われており、その各報告書で詳述されているのでここでは繰り返さないが、発掘回数を重ねるたびに、新たな事実や疑問が提起されている。特に文献資料の発見やその研究はめざましく、これまでの学説の再検討が求められている。^{注1}

また、昭和62年12月、平和台野球場外野スタンド改修工事に伴って、中国産陶磁器や瓦類が出土した。この地は、昭和初期に九州大学医学部の中山平次郎博士が古代の迎賓館である鴻臚館を推定していたことから、福岡市教育委員会では、その全容解明を目指して本格調査を始めたことになった。昭和63年からは平和台野球場南側のテニス・バレーコートに場所を移し、重点的な発掘調査を行った。その結果、中国産陶磁器ばかりではなく、遠くイスラムの世界から運ばれてきた国際色豊かな遺物が大量に発見され、鴻臚館に行き来した遣唐使や外国使節たち、そして華やかに繰り広げられた外交行事を具体的に想像出来るようになった。まさに「海に開かれた都市」作りを目指す福岡市の象徴的な遺跡であることから、広く公開するために史跡整備を進め、調査で確認した3期の建物の平面表示と鴻臚館展示館を建設している。館内では、鴻臚館の復元建物や出土遺物などによって、鴻臚館や遣唐使が果たした歴史的役割を理解出来るようになっている。現在も発掘調査と資料整理を継続しているので、多くの市民が高い関心を寄せ、「鴻臚館ブーム」がいまも続いている。

今回の発掘調査は、福岡城三の丸東端の長方形に区画された部分に建つ福岡高等裁判所の付属舎などが改修されることになり、工事に先行して実施したものである。



2 福岡城絵図（「福博物絵図」正保3年 福岡市博物館）

注1 「福岡城関係資料年表稿」

「福岡城跡・N-内堀内壁の調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第237集 1991年

「福岡城の櫓」 福岡市教育委員会 1994年

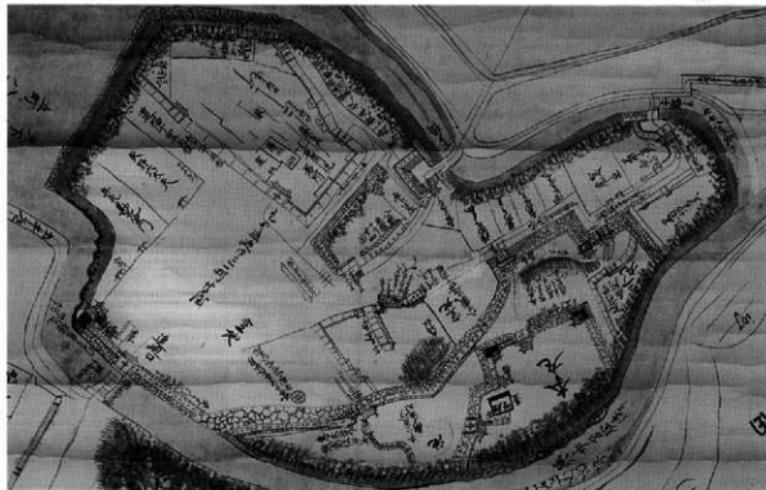
三木隆行 「福岡城物語」 「福岡城物語」 はかた学? 朝日新聞福岡本部編 翠書房 1996年

記録によるとこの一角は、黒田長政夫妻が慶長7年（1602）に本丸が完成するまで住んでいたことから、特に「東の丸」（本書でも以下この名を使用する）とも呼ばれていた。城主の移動後は座所となり、二代藩主黒田忠之は、ここで生まれている。その後の変遷を城絵図で追うと、正保3年（1646）、徳川幕府に提出するために作成された「福博懇絵図」では、三の丸の正面側と大堀側（現在の大濠公園）に「待屋敷」が11区画されているが、上の構御門から城内にのびる道より東側に当たる東の丸には特別な記入はない。承応3年（1653）～元禄1年（1688）に作成された「筑前国福岡城図」には、都庄太夫の家老屋敷になっていることが分かる。その後、元禄12年（1699）には吉田六兵衛太夫、延享3年（1746）には七左衛門、宝曆7年（1757）には吉田六兵衛太夫、そして幕末に近い文化9年（1812）の城絵図には、正面に久野外記ら6人の家老屋敷が並び、東の丸には家老立花平左衛門（4千石）の屋敷が描かれている。この屋敷地は東西50間に区画されているが、建物の配置や規模については明らかではない。

明治6年（1873）1月には、明治政府から花見櫓や塙見櫓、家老屋敷などの払い下げ願いが出され、同月に陸軍省の所管となり、昭和20年の終戦まで軍隊が駐屯した。陸軍施設の資料はほとんど失われているが、米軍の航空写真などによると、長方形区画の東の丸南奥には、厚いコンクリートの壁で防護した頑丈な建物がある。これは昭和17年に建てられた陸軍西部軍司令部で、終戦後はアメリカ軍が接収して憲兵司令部となり、昭和28年

〔福岡高等裁判所〕

1875年 明治6年	長崎市に長崎上等裁判所	1948年 昭和23年	西中洲の福岡県公会堂に移転
1882年 明治15年	長崎控訴裁判所に改称	1953年 昭和28年	城内の旧陸軍西部軍司令部（戦後はアメリカ軍憲兵司令部）に移転
1886年 明治19年	長崎控訴院に改称		
1945年 昭和20年	福岡市に移転し福岡控訴院に改称	1968年 昭和43年	高裁庁舎完成（10月）
	8月1日大名小学校を仮庁舎とする		【福岡地方裁判所】
1947年 昭和22年	裁判所法によって福岡高等裁判所設立	1876年 明治9年	長崎裁判所福岡市庁として開庁
	福岡地裁に同居	1888年 明治21年	現在の中央区役所の地に庁舎建設
		1890年 明治23年	福岡地方裁判所に改称



◆東の丸

3 福岡城絵図（「筑前国福岡城図」承応3年～元禄1年 九州文化史研究施設）

(1953) になって福岡高等裁判所に引き継がれ現在に至った。

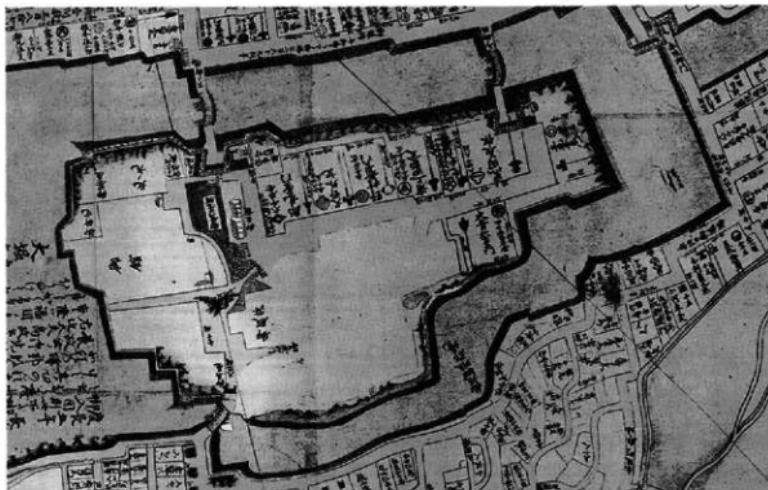
現在の福岡高等裁判所敷地には、昭和43年に建設された本館（地下1階、地上6階建、延面積18,069m²）と陸軍西部司令部だった付属舎（地上2階建、延面積1,722m²）、研修所（地上2階建、延面積599m²）、車庫（平屋建、353m²）があり、地方裁判所と簡易裁判所との合同庁舎になっている。福岡高等裁判所の沿革を地方裁判所と合わせて年表にした。

平成4年11月20日、福岡高等裁判所事務局長より文化庁長官宛に史跡福岡城跡現状変更（福岡高等裁判所庁舎改築）同意申請が提出された。庁舎の老朽化と狭隘化に伴い、本館の裏手にある付属舎とその周辺の施設を取り壊し、その部分に改築するという計画である。それによると、当該地が史跡地であり、また風致地区であることから、地下構造への影響、環境の維持などのために、選地、建物の高さや構造、工事方法、そして植栽などを検討、考慮した内容となっていた。さらに都市整備局が設置した「舞鶴城址将来構想委員会」の中間とりまとめによると、城内に点在する公共・民間施設は段階的に移転する方針が明記されていることから、裁判所は20年をめどに移転計画を進めることができた。

福岡市教育委員会文化財整備課は、改修建物の基礎が現在のものよりも浅く、また躯体の軽量化が図られるなど、地下構造への影響がなされていることから影響はないものと判断して福岡県教育委員会へ進立し、平成5年2月3日、文化庁次長より下記の4点の条件付きで同意する旨の通知が出された。

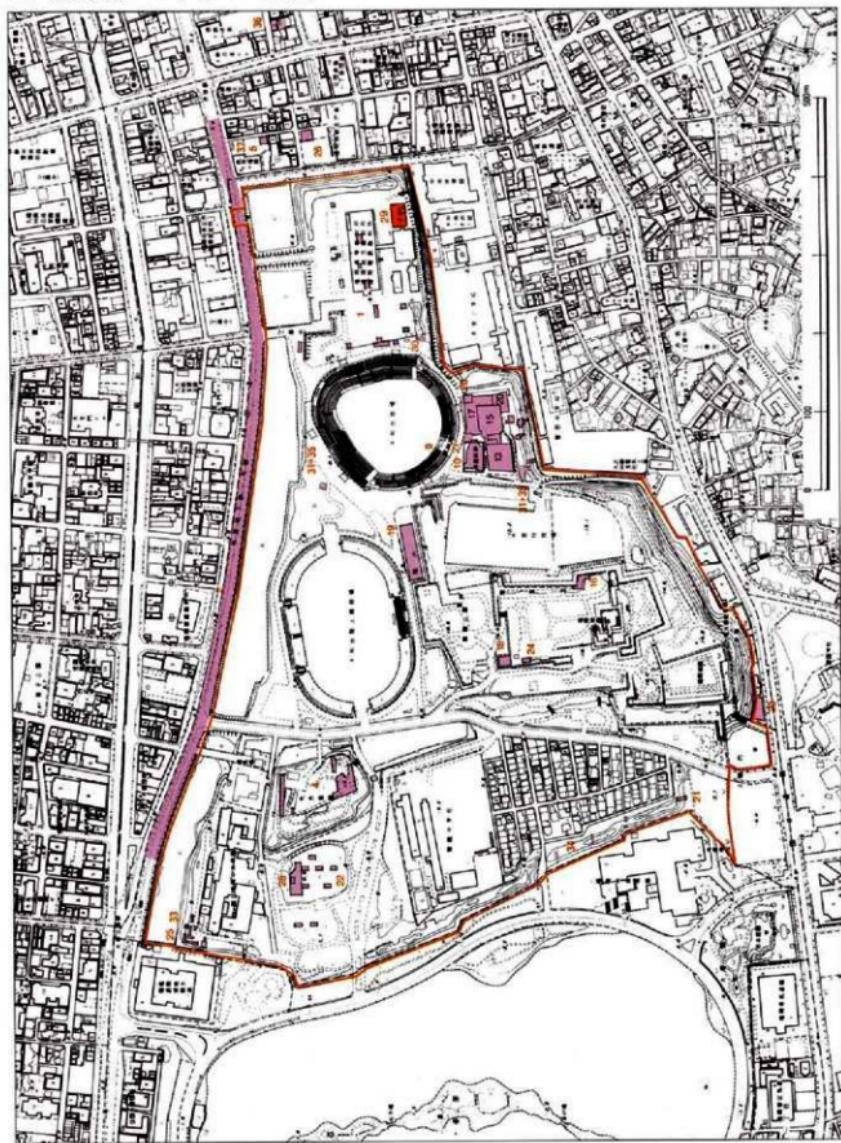
- 1 改築建物は平成25年3月31日までとすること。
- 2 工事着手は福岡市教育委員会による発掘終了後とすること。
- 3 発掘調査の結果、重要な遺構などが検出された場合は、設計変更などでその保存を図ること。
- 4 その他、実施にあたっては、福岡県教育委員会の指示を受けること。

一方、風致地区に関する協議事項も整い、平成5年3月には都市整備局公園緑地部（福岡市長）より福岡高等裁判所事務局長に計画通りに実施する旨の回答が出された。この後、発掘調査を担当する文化財整備課は、福岡高等裁判所（高裁と略記する）と協議を重ね、平成6年1月25日の試掘調査で遺構の保存状況を把握するとともに、本調査の期間、予算などを決定し、平成6年10月17月から発掘調査を実施することになった。



4 福岡城絵図(『福岡城下町・博多・近隣古図』文化9年 九州文化史研究施設)

2. 福岡城のこれまでの調査



5 これまでの発掘調査地点

福岡城跡調査一覧（平成8年度まで）

測定番号	次数	場所	地 区	史跡名	測定範囲	測定期間	文 書	「平和合戦古史料」	「平時防災保全施設等整備」
	A	二の丸中央部	史跡内	史跡内	510800-510900	3-10月	1-7.11	1 海野風説 2 福岡市教育委員会 3 福岡市教育委員会 4 福岡市教委員会 5 福岡市教委員会	福岡市教委員会
6 3 0 1 1	三の丸東部	史跡内	史跡内	史跡内	590026-590105	1	590026-590105	「福岡城跡調査二ノ丸東部」	福岡市教委員会
7 6 5 5 2	内堀内壁	史跡外	史跡外	史跡外	631007-631105	1	640327-640331	「福岡城内外石垣の調査」	福岡市教委員会
7 7 2 8 3	南堀内壁	史跡外	史跡外	史跡外	761201-771008	1	500	「福岡城内外石垣の調査」	福岡市教委員会
7 9 4 8 4	御殿櫓跡	史跡外	史跡外	史跡外	500031-500030	4	2,200	「福岡城内外石垣の調査」	福岡市教委員会
8 1 3 4 5	赤坂門北側周囲	史跡外	史跡外	史跡外	790719-790811	3 - 8	70	「福岡城内外石垣の調査」	福岡市教委員会
8 3 4 3 6	音含櫓跡	史跡内	史跡内	史跡内	840317-840512	4	36	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
8 4 1 9 7	飯前櫓跡	史跡内	史跡内	史跡内	840601-840612	7	580	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
8 5 5 3	飯前櫓東部	史跡外	史跡外	史跡外	850700-850800	9	150	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
8 7 4 7 9	二の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	871225-881210	11 - 14	650	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
8 8 2 9 10	三の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	880727-881210	10 - 21	856	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
8 8 4 0 12	内一階御土蔵	史跡内	史跡内	史跡内	880727-881210	10 - 21	500	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
8 8 5 11 12	内一階御土蔵	史跡内	史跡内	史跡内	881107-881205	12	650	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
8 9 1 0 13	二の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	890420-891207	11 - 21	1,200	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
8 9 0 5 14	二の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	891011-890121	13	700	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 0 0 5 15	二の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	900409-910131	11 - 21	1,300	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 0 6 5 16	11月備防	史跡内	史跡内	史跡内	910309-910331	15 - 21	190	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 1 3 0 17	二の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	910501-920531	16 - 21	1,000	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 1 4 6 18	特種跡	史跡内	史跡内	史跡内	920601-920631	17	250	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 2 1 8 19	二の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	920615-920631	17	1,670	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 2 3 6 20	二の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	930910-930931	17 - 21	430	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 2 6 2 21	花見櫓跡	史跡内	史跡内	史跡内	200	-	200	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 3 2 6 22	三の丸西側部	史跡内	史跡内	史跡内	450	-	500	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 3 4 5 23	通称「門間櫓跡	史跡内	史跡内	史跡内	220.3	-	531213-540228	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 3 5 3 24	小丸石櫓跡	史跡内	史跡内	史跡内	80	-	931211-931211	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 3 5 3 25	通見櫓跡	史跡内	史跡内	史跡内	65	-	940301-940328	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 4 1 2 26	通見門柱	史跡内	史跡内	史跡内	430	-	940325-940331	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 4 2 0 27	三の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	50	-	940306-940331	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 4 3 2 28	三の丸西側部	史跡内	史跡内	史跡内	850	-	940301-940331	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 4 5 1 29	三の丸東側部	史跡内	史跡内	史跡内	1,226	-	940301-940328	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 4 6 3 30	三の丸南側部	史跡内	史跡内	史跡内	60	-	950301-950317	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 5 3 7 31	三の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	300	-	951101-950329	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 5 4 6 32	中櫓	史跡外	史跡外	史跡外	154	-	951211-950329	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 5 6 1 33	二の丸西側部	史跡内	史跡内	史跡内	500	-	960301-960329	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 6 7 1 34	二の丸西側部上段	史跡内	史跡内	史跡内	32	-	960601-960702	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 6 8 0 35	二の丸中央部	史跡内	史跡内	史跡内	450	-	960704-961204	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 7 3 0 36	門前櫓	史跡外	史跡外	史跡外	10	-	960912-960912	「筑前国御殿城二ノ丸東に付する附郭」	福岡市教委員会
9 6 3 9 37	本城門外側	史跡外	史跡外	史跡外	37	-	-	-	-

* 文部省より参考文献一覧に対応する。

【調査報告・文献一覧】

3. 東の丸の発掘調査

現在の福岡高等裁判所の庁舎建設に先立って、福岡県教育委員会は2次の発掘調査を行っている。

1次調査は、築城前の旧地形を明らかにし、奈良・平安時代造構の確認をするという二つの目的を掲げて、昭和38年（1963）10月7日から11月5日まで実施された。図7のように $4 \times 4\text{ m}$ のグリッドをA1からD2までの13か所に設定し、造構の検出が行われた。2次調査は、高裁庁舎の解体を待って実施されたもので、本館の東部にE1～E9のグリッドを設け、主に家老屋敷の造構検出に目的が置かれた。

これら2次の発掘調査は、敷地内の全面調査ではなかったが、次のような多くの成果が得られている。

1. 旧地形について

築城前には、3か所に小高い丘があり、本丸は、赤坂山からのびた丘に造られ、黒田如水の隠居地となった御簾屋敷と東の丸東半の丘は削平された。東の丸西半と本丸東端（現在の鴻臚館展示館のある付近）との間に、幅約200mの広い谷があって、東西の丘を切り崩した土で埋め立てた。その埋土は、古第三紀早良層群下半の浦谷層の表層部の風化土で赤色化している。高裁東半のグリッドの地山は赤色化した風化土ではなく白色か黄褐色であることから、もとは標高15m程（現在標高8.2m）の丘であったと推定される。したがって高裁東半には、福岡城以前の造構は残っていない。

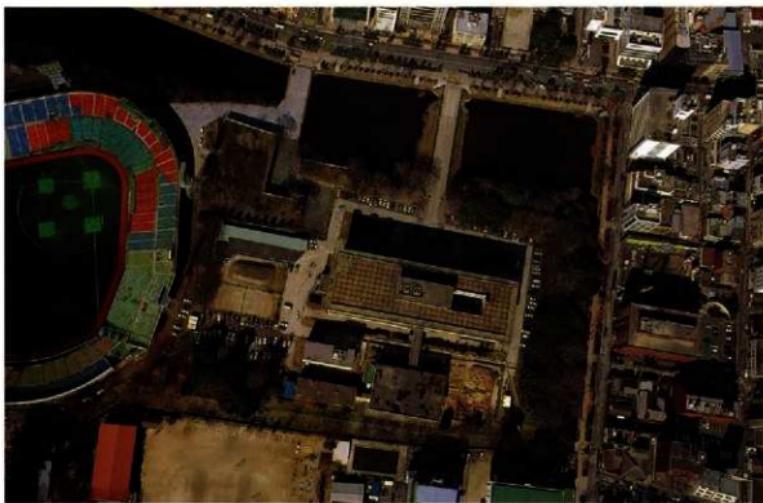
2. 奈良・平安時代（鴻臚館関連）の造構について

この時期の遺物は調査対象地の西寄りで多く出土したが、谷を人為的に埋めた土の中なので、造構に伴うものではない。

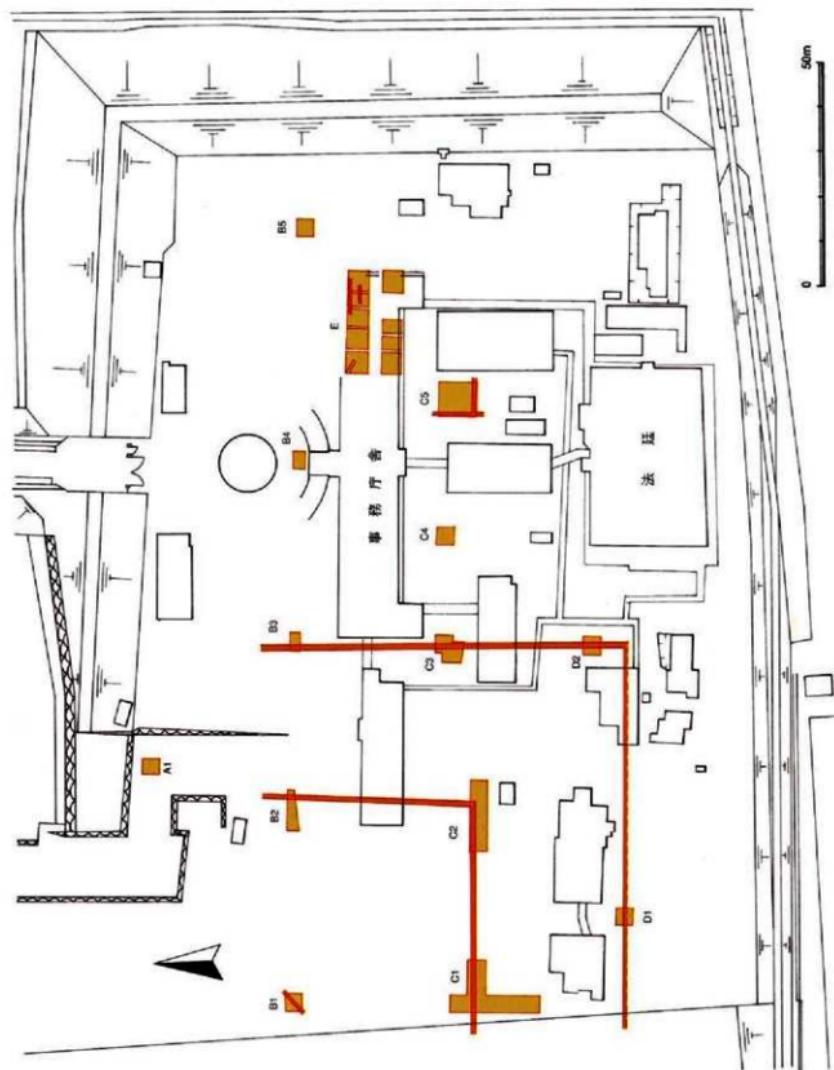
3. 福岡城関連造構について

城絵図では上の橋御門から入って西に直角に折れて本丸に向かう道が描かれているが、発掘によって石築の側溝や石列が実際に発見され、道の存在を実証するとともに、福岡城造構の保存が良好であることがわかった。

このような知見は、昭和63年から始まった鴻臚館の本格調査に大いに役立ち、鴻臚館の整地作業や範囲などを考える上で貴重な資料となっている。



6 空から見た東の丸



7 昭和38、39年の発掘調査

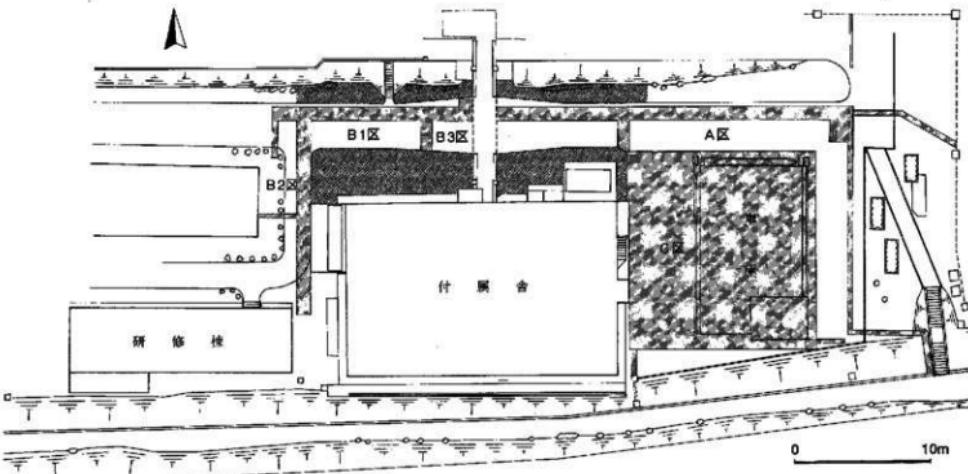
4. 試掘調査と発掘計画

高裁は改築場所を、最初は庁舎西側のテニスコート付近に考えていたが、湧蓮館や福岡城関連遺構の存在が予想されることから、昭和38・39年にすでに調査が終了し、また旧陸軍施設などで破壊され遺構の存在が薄いと判断して、現在の付属舎を中心とした場所に変更した。しかし、福岡県教育委員会による調査は、旧庁舎部分に限られており、またその後の湧蓮館跡調査区では、旧陸軍施設の下にも良好な状態で遺構が残されている場合が多く、改築計画場所でも同じ可能性が出てきた。そこで平成6年1月25日に付属舎と車庫の間に長さ27m、幅1mのトレンチを設定し、遺構の遺存状態、遺構の種類、遺構面の深さなどの確認作業をすることにした。

コンクリート舗装を剥がすと、砂利まじりの整地層があり、北側ではこの下に地山である風化頁岩が現れた。地山は南の中央区体育館側にわずかに傾斜し、建物のコンクリート基礎で搅乱を受けているものの、トレンチの中央と北側で不整形形や溝状の落ち込みが数箇検出された。これらの中には江戸時代の陶磁器片を出土するものがあり、城絵図に描かれた家老座敷の遺構が一帯に広がっているものと考えられた。

高裁の改築計画によると、平成7年の付属舎の解体から始まり、研修棟・車庫などを年次的に進め、平成11年3月に完了する。このため発掘調査を工事工程に合わせて平成6年度と平成10年度の2期に分けて実施し、その間にⅠ期発掘調査の整理作業を済ませ調査報告書を作成、発行することにした。

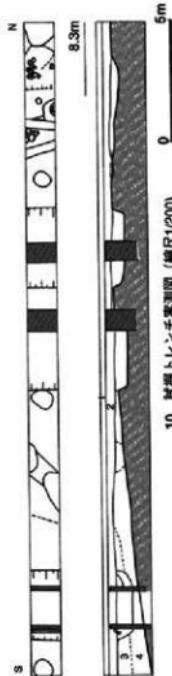
年 度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度
T.事 内 容	車庫解体	付属舎解体 建設		研修棟解体	車庫建設	
発掘・整理	初期発掘調査 （10月～2月）	資料整理	整理・報告書発行	中期発掘調査 （3月～6月）	整理・報告書発行	



8 発掘区の設定



9 試掘トレンチ（北から）



10 発掘トレンチ素描図 (縮尺1/200)

5. 発掘調査の組織と構成

調査委託 最高裁判所

調査受託 福岡市

調査主体 福岡市教育委員会文化財部文化財整備課

調査庶務 文化財整備課 後藤晴一 市毛智子 深田 文

調査担当 文化財整備課 力武卓治

発操作業 林 和之 岡野民枝 小松富美 岡部静江 石橋テルエ

石川洋子 三浦 力 遠藤貞子 越智信孝 池田省三

中川敏男 蘿野保夫 蘿野信子 羽岡正春 平井武夫

小林義徳 別府俊一 松永正春 田中トミ子 林厚子

水田ミヨ子 山本良子 茨木浩一 宮本順子 鶴尾美佐子

桑野正子 姉野裕美 清永啓子 春田真美 藤野真紀

江田のり子 山野祥子

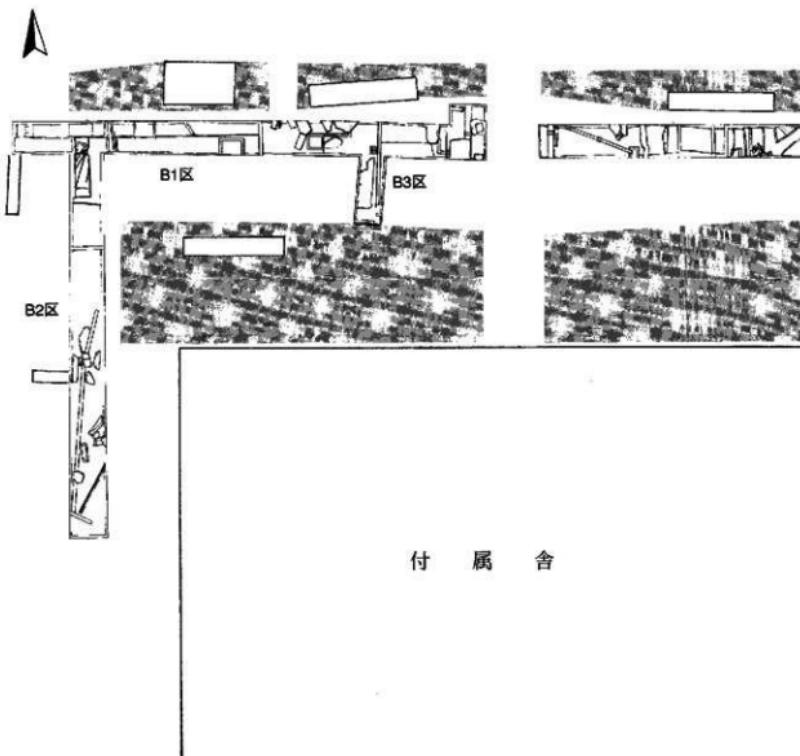
土層名
1.コンクリート構造
2.砂利
3.砂質地盤
4.粘質地盤

第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要

I期の発掘調査面積は、改修工事区である付属舎前（B区、付属舎本体部は基礎工事で破壊を受けて遺構は存在していない）と車庫（C1、2区）、および風致地区的協議事項の一つである樹木（桟など）の移植地（A区）の合計1,024m²である。さらに発掘途中になって電気、上下水道などの管埋設部の252m²が追加された。発掘調査は、改修工事の手順に対応しながら発掘区ごとに進めることになり、まず付属舎正面両側の樹木を移植するためにA、B区から着手した。

A区は、本館と付属舎の間にあり、芝が張られ一部が花壇に利用されていたことから、遺構がよく残っているものと期待されたが、表土を除去するとコンクリート基礎が現れ、またその北側は、本館地下の建設で深く掘り下げられており、遺構は確認できなかった。樹木の移植にはあまりにも搅乱が激しく不適であることから、C区北側で移植先を探して小グリッドを数か所に設けた。

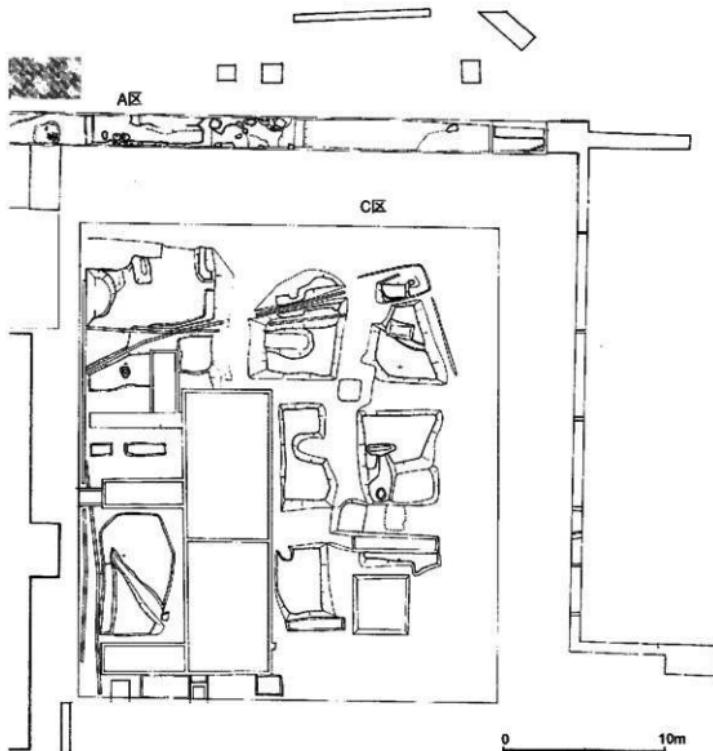


11 遺構配置図 (縮尺1/300)

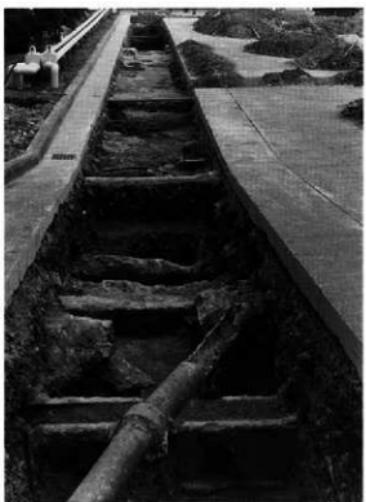
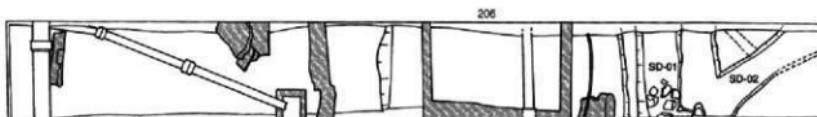
B区は、10数本の横が並び、しかも研修棟や弁護士公館への排水施設や水道管などの埋設物が縦横に走り、しかも付団舎建設時の基礎工事で遺構は消滅していたので、発掘途中に追加された管埋設部に発掘操作業の中心を切り換えることにした。この変更に伴い調査区の名称も本館への渡り道路から東をA区、西をB区と呼び変えた。

新しい発掘区であるB区は、搅乱を受け、地山面も相当な削平を受けてたが、A区では、地山面の残りがよく、東半部で土壠、溝、瓦留め（SX-01）などの遺構を確認した。両区とも江戸期を主にして多量の遺物が出土た。

C区は、車庫と試掘トレンチを設けた付団舎との間の空き地が対象地である。現在の車庫が平屋であることから、I期の発掘区では遺構が最もよく残っている可能性が強く、計画地全域を面的に発掘することにした。コンクリート鋪装のすぐ下で試掘の所見と同じように地山面が現れ、予想もしなかった古墳時代の溝（SD-05）を発見した。



2. A区の調査



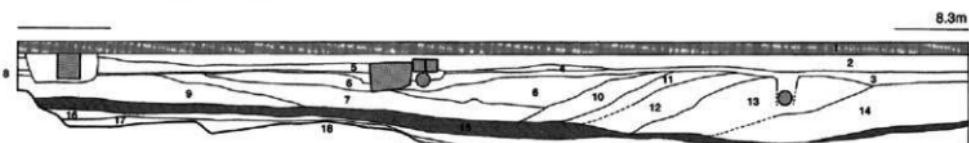
12 A区の遺構（西から）

本館と付属舎の間には切り通しを挟んで東西方向の通路がある。この道路の北寄りに本館と平行して各種管が埋設されることになり、幅2m×長さ約40mの発掘区を設定した。東端から南に直角に延びているトレンチは、水道管の埋設部である。また、横の移植先を捜した小グリッドなどを合わせてA区とした。

(1) 瓦溜め（SX-01）の遺構

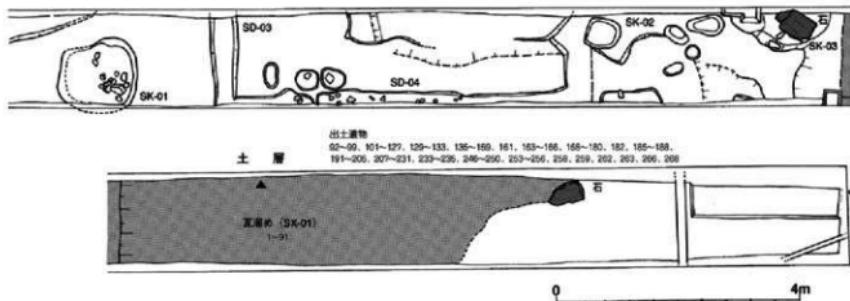
発掘区の西端には、径30cmのコンクリート管が横断し、さらに一回り小さいコンクリート管が受け枠まで斜めに延びている。また付属舎への渡り通路より東へ約10m付近までは、建物のコンクリート基礎や鉄管などによって深く掘り返されているために、地山は地表より1.1mでようやく現れる。この部分には明治期以前の遺構は認められなかった。これらの埋設管、建物基礎は、昭和43年以前の旧高裁庁舎や旧陸軍時代のものと考えられる。

地山は、発掘区中程で地表から60~80cmと浅くなり、これより東にかけて溝、土塙、小ピットなどの遺構が分布している。SD-01~03は、逆台形断面で10cm前後の浅い溝状の落ち込みである。SD-04も同じように深さ10cm足らずの東西方向の落ち込みで、江戸期の平瓦や陶磁器破片が出土した。土壤としたのは3基あり、遺物から江戸期と考えた。特にSK-03の上には切り石状の花崗岩が乗っており、1個だけなので断定は出来ないが、城絵図にある家老屋敷の礎石の可能性が強い。地山はここで一段落ちて、東に向かって次第に傾斜し、長さ約12mにわたって多量の瓦類が堆積しているのが発見された。その厚さは約20~30cmもあり、まさに瓦溜めのような状態を示している。後で詳述するように、軒平瓦、谷瓦など各種の瓦が含まれ、屋根から一度にずれ落ちたことも考えたが、間から陶磁器類などの生活道具も出土し、またこの部分の土層観察によると、上層は水平ではなく東西からの傾斜が強く、意図的な人工堆積を示している。おそらく瓦類を短期間に投棄し、まず東から



13 瓦溜め遺構の土層図（縮尺1/80）





14 A区の遺構実測図（縮尺1/80）

灰茶色土を埋めた後に、次は西から埋め戻したようである。いずれにしても、明治6年に政府から家老屋敷払い下げの願いが出されており、廃城時の家老屋敷屋根の構造や当時の生活のようすを明らかにできるものと期待された。

次にこの瓦溜めから発見された陶磁器や瓦類などの遺物を図示し、個々の特徴や法量を記す。

なお、この瓦溜め遺構以外から出土した遺物については、B区の遺物と別に一括した。



15 瓦溜めの検出作業

土層名

- | | |
|------------|-----------|
| 1. コケート・鉢装 | 10. 灰茶色土 |
| 2. 砂利 | 11. 灰茶色土 |
| 3. 黄茶色土 | 12. 灰褐色土 |
| 4. 灰色土 | 13. 灰褐色土 |
| 5. 黄茶色土 | 14. 灰茶色土 |
| 6. 茶色土 | 15. 遺物層 |
| 7. 灰茶色土 | 16. 褐色土 |
| 8. 灰色土 | 17. 黏質褐色土 |
| 9. 茶色土 | 18. 地山層 |



16. 瓦溜め（東から）

(2) 瓦窯め (SX-01) の遺物

瓦窯めからは、コンテナに収納して瓦類が30箱、陶磁器類が5箱、土製品が2箱出土した。できるだけ多くの遺物を図化するように努めたが、磁器29点、陶器13点、土製品7点、瓦類41点の合計90点の実測に止まった。また発掘した面積も狭く、かつ図示した遺物も実測可能な大型破片や種類の異なるものを選択、優先したので、もとより瓦窯めの構造を十分に語れるものではない。

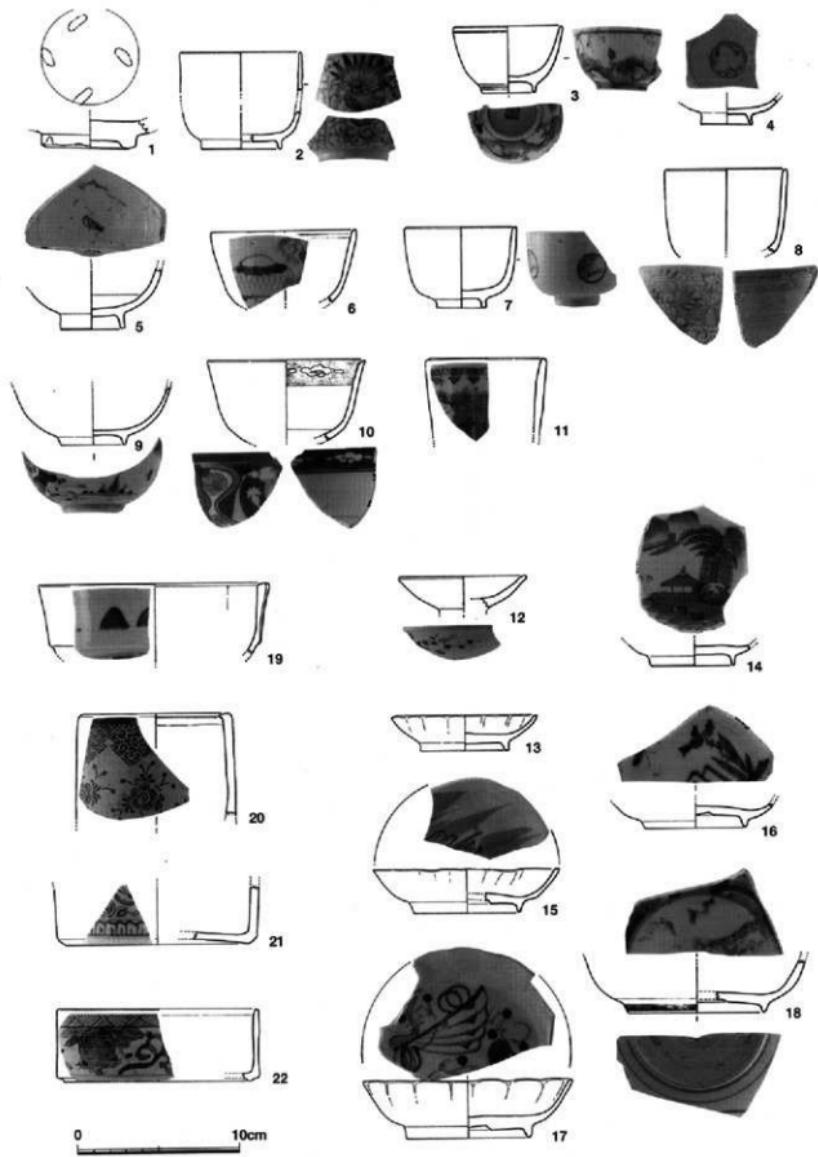
磁器 (1~29)

今回の発掘によって出土した陶磁器は、磁器と陶器に大きく分け、さらに器種別に並べている。これらの多くは、佐賀県有田町を中心とする肥前系、筑前黒田藩の御用窯である高取焼や民窯の小石原焼など地元近隣で生産されたものである。本来これらの地域や窯ごとに製作時期を判断して記述すべきだが、今回はその検討作業を十分に済ませることができなかった。

1は中国産青磁。灰色の緻密な胎土を使った碗の底部で、背の低い高台が削りだされている。高台径は5cm、灰緑色の釉薬は高台内まで垂れているが疊付だけが露胎となる。見込みには重ね焼きの目跡が4個、高台内には粘土が残っている。2~29は白磁染付である。2はいま接合しないが、同一個体なのである。図化すると口徑7.6cm、高台径5cm、器高6cm前後の筒形に近い湯飲み碗が復元できる。胴部はほぼ直立し、そのまま口縁となる。胴部外側の全面に唐草と鬼面のような文様を細かな線で描き、口縁部内面に連続四角文を巡らしている。ただ呉須の発色が弱いのか黒みを帯びている。釉は全体に均一にかかっている。3は口徑7cm、丸形の胴部に底径3.6cmの小振りな高台がつく。外面の染付は意味が分からぬほど簡略化されている。高台内の角幅もくずれている。4は小型の湯飲み碗を考えたが、胴部への湾曲が緩やかに開くことから、別の器形の可能性もある。見込み内底に丸い筆跡の染付がある。5は口縁部を欠いているが、胴部は半球状で瓶頸に近い。内外に染付文があり、見込み内底の文様は意味不明。6は口徑9.2cm、外面に火鉢様の文様を描く。呉須は灰黒色に近い発色である。7は口径6.8cm、器高5cm、外側に丸にスキ模様の草を配している。8は口径7.6cm、ほぼ直立する胴部の外側には花唐草、口縁部内面に雷文の帶を巡らせる。釉薬をかけた際の横方向の条線で文様が薄くなっている。9は口縁部がないが瓶頸であろう。径4cmの高台は背が低く、器壁も薄手の作りである。外面の絵柄は緻密な山水文で、岸辺に家屋や十刹、沖に帆掛け船などで構成している。10は口径9.8cmの碗。胎土は純白に近く、口縁部は端反り碗のように小さく外反する。口内面に雲母の帶、外面は呉須の濃淡を利用している。ただ小破片のために文様全体は不明。11は口径7.6cm、小破片で形状を知りえない。やや厚手の胴部はわずかに外に開きながら、口縁部上面は微妙に外に傾いている。胴部外側は細かな青海波文、口縁部下には輪宝翼文の帶を巡らしている。明治期以降の印判染付。12は口径8cmの皿、釉はわずかに灰色がかり、内外面に小枝を描きだしている。13は口径9cmの皿、型打ちで菊花のようになっている。口縁部は茶色の口紅で輪花となる。14は見込みに山水文を描いている。高台径5.2cmの皿。まったく類似する意匠の皿がC区の土壙 (SK-04) から発見(275)され、それが型押し皿であることから本例も同じ技法の皿であろう。15~18は蛇の口形高台の皿である。15は型押しで、見込みに山水文を呉須の濃淡を使い分けて描く。口径は11.6cmに復元できる。16は高台部の破片だが、おそらく型押しで、見込み内底には、中央に源氏香文風の絵柄があり、その横に草花、横に蝶が舞っている。また、目跡が2個認められる。高台径6.4cm。17は口徑13cmの皿で、16に比べてやや大振りの型打ち皿である。見込みに4個の目跡があり、腹やかな文様を描いている。内外とも大きな貫入がある。18の高台径は8.4cmで、17よりも大きくなる。胴部外側には唐草文、内側の染付は呉須に濃淡をついている。内面の文様は細かい、棒の船上人の手前に柳、水面の向こうになだらかな山並みを描いている。19は14.4cmの口徑を復元したが型打ちなので不確かである。器形は不明。20の口径は9.2cmで、型紙彫りで桜様の細かな絵柄となっている。口縁部は内側に小さく突出し、火入れか。21は底径12.4cmで高台がない。

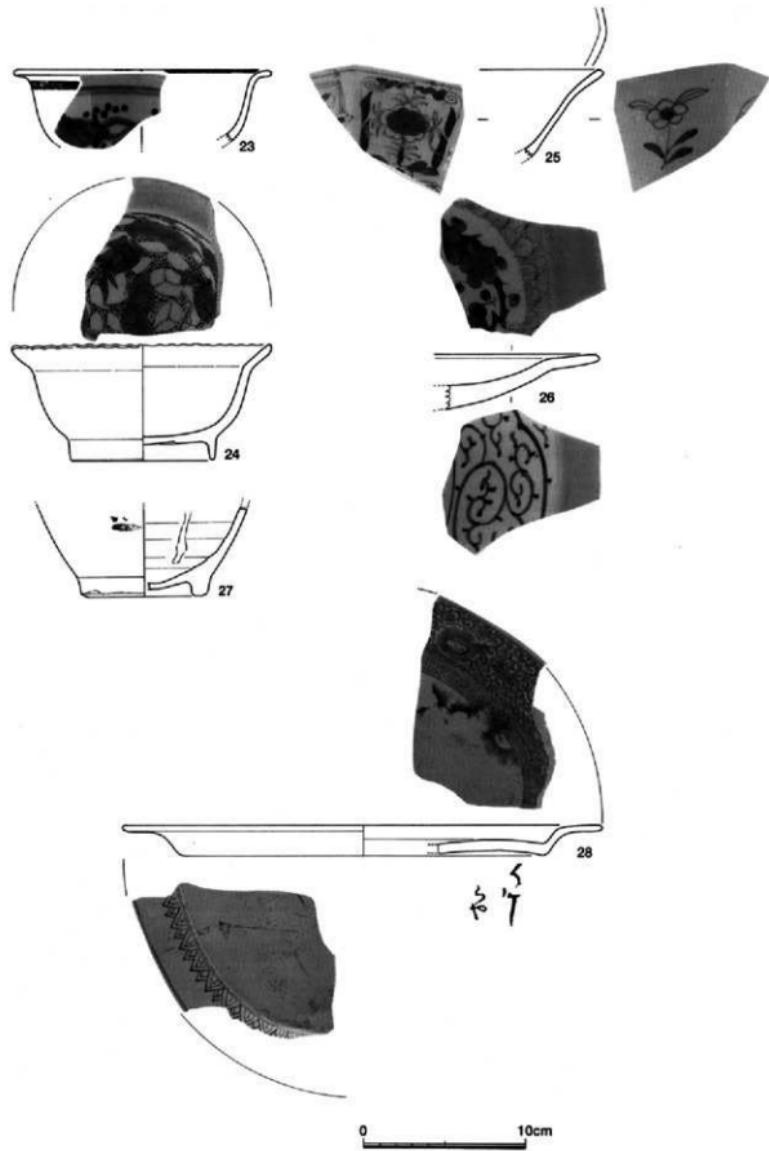
註2 大橋康二 「肥前陶磁」 考古学ライブラリー 55 ニュー・サイエンス社 1989年

註3 尾崎直人 「筑前の匠たち・筑前高取焼」 「福岡城物語」 はがた学? 朝日新聞社本部編 番書房 1996年

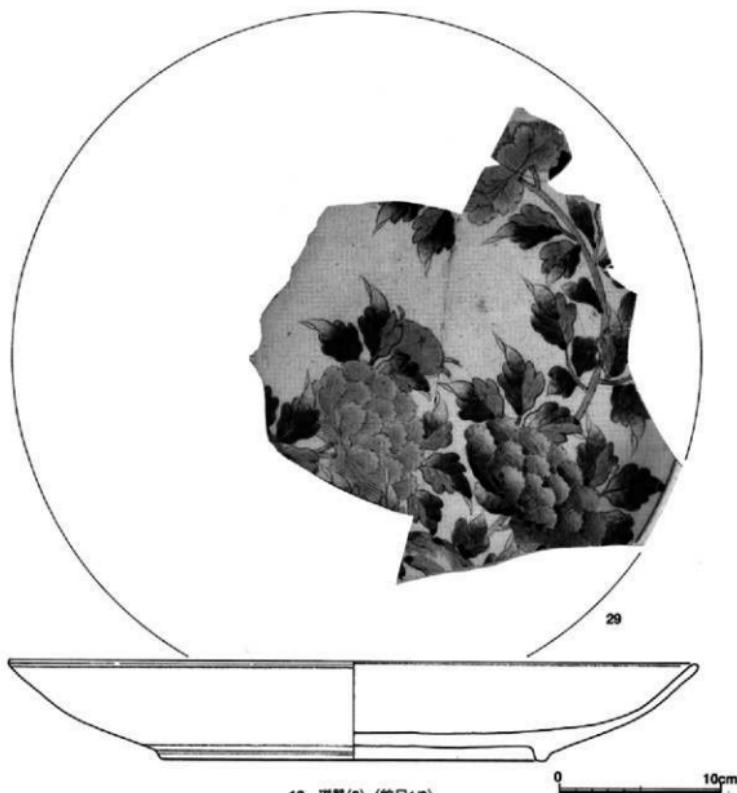


17 磁器(1) (縮尺1/3)

註4 『中野上の原古窯跡』 小石原村文化財調査報告書第3集 小石原村教育委員会 1990年

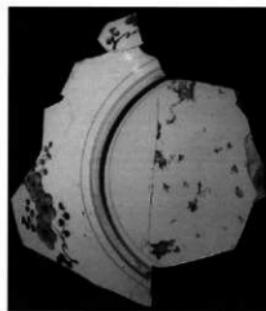


18 磁器(2) (縮尺1/3)



19 磁器(3) (縮尺1/3)

器形不明。22には小さな高台が付く。口縁部下に連続網目文の帶、胴部に果実と唐草文を灰黒色の舟須で描くが、8と同じように横に刷れたようにしている。段重か。23~25は鉢。23は丸みのある胴部にほぼ水平な口縁部が付く。内面に1条、屈曲部外に2条の横線を入れる。復元口径は16cm。24は蛇の目四型高台は背が高い。口径16.2cm、器高7.1cm、口縁端は輪花で細かく波うっている。見込み内底は松葉文の染付だが、釉は口縁部内側から高台外側まで青磁釉がかかる。25は八角形の体で、その面ごとに文様があり、内側は棒の中に草花、外側は草花と窓の組み合わせである。26は口径を復元できないが、底部近くは分厚い器壁であること、見込みの深さが浅いことなどから大型の皿を考えた。口縁部の内外は、やや青みを帯びた釉を加えているが、うまく焼成されていない。見込みは梅、外側の裏文様は唐草の染付である。27には裏文様の一部が認められることから染付瓶とした。体部からそ



20 裏底鉢

のまま削り出した高台は径8cmで、縁付きには微粒子の砂が接着している。内面は露胎であるが、底部近くまで釉が垂れている。28は口径29cmの皿に復元しているが、口縁部が整った円形でないこと、中央部に穴が開いていることなどから、別の器形、用途を考えるべきであろう。口縁部内側には花唐草文、肩曲部には雷文の帶を巡らせている。これに接して極小の点と薄い鼻須で半月を描いている。底部に平仮名混じりの墨書きがあるが解説はできなかった。29は口径43cm、高台径24cm、器高6.2cmの大皿。見込みには大輪の牡丹が見事に描かれている。濃淡をつけた花びらや葉は、絵付け職人の確かな腕をよく表している。裏文様は梅、高台内には5個の針(ハリ)跡があり、「太明成化年製」の2行6文字の銘は、大が太になり、成や年もかなり崩れている。

陶 器 (30~43)

13点の陶器を図示した。釉の色は、その色調で表示したので、釉薬の材料の名称ではない。

30の高台径は4.4cm。浅鉢のように図示したが、碗の蓋か。内面は茶褐色釉、外側は薄い茶褐色釉の上に白色釉を文様風に垂らしている。31は淡い黄色をした胎土を使っている。平坦な底部は露胎で、他は灰緑色の釉がかかり、肩曲部には釉溜まりが波状に連続して並び、文様と同じような効果が出ている。垂壺のように特異な姿であるが器形、用途は不明。32、33は土瓶の蓋であろう。32の径は7.5cmで、外側に灰色釉をかけた上に白色釉を乗せ、褐色釉で文様を線描きしている。胎土は灰色、かなり緻密である。33は径6.4cm、宝珠形の摘みを持つ。白色釉の流しの上に黒色の草花文が描かれるが、表面が気泡状になっている。34は底部中央に直径1.2cmの穴が穿たれていますから木鉢とした。灰色の胎土は緻密で焼成もよい。削りだし高台には半円形の削込みがある。底径6.5cm。胴部には2条の沈線が巡り、ここまで濃緑色の釉がかかる。36は砂粒が混じった粗い胎土で、ほぼ平坦な底部である。底径11.6cm、褐色釉は底部外面以外の内外面にかかる。37は平坦な底部から胴部はほぼ直立する。口径27cm、器高6.8cm 濃緑色の釉が全体に厚くかかり、口縁部の上端から外側に灰色釉が流れている。38は完形でないが、ほぼ接合復元できた。筒形の胴部に把手がつくことから一方に注ぎ口をつけた水注と思われる。頸部は内側に水平近くに肩曲し、小さく直立する口縁部を作る。口径7.8cm。本来は蓋つきか。内面は純継挽きの凹凸が目立つが、外面は調整で滑らか。胎土は黄色を帯びた白色で、堅い焼成となっている。釉は口縁部と底部を除いた内外面に施釉され、釉垂れが趣を添えている。胴部外面の4条の沈線には釉が厚く溜まり、薄い灰緑色となり細かな貫入がある。胴部最大径は11.7cm、底径10cm。底部はわずかに上げ底で、直径1cmの二つの輪を重ねた刻印がある。39の胎土は赤褐色で、2mm大の砂粒を含んでいる。胴部中程がわずかに折れ、その上下に竹節状の稜がつく。上方に橢円形の粘土を貼りつけている。器種がわからないが徳利状の瓶か。40の胴部は筒状で、下部で強く屈曲している。胴部の上、中、下に沈線を巡らせ、中央部に親指の溝がある。釉は黒みを帯びた濃緑褐色で、内側は中央より下は釉垂れとなり、その端は黒褐色に近い。外面とも小砂粒が吹き出している。胴部最大径は16cmを測る。福岡県朝倉郡小石原村中野^{註5}上の原古窯^{註6}と福岡市早良区藤崎遺跡などから出土したいわゆる竹徳利に特徴がよく類似している。41は口径44cmの大型盤の口縁部で、内側に断面台形の粘土を貼りつけて肥厚させている。胎土は赤茶色で、外側は褐色釉をかける。42、43は擂鉢。42は八字状に外に聞く高台を張りつけている。端部は丸みがあり、ここだけ露胎。高台径12.4cm。胎土には小砂粒を含んでいるが、焼成はよい。褐色釉が全体にかかっているが、高台内は雜である。43の高台径は12.6cmあり、高台は42と大差がないが、より直立して背が高い。胴部は直線的にのび、内面に御園で粗い卸し目を入れている。胎土には2mm大の砂粒を多く含んでいる。

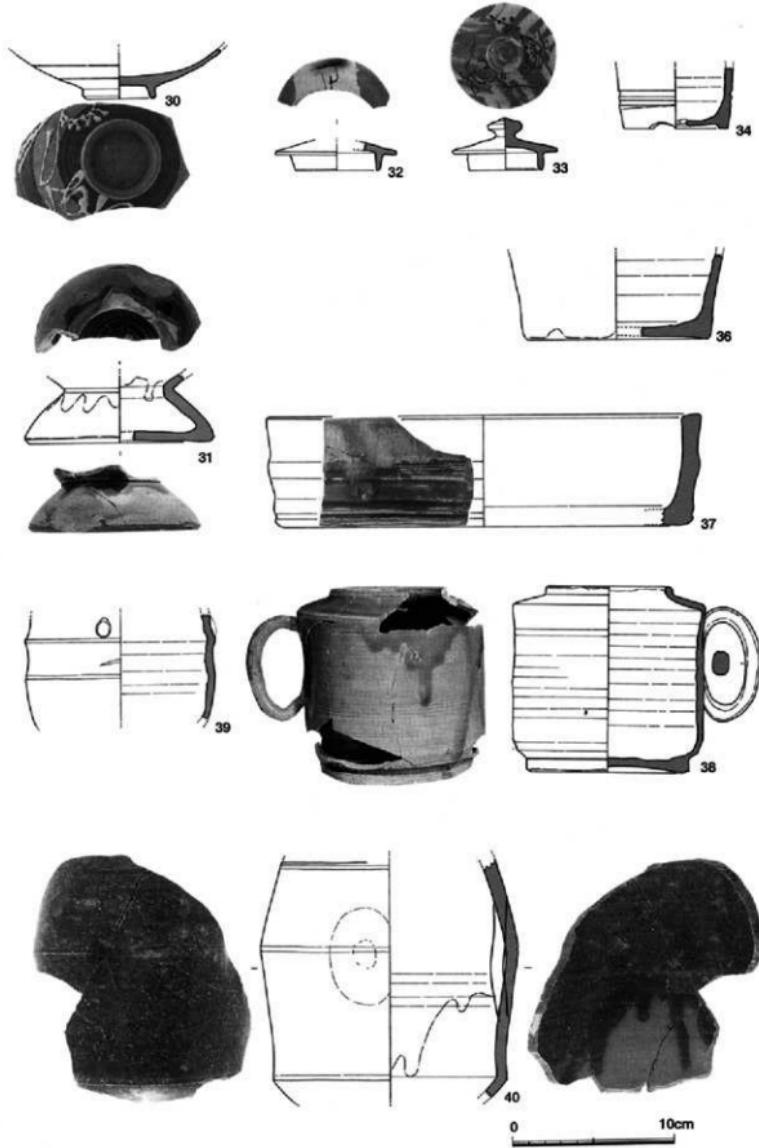
土製品 (44~45)

無釉で、かつ低温で焼成された素焼きの遺物を土製品として扱う。

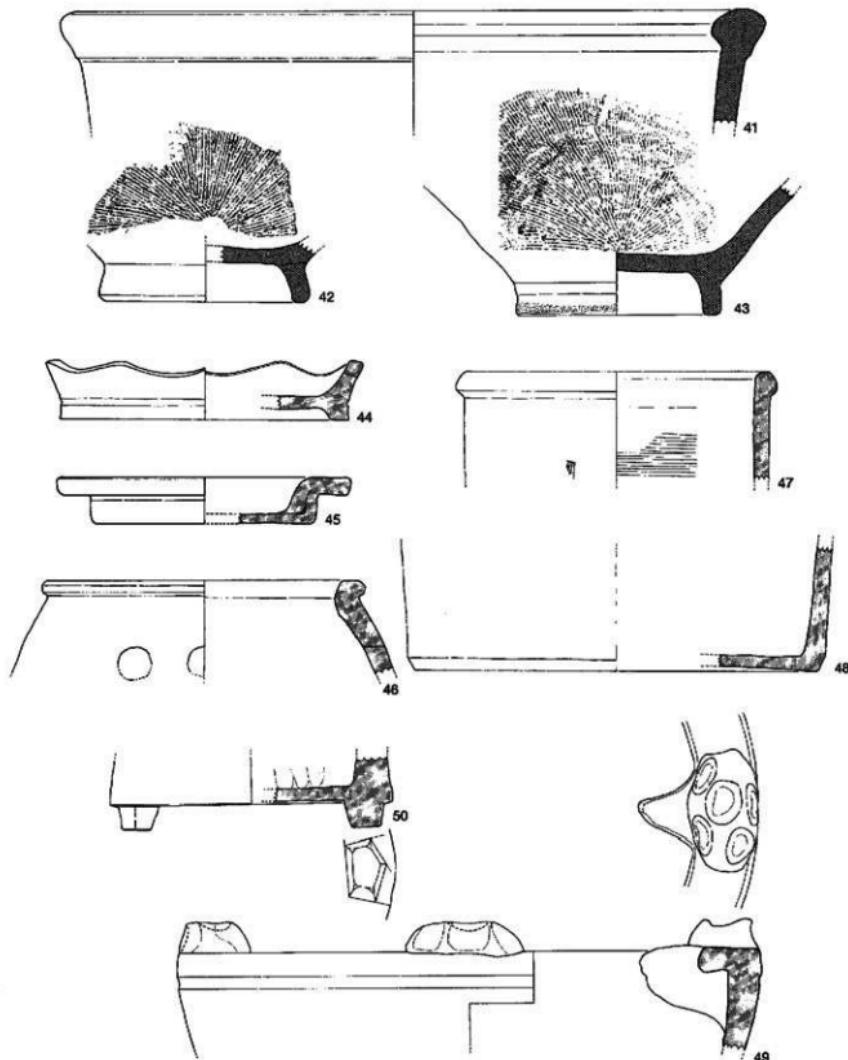
44は断面方形の高台を貼りつけ、胴部はわずかに内湾しながらのびる。その肩曲部には1条の沈線が巡る。胴部は、そのままのびないで3.5cmの高さで止まり、端部は内傾している。おそらく山形状に一周するのだろう。器面は丁寧なナデ調整が施されているが、用途が明らかでない。七輪の台座か。45の胎土はわずかに赤み

註5 「中野上の原古窯跡」 小石原村文化財調査報告書第3集 小石原村教育委員会 1990年

註6 「藤崎遺跡7-第19次調査」 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第260集 1991年



21 陶器(1) (縮尺1/3)



1

10cm

22 陶器・土製品（縮尺1/3）

を帯びた茶色で、焼成とも堅穀である。底部以外は横ナデ調整。断面L字状の口縁部直下に煤の付着があることから、火鉢や火消し壺などの蓋を考えたが、煤の付着位置からすると矛盾するので他の機能か。**46**は口径19.4cm、瓦質の焼成で、胸部上半部は継やかに内湾し、丸みのある口縁部がつく。胴部には直径1.4~2.0cmの穴が2個開き、内面には厚く煤が付着し、長期間使用されたことを示している。**47**は直立する胸部上端に断面蒲鉾形の粘土を貼りつけL縁部を作る。内面の器面調整は下半が横のハケ目、上半はヘラ削り、外面はナデ。刻印の一部が残る。瓦質であるが焼されていない。口径20.4cm。**48**も同じ瓦質で内外面とも黒色を呈する。底部はほぼ平坦で、径は24.8cm、内面は横ナデ、外面はハケ目を縱方向にへらなでして消している。**49**はまず断面L字形の口縁部を作り、上端に粘土塊を指印えで貼りつけて、さらに内面にも三角形状の粘土を突出させている。内面の難な作りに対して外面は丁寧な横ナデ、上端近くに幅広の回線が巡る。いわゆる「博多素焼」の七輪であるが、ただ内面はほとんど熱を受けていない。口径36.4cm。小型のものがC区SK-04から出土している。**50**は瓦質で底径17cm、平坦な底部に5角形の脚がついて、その面を削り落とした際の条縁が残っている。胸部は内傾し、小型の火鉢か。胎土は瓦と同じように灰色で、砂粒を含んでいない。

瓦類

瓦類には、軒丸瓦11点、丸瓦3点、軒平瓦20点、平瓦3点、道具瓦4点の計41点を実測、図示した。^{註7}

軒丸瓦 (51~61)

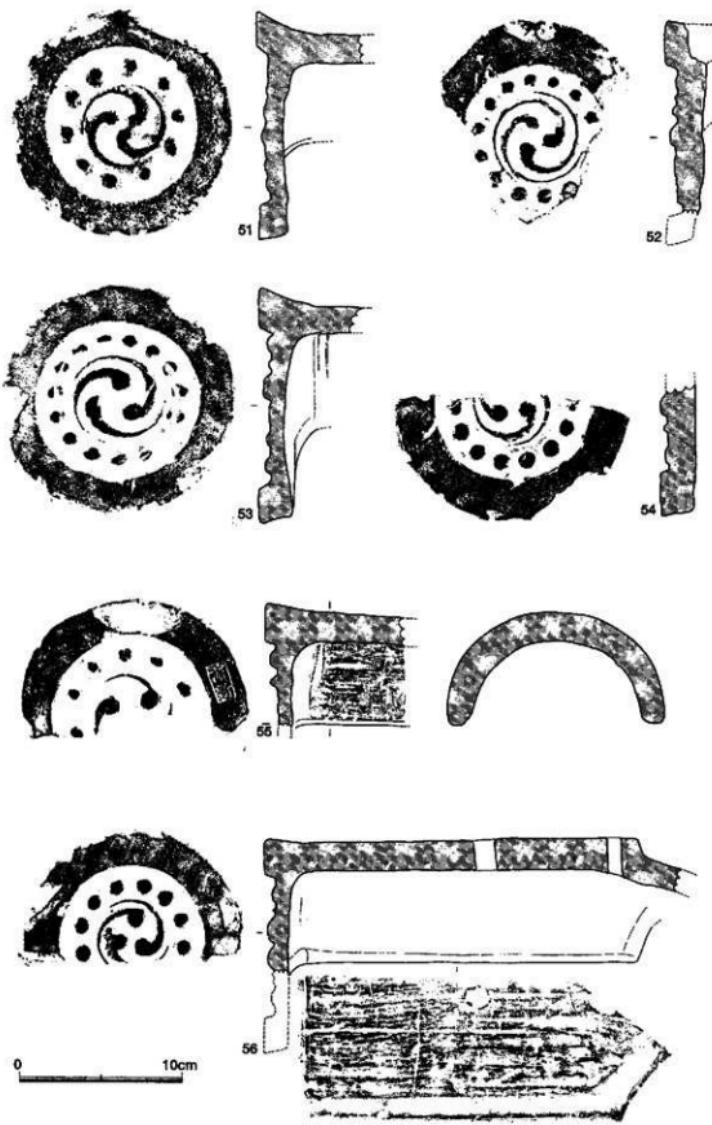
瓦溜めから出土した軒丸瓦には、瓦当文が三つ巴文と三つ藤巴文の2種がある。

三つ巴文 (51~59) **51**は灰色胎土でわずかに砂粒があり、瓦当面は風化が進んでいる。瓦当面径は14cm、幅は2.2cmの周縁はわずかに内傾し、外区に径1cmの連珠文を10個巡らしている。巴の尾は細長いが後ろの巴の中程まで達している。巴文と連珠文は盛り上がりが弱く、シャープさに欠ける。丸瓦の背は縱方向のナデ調整。**52**は内外面とも黒色だが断面は表面下は灰色の薄い層で中は黒色となっている。周縁の幅は2.7cm、右巻きの巴、珠文とも肉厚で盛り上がる。連珠文は径1.1cmで14個と多い。巴の尾は細長く半周を越している。丸瓦との接合面は粗い桶目を入れ、粘土を強くナデしている。復元した瓦当面径は13.5cm。**53**の外面は灰黒色で断面内(以下内部と記す)は灰色、わずかに砂粒を含む。巴の尾は同じように細長いが幅が広い。巴の頭は正円に近い。瓦当面径は14.7cm、周縁幅2.0~2.2cm、径1.2cmの連珠文を15個巡らせている。巴文の傷は瓦缶の傷であろう。**54**は瓦当の下半部破片。表面は黒色、内部は灰色。**53**と同じように頭の丸い巴が右巻きする。外区の連珠文は15個か。巴文、連珠文は背が低く平坦になっている。焼成はよい。復元瓦当面径は14.7cm、周縁は半円で幅は2.5cm。**55**は周縁に方形枠に「源新」の金屬製刻印がある。この刻印鉢は福岡城内では初めての例で、東区浜男のこと。巴の頭は厚く盛り上がっているが、上部は広い平坦面を作る。尾は断面三角形で鈍い稜がつく。外区の連珠文も丸く盛り上がっている。周縁幅2.4cm。瓦当面径は14.1cm。表面は灰黒色、内部は灰色。胎土は練りのシマが見られる。丸瓦の背は丁寧な縦のナデ調整。内面は細かな布目の下に模骨の凹凸がついている。**56**は瓦当面の下半部がないが、丸瓦の全形を知ることができる。胴の長さ23cm、全長26cm、玉縁は下方を向く。瓦当面径13.5cm、周縁幅は2.2~2.4cm、外区の連珠文は径1.5cmで巴の頭も大きい。外面は濃灰色、内部は灰色、胎土に砂粒を多めに含む。焼成はよい。胴の背に2個の釘穴が8.3cmの間隔で開いている。穴の方向は背に対してやや斜行する。丸瓦の胴の内面には縄目痕が残る。1.2cm幅で縁取りしている。**57**も胴が残っている。瓦当面には巴がないが三つ巴文であろう。連珠文は肉厚で大きい。周縁幅は2.6cm、表面は灰黒色、内部は灰色。砂粒は少なく、焼成はよい。胴長は23.8cm、玉縁は3cm、胴の頭はやや上に反っている。背に8cm間隔で釘穴が2個開いている。胴内面の縁取りは幅2.2cmで鋸く切り離されている。周縁左側に慈右衛門の刻印がある。**58**の瓦当面は縦13.3cm、横14cmと正円ではない。巴は大きく尾も長いが、瓦当面白体が大きいので間隔が開いている。外区の連珠文は8個、巴、珠文、外縁とともに低い。胎土内部は灰色、瓦当面は黒色と灰色の2色を呈する。胴には釘穴が開き、頭への移行部には直交する溝がある。背の高さは6.9cm。胴内面の

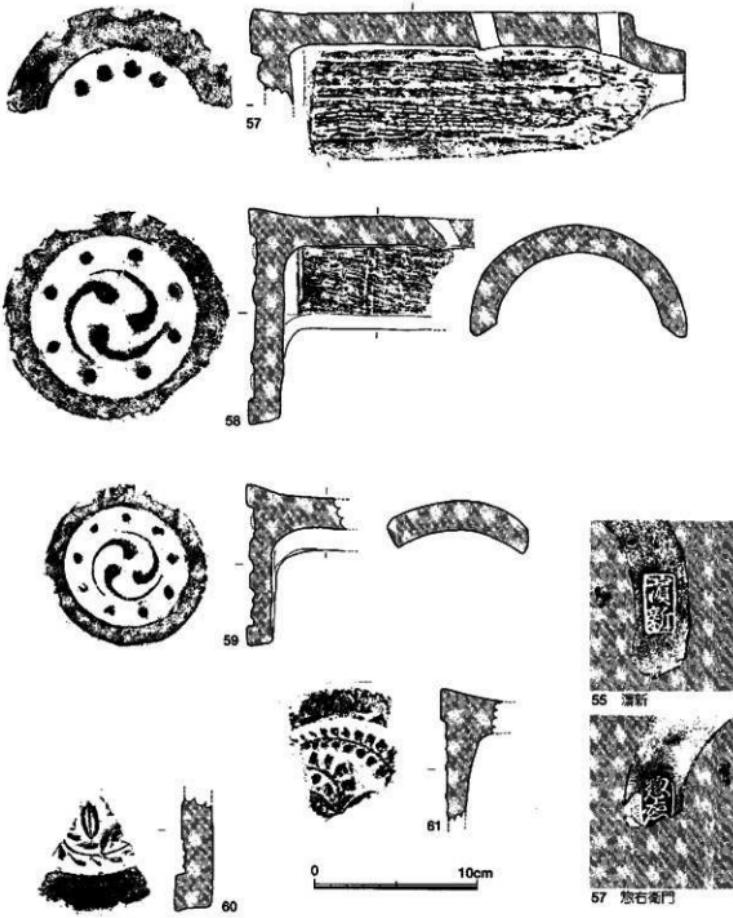
註7 瓦類の分類や呼称は主に次の文献を参考にした。

坪井利弘 「日本の瓦屋根」 遠J学社 1976年

坪井利弘 「圓窓瓦屋根」 改定版 遠J学社 1986年



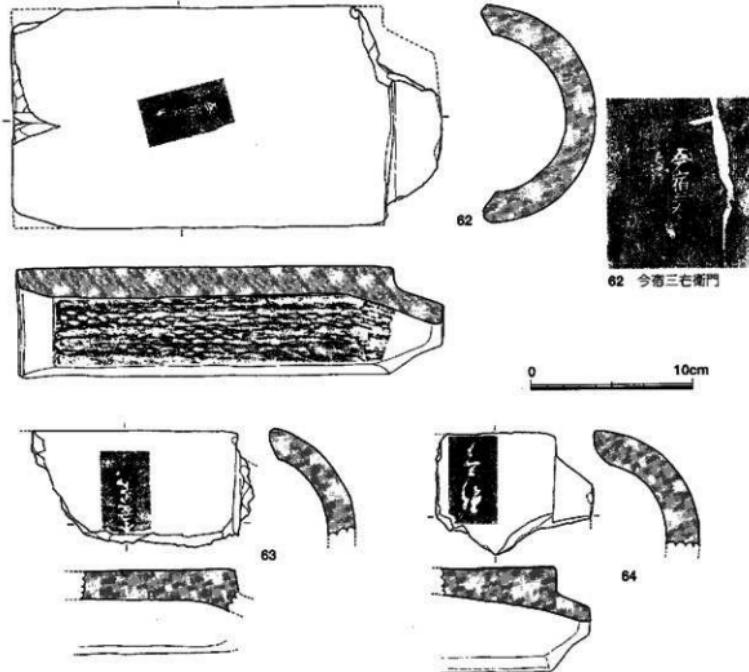
23 軒丸瓦(1) (縮尺1/3)



24 軒丸瓦(2) (縮尺1/3)

縁取りは切り離しの後に緯ナデしている。59は堀に用いられたと思われる。瓦当面径は縦9.9cm、横10.4cmと横に大きい。表面は黒色、内部は灰色、砂粒は含んでいない。周縁は1.3cm、尾の長い巴はよく整った姿をなす。径9mmの珠文は9個。胴は半円形ではなく高さ3.2cmと偏平となっている。

三つ巴藤文(60、61) 60、61は黒田家の家紋である三つ巴藤文の瓦当文をもつ。黒田藤は播州の主家であった小寺家より与えられた藤文と黒田家のそれまでの橋文を組み合わせたものと言われている。60は表面、内部とも灰色、焼成は堅い。中心に橋の三つ葉を配し、藤の房を左巻きに図案化している。福岡城内出土の三



25 丸瓦（縮尺1/3）



64 口三郎

つ巴藤文の軒丸瓦には、写実的なものと簡略化した2種があるが、61は房の数が多く、形もよく整っている。周縁幅は2.2cm。61の表面は灰黒色、内部は灰色、軟質な焼きで、風化が進んでいることもあるって瓦当文は純い。60よりも藤の花房が多いが、それぞれ丸みがあり、輪郭が明瞭でない。三つ巴藤文の瓦は、瓦溜めからこの2点だけが出土した。

丸瓦（62~64）

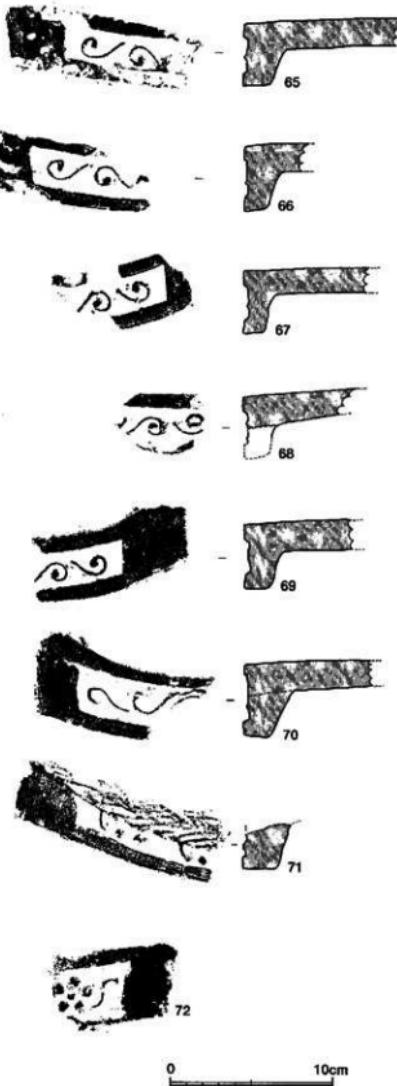


63 空兵衛

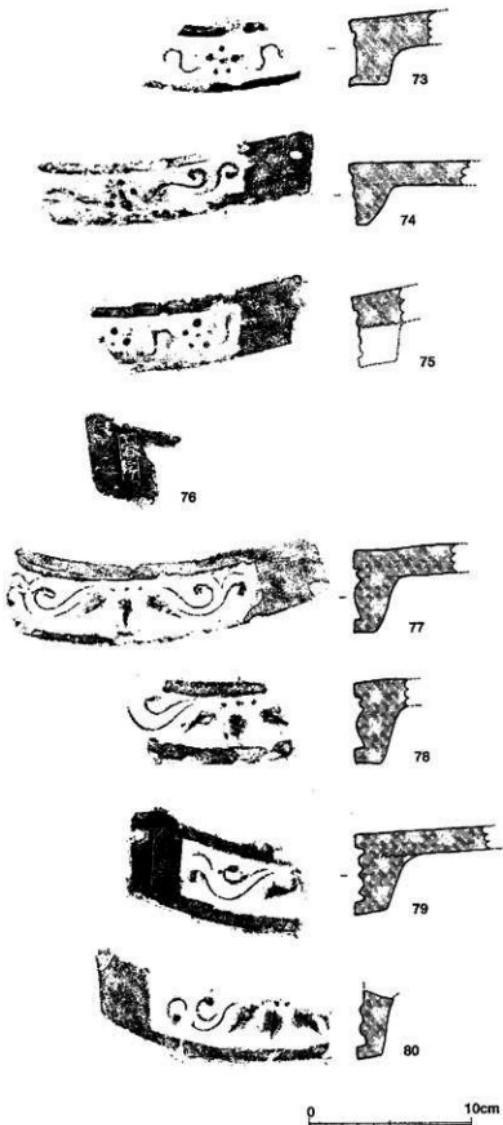
刻印のある3点を図示した。62は玉縁の一部を欠くが完形に近い。全長26.1cm、胴長23cm、玉縁は下方に傾く。外面、内部とも灰色。小砂粒をわずかに含み。焼成は堅い。胴幅13.6cm、背の高さ7cm、縁取りは頭から尻の方向へ斜く削っている。背の中央に長楕円柱の「今宿三右衛門」の金属刻印を押す。内面は溝目痕。63は尻部の破片。表面、内面とも濃灰色で、胎土の線りがよく分かる。焼成は堅い。背は細かい縦のナデ調整。背の刻印は横に「李兵衛」。64は玉縁部の破片。玉縁は2cmと短い。外面は灰黒色、内部は灰白色白色砂粒を含む。背に「口三郎」の刻印がある。刻印は木製であろう。内面の縁取り幅は1.5cmで鋭い工具が使われている。

軒平瓦(65~84)

図示した20点の軒平瓦は完形品はないが、左右端の文様構成から判断して中心飾りから左右に唐草が流れる均整唐草文であろう。65~69は同じような文様をもっているが、各々微妙な違いがあり、同一個体ではない。65の外表面は灰黒色、内部は灰色、砂粒は含んでいない。中心より右半分の瓦当が残っている。瓦当幅は3.7cm、周縁はナデを加える。内区は蔓状の唐草文ではなく、2個の蕨手文となっており、断面三角形で鈍い稜がある。66も同じような文様構成の瓦当面である。外面は濃灰色、内面は灰色、砂粒はほとんど含んでいないが粘土の練りが不十分なのか、小さな隙間がある。中心飾りの一部が残るが全形は不明。周縁、顎とともに丁寧なナデ調整。67は焼成はよいが、やや軟質。蕨手文の頭部は丸く大きくなっている。瓦当面の幅は4cm、顎の長さは2.2cm。瓦当面の風化がやや進んでいる。68もやや軟質の焼成となっている。顎下がなく瓦当面の上半部だけが残るだけだが、顎と平瓦との接合のようすが観察できる。69の外表面は5例中ではもっとも黒色が強いため、燃しほ完全でない。内部は灰色。周縁右端が幅広く、あるいは破風に使用されたものか。70は右端が欠けているが左軒瓦である。瓦当幅は4.3cm、外面は灰黒色、内面は灰色、1~2mm大の砂粒をわずかに含む。中心飾りは不明だが、蕨手文はより細く、頭部も丸みがない。71~74の瓦当は梅花文と唐草文とを組み合わせている。71は平瓦との接合部から剥離して、瓦当面の下半部だけが残る。瓦当面は灰色だが頭部は灰黒色、焼成はよい。文様は72と同じように小珠文を中心に1個、5角形に5個配置して梅花を表現している。72は焼しがよく効き外表面は黒色となっている。叩きで斜行間凸線を作り、ここに顎の粘土を貼りつけ瓦当としているので、ここで破損、剥離するが、72は瓦当裏で折れている。73は瓦当中心部の破片。外面は灰黒色、内面は灰色、粘土には細かな雲母を含む。焼成はよい。中心飾りは小珠文5個による梅花文で左右にS形の唐草文がつく。周縁下端は横ナデでわずかに重ね氣味となる。74は瓦溜めより出土



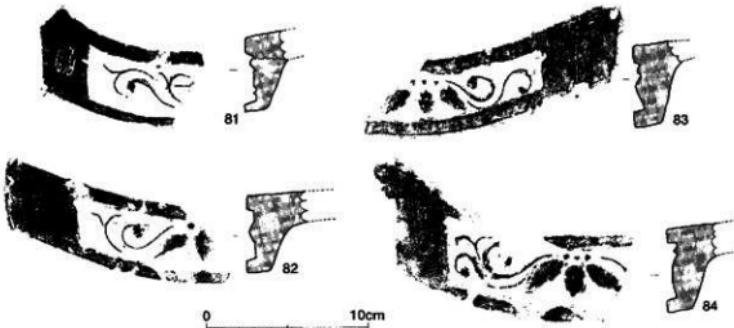
26 軒平瓦(1) (縮尺1/3)



27 軒平瓦(2) (縮尺1/3)

した軒平瓦の中では、割に大きな破片である。中心飾りは梅花文で左右に蕨手文が流れる。左右対象の大きさとすると頭幅は23.4cmとなる。幅は3.9cm、焼成はよいが、やや軟質。文様帶の内区は瓦当面の約63%を占めている。75は同じように中心飾りに梅花文であるが、くずれた唐草文を挟んで左右に梅花文を置く。外面は灰黒色、内部は灰色、砂粒をわずかに含む。76は左周縁だけの破片で、ここに「今宿三右衛門」の刻印がある。灰色で焼成はよい。77~84の瓦当文は、同じように下向きの三葉の上に点状の珠文をつけている。77は外面は焼しで黒色、内部は灰色、焼成はよい。中心飾りの左右には、2個1組の蕨手文を配し、蕨手文の巻きは逆向きである。その間に左右に聞く草文を入れている。瓦筋は深く、中心飾りの三葉文も蕨手文も種が明瞭についている。周縁右端の幅は4.3cm、欠けている左端は5.1cmと幅広くなっている。78は瓦当周縁左端に「今宿三右衛門」の金調刻印がついている。焼しは完全ではなく、瓦当外面だけが黒色で、他は灰黒色である。蕨手文の体部は幅広く、巻きは弱い。蕨手文の間の草文は一葉のみ。周縁左端が欠けているが棟瓦の可能性が高い。80の中心飾りの三葉文が大きい分、脇の蕨手文が窮屈に巻いている。外面は焼しで光沢がある。半瓦との接合部で外れている。

81は「清次」の刻印をもつ棟瓦。胎上、焼成ともよい。瓦当文は蕨手文とY字形の草文との組合せ。瓦筋の傷が見られる。82の外面は灰黒色、内部灰色、白色小砂粒をわずかに含む。焼成はよく堅い。中心飾りの左文様は蕨手文は一つだけで、きれいに円形に巻いている。端にY字形に聞く草文で終わる。刻印は周縁左端に押され、細字で「今宿三右衛門」と読める。83は瓦当周縁右端に「今宿三右衛門」の刻印をもつ。外面の焼しはよく外面は黒色で、内部は灰色であるが、平瓦部は黒色の表面下3mmの厚さ



28 軒平瓦(3) (縮尺1/3)

で灰白色の層となっている。84も中心飾りに三葉文をもつ棟瓦。外面は焼して黒色、内部は灰色。胎土に砂粒を含む。頭は丁寧な横ナデ調整。左縁に「今宿三右衛門」の刻印があるが押しが浅く不鮮明である。

平瓦 (85~87)

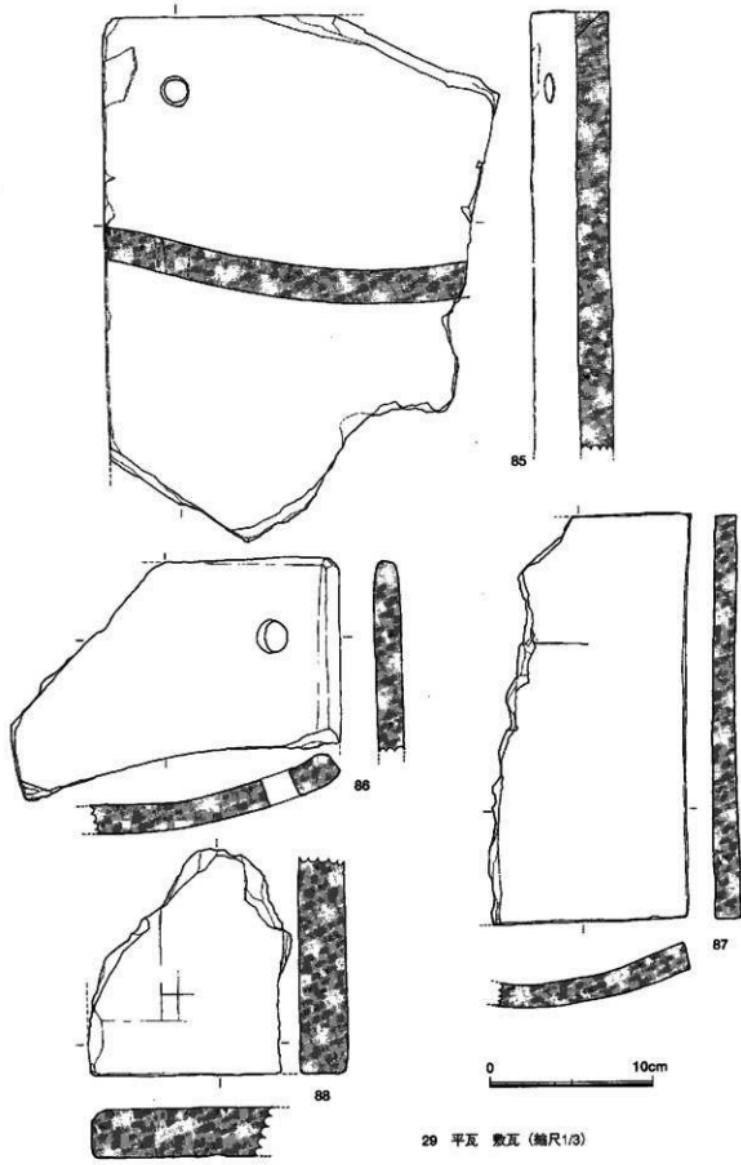
瓦溜めでもっとも出土量が多いのが平瓦だが、全形がわかるものは少ない。ここでは釘穴や両辺がわかる3点を図示した。85は一方向だけに湾曲していることから平瓦とした。つり穴から、頭と尻の位置を岡のように判断した。つり穴は表面が径1.8cm、裏面は径1.65cm。焼成はよく、外面は灰黒色、内部は灰色、胎土に2mm大の砂粒を含む。谷面はわずかに凹凸があるが丁寧なナデを加えている。裏面はヘラナデ痕が残る。尻、小口とも元の長さを知りえないが、ほぼ直交していることから頭と尻の幅は大きな違いはなかったのであろう。85と同じように穴が開いているが、谷を上にすると右上の位置になる。外面は濃灰黒色で、内部は灰色と濃灰色の2層となっている。小口、尻ともに断面は丸みがある。谷、裏とも全面に粗いハケ目痕があり、この後に穴を開けている。平瓦としたが、小口や調整法などを他の平瓦に比較すると異質なつくりで、別の用途の可能性もある。87は小口の長さがわかる平瓦であり、瓦溜めの平瓦のほとんどはこの形状であることから図示した。長さ24.7cm、厚さ1.6cm。外面は濃灰黒色、内部もほぼ同じ色で、2~4mm大の長石を含む。縦の断面にも微妙な湾曲があるが、焼成時に変形したか。小口、頭にはないが尻には横ナデによる小さな面取りがある。

敷瓦 (88)

縱、横方向に湾曲がないことから敷瓦と考えられる瓦が1点だけ出土した。88の厚さはほぼ均一で2.9cm。煙しは不完全で、外面は灰黒色。断面は中心が濃灰色、その外側が灰色である。多くはないが、2~4mm大の長石を含む。図表面には、界線のような条線が認められる。壁瓦の可能性もある。

本谷瓦 (89、90)

合計4点と出土数はきわめて少ないが、屋根の谷に葺かれる谷丸瓦と谷唐草瓦がある。このうち刻印がある各1点を図化した。89は谷丸瓦で、瓦当に当たる面には文様はないが、平滑になるようにナデを加え、その外縁は部分的に面取りしている。丸瓦部も同じような丁寧な調整で、背に「今宿三右衛門」の刻印を押す。内面は綱目をナデ消す。外面は焼して黒色、内部は灰色。焼成はたいへんよい。瓦当と丸瓦となす角度は55度で、屋根から見て左側に葺かれた谷丸瓦である。90は谷唐草瓦。名前は唐草瓦としているが瓦当面には文様はない。

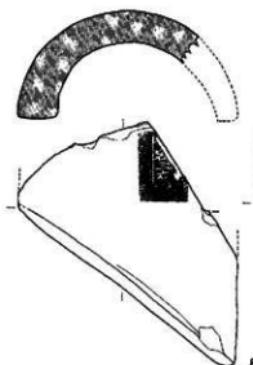


29 平瓦 敷瓦 (縮尺1/3)

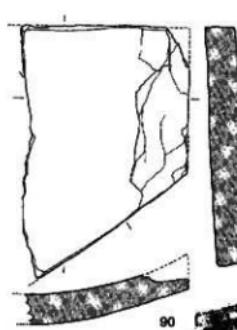
ただし「今宿三右衛門」の刻印を横に倒して押している。頭の厚さは2.3cm、平瓦尻の厚さは2cm。谷の湾曲度ではないが、縱方向にもわずかに湾曲がある。頭を貼りつけた後は丁寧な横ナデ調整。尻は垂直で、上下縁は丸みのある面取りをしている。外面は黒色、内部は灰色、砂粒はほとんどない。瓦面と平瓦の角度は125度で、屋根から見て右側の谷唐草瓦である。実測できなかったが、この他に左右各1個の谷唐草瓦が出土している。

堀 瓦 (91)

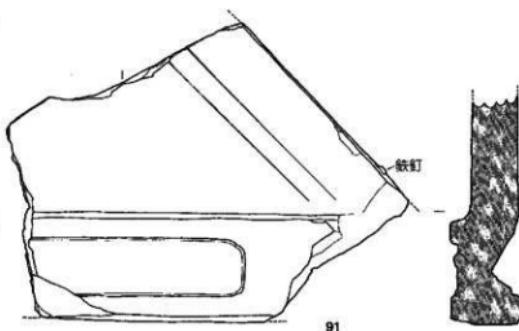
厚さ2.9cmの平坦な板瓦に、幅6.4cm、厚さ2.3cmの棟がついたもので、棟はさらに軒平瓦のように頭が4.4cmで下方に垂れている。棟は瓦筋による文様がある。構岡は中心飾りが軒平瓦75のような6珠文の梅花文、唐草は軒平瓦81の文様によく似ている。外面は灰黒色、内部は明灰色、1~2mm大の砂粒を含んでいる。この棟に対して側辺は45度の角度がある。頭は逆三角形断面に粗く削り出して作っている。側辺には釘様の鉄片が付着している。東の丸では、福岡県教育委員会が昭和38年に行った発掘調査のC3トレンチからよく似た瓦が発見されている。この2点の他には福岡城内の出土例はない。外面は焼しが完全でなく灰黒色、内部は灰色、砂粒も多く練りが粗い。



89 今宿三右衛門



90 今宿三右衛門



30 道具瓦 (縮尺1/3)





3. B区の調査

B区の発掘範囲は、付属舎と本館との渡り通路から西側へ幅2mで長さ約24m、その西端から南へ約24mのL字形をしている。東寄りの途中から南へ4.5mの張出部がある。東西方向の発掘区をB1区、南北方向をB2区、張出部をB3区と呼んだ。

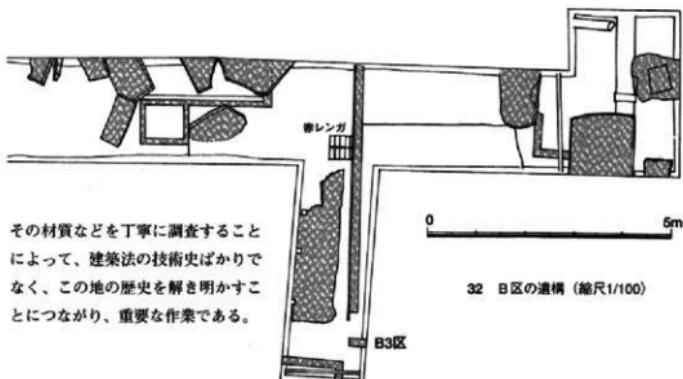
(1) 遺構

B1区はA区と同じようにコンクリート管や鉄管などが横断し、建物の基礎やその廃材が埋め込まれている。西端では図31の土層図に見られるように現地表より約2.1mの深さでようやく地山面が現れる。ここには、漆喰や焼けた土や炭化物などが堆積しており、建て替えに際して廃材を処理するために、地山面を掘り返し、投棄したのである。特にB2区への屈曲部付近には角材や板材などの建築材が組合わさった状態で埋まっていた。またこの周辺にもっとも漆喰材が多くあった。地山面はB2区の南側に向かって次第に上がるが、埋設管による擾乱も激しく、遺構の検出はできなかった。B3区はコンクリートの床が残り、また赤煉瓦10枚が並べた状態で出てきた。旧陸軍施設の基礎か。

発掘区の全域で精査に努めたが、コンクリートに阻まれ、大部分で地山面を出せなかった。また確認出来た部分も、現地表から1mを超す深さで、江戸期の遺構はすでに失われていた。ただ今回は果たせなかつたが、明治以降の建物基礎や埋設管の方向や

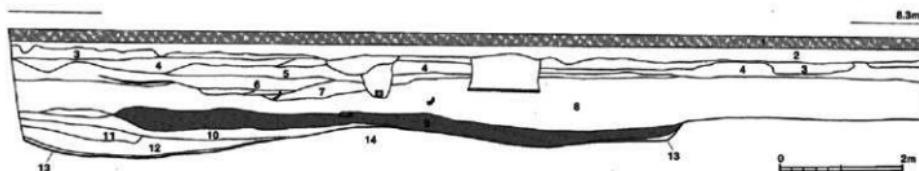


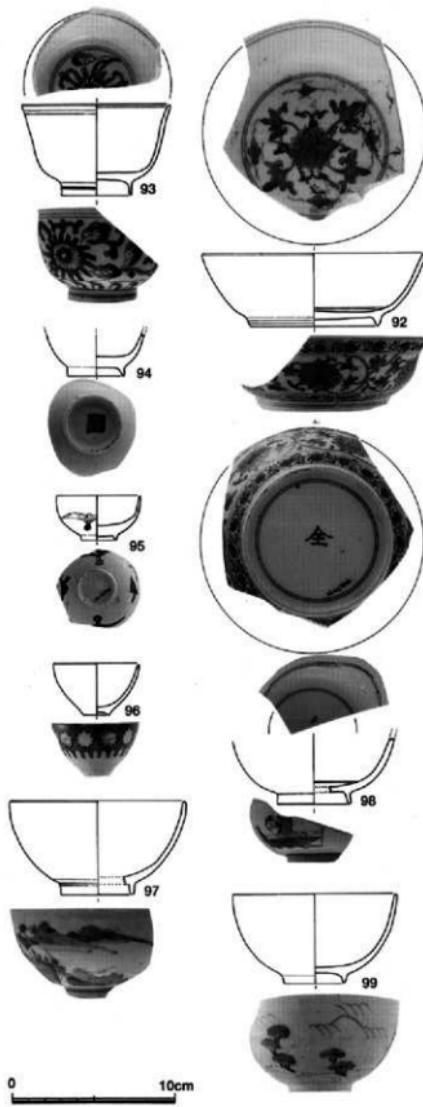
31 A・B区の全景



土層名

- | | |
|------------|------------|
| 1. エグレート舗装 | 8. 灰茶色土 |
| 2. 砂利土 | 9. 灰黒色土 |
| 3. 黄茶色土 | 10. 淡茶色土 |
| 4. 灰色土 | 11. 灰色土 |
| 5. 灰茶色土 | 12. 淡灰黒色 |
| 6. 灰茶色土 | 13. 黏質灰茶色土 |
| 7. 灰茶色土 | 14. 地山層 |





36 磁器(1) (縮尺1/3)

(2) A・B区(搅乱層)の遺物

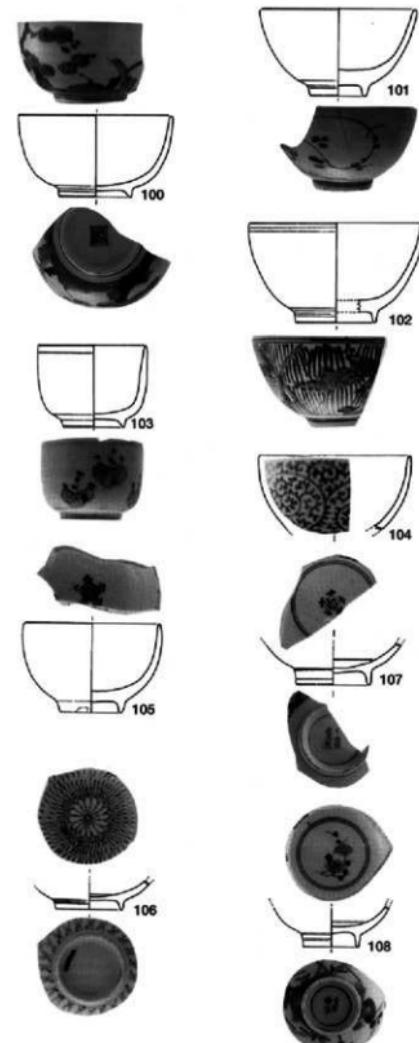
A、B区の搅乱層から出土した遺物を一括して図示した。

磁器(93~139)

92は口径14cm、底径8cm、器高4.5cmの鉢、口縁部下と底部溝曲部に花唐草の帯を巡らし、その間に同じ図案を大きくした花唐草文を挟んでいる。また見込み内底にも同じ花唐草文を描いており、繊密的な絵柄となっている。底裏銘は高台中央に「金」の1字のみ。93は口径9.2cm、器高5.2cmの湯飲み碗。底部から丸みのある胴部がのび、口縁部は小さく外反している。胴部外面の絵柄は花文に唐草風の枝葉がつく。見込み内底にも同じ花、枝、葉をデザインしている。裏底銘は4字あったと思われるが、いま残り2字だけが読める。胴部下半に貫入。94は高台径3.4cm、湯飲み碗としては小さいので盃とすべきか。胴部内外には染付はないが、高台内に崩れた角福鉢がある。95は小さな高台に外に開く体部がつく紅皿。口径5.6cm、器高2.8cm、高台径2.2cm。やや白濁色の釉に赤絵で羽子板と追羽根を対称して描いている。東京都新宿区三栄遺跡^{註8}や南町遺跡で同じような紅皿が出土している。96は口径は5.4cm。口縁端部は鉄錆で褐色となる。底部から段をつけずに胴部がのび、上げ底状の底径は1.2cmと小さい。外面には径1cmの雪の輪文を巡らし、中が無文のものとススキ様のものと交互に描き、間を濃みで塗りつぶすという手のこんだ文様となっている。97は口径11cm、器高5.7cm、高台径4.4cm、いわゆるくらわんか碗である。体部外側に山水文で岩の上に小舟を描く。見込みには、鉄粉や気泡が目立ち、施釉は粗雑である。98は高台径4.6cmの碗、高台はハ字形に外に開き、胴部とともに薄手の作りである。見込み内底は2条の染付の中に銘があるが、「棄」の1字だけが残る。外側には窓の中に船上に二人の人物を描く。99は口径10.4cm、器高5.5cm、高台径3.8cm、外側の図案は波の間に松を描いている。100は岩に松、梅の染付はにじみがある。口径9.6cm、器高5cm、高台径4.8cm。満福の裏底銘。

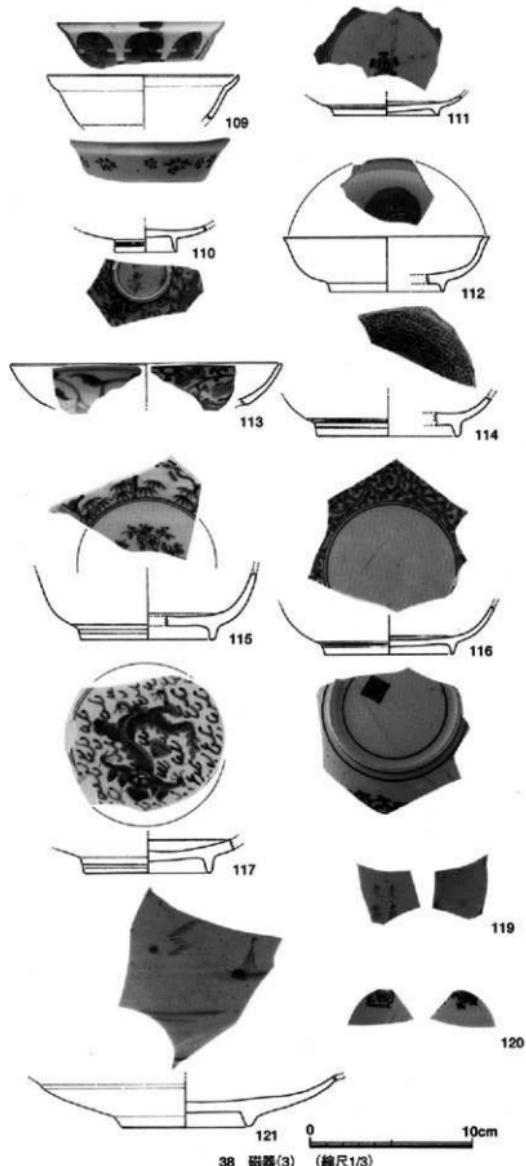
註8 「南町遺跡」兵庫県新宿区南町遺跡調査団 1994年
 「江戸のやきものと暮らし」新宿区内藤町遺跡調査会 1993年
 「古伊万里」別冊太陽NO.63 1988年

101の釉は灰濁色となる。口径9.8cm、高台5.3cm、高台径3.8cm。外側の染付は岩に梅。裏底銘があるが、くずし文字で解説できない。102の器形は101と同じだが、口径11.2cmとやや大きめの碗である。器高6.2cm、高台径5cm、疊付きだけが露胎、見込みは貫入が見られる。外側に染付で松、竹、梅を描き、その間を縦の条線で埋めている。103は胸部が直立する湯飲み碗、筒形に近いが高台脇は丸みがある。胸部外側の文様は3個1組の桐文を相対して描いている。見込み内底には砂が着している。口径6.6cm、器高5cm、高台径3.8cm。104は胸部の小破片のため高台の形状は不明。口径9.2cmの碗で器壁は薄手である。外側全面にたこ唐草文を描く。内外面とも細かな貫入が見られる。鼻須の発色もよく、美しい。105の湯飲み碗は球状の胸部上端がわずかに内側に傾き、先端が丸みのある口縁部となる。釉色が内外面で異なり、外面は青磁釉、内面は灰濁色、見込み内底にコンニャク印判で五弁花文があり、また砂が付着している。高台径3.7cm。106は碗の高台部のみの破片。高台径4.2cm、手書きで見込みに単線の網目文、内底に16弁の菊花文、外側は割り筆による複線の網目文で飾る。疊付きの釉端は、わずかに赤茶色となる。107も同じように高台部のみの破片。高台径4.5cm。見込み内底に手書きの五弁花文、高台内に「大明成化年製」と細字の銘を入れている。胸部外側に染付の文様が一部認められる。108は径3.5cmと小さめの高台である。見込み内底は二重巻の中に梅、外側は竹垣の間に草花を描いている。109~118は染付体である。109は底部を欠いている。口径部は屈曲して外湾する二重の口縁をつくる。口径11.8cm、染付の絵柄は外側に花文。内側は小判窓の中に松竹梅とくずした寿字文を交互に描いている。110は径3.8cmの高台は薄いつくりでわずかに外に開いている。鉢の底部としたが、あるいは碗の蓋か。高台内に銘があるが解説できない。外側には型紙摺りで草花と鳥獣文の絵柄を描く。111の径6.6cmの高台は背が低く、方形に近い断面をしている。見込み内底に

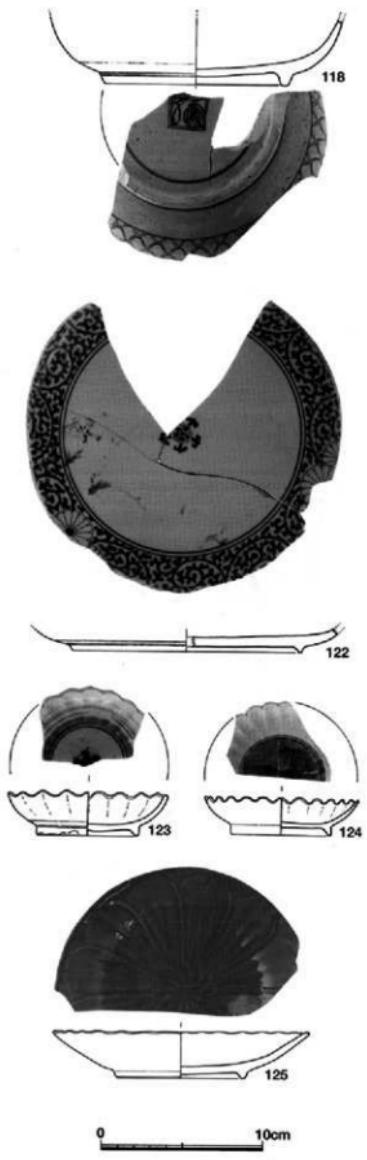


0 10cm

37 磁器(2) (縮尺1/3)



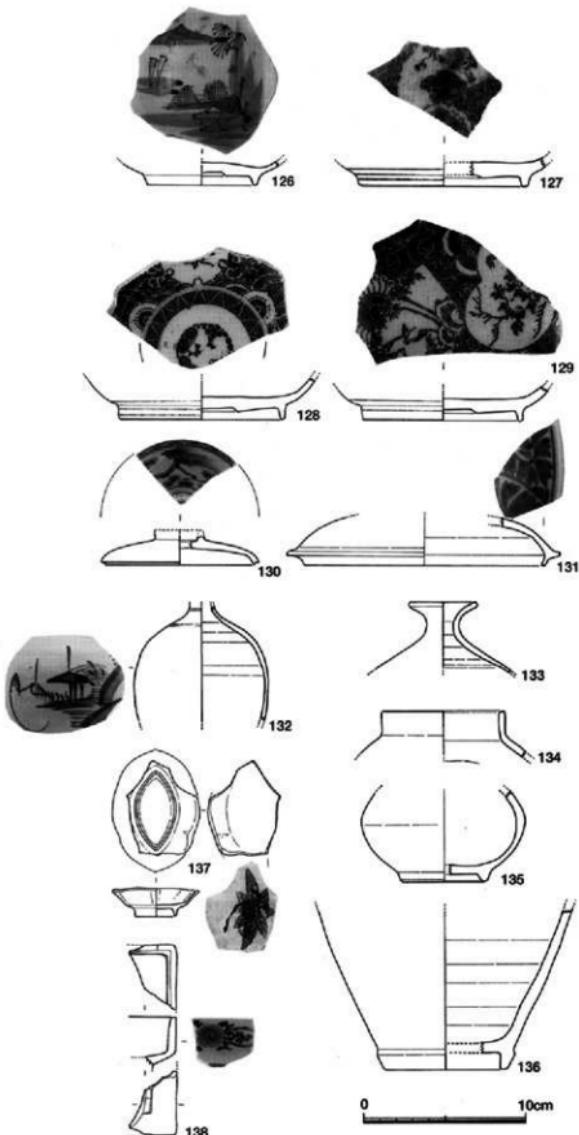
五弁花文を描く。底部の器壁が薄いのが特徴である。112は口径12.8cm、高台径7cm、口縁部内にも染付の帯を這らせてている。本例は見込み内底に黒田藩の家紋である三つ巴籠文があることから、黒田藩内の須恵焼や能古焼などの窯も推定する必要があろう。コンニャク印判の三つ巴籠文は軒丸瓦の瓦当に比較すると、かなり異質な图案となっている。典須の発色も薄い。113は口径17cm、両面に葉をつけた唐草文を丁寧に描く。高台脇から下は露胎のようである。114は高台径8.6cm、釉は高台外側まで、高台内は無釉で露胎となっている。見込みは型紙摺りによる細かな鹿子文で埋めつくしている。胎土には極小の褐色粒子が認められる。115は高台径8.4cm、器壁が分厚いつくりである。見込み内底は花や蕾をたくさんつけた梅の木を細かく描き込む。見込みは8区画して松竹梅を配している。裏文様は唐草文。116は高台径8cm、内外側は同じように細かい唐草文で、丁寧に手描きしている。高台内には二重方形枠に福の鉢があるが、中心から外れて高台近くに偏っている。117は高台径7.5cm。雲間に浮かぶ竜は正面を向き、2本の角をはやした頭は、愛嬌のある表情で面白い。また体を捩じったポーズも愛すべき恰好である。一見すると稚拙な絵のようだが、4本の脚にはちゃんと爪も描きこみ、宝珠も持っている。118は高台径11.6cmと大振りで、器壁も厚い。見込みには染付文はないが、外側に削り筆による複線



39 磁器 (4) (縮尺1/3)

の網目文を手描きする。裏底銘は二重方形枠に溝幅。釉はやや白濁色に近い。119～129は染付の皿。119と120の2点は小破片だが、針(ハリ)の痕跡が残っていることから皿の底部とした。119の裏底銘は、「大明成化年製」の6文字ではなく、「大明化製」か。120は二重方形枠に溝幅の銘、見込み内底に五弁花文を手描きしている。121は高台径8cm、釉はやや青みを帯びており、見込みには気泡が目立つ。高台より外に開く体部は、その端部でさらに屈曲して大きく開いている。染付は水面に帆を降ろした船が浮かんでいる。裏文様、裏底銘ともにない。122は径15.3cmの高台は背が低く小さい。見込み内底には五弁花文、見込みには唐草文を丁寧に手描きしている。唐草文の間に2個の菊花文を3か所に描く。裏文様の唐草は見込みに比べて密でない。高台内には針が4個あり、二重方形枠の溝幅の銘がある。123～125は型打ちで輪花の小皿、口縁部はともに細かな花弁状をしている。123は口径10cm、器高2.6cm、高台径6.4cm、見込みに幅の異なる条線を巡らし、内底に五弁花文を描く。裏文様は折れ松葉文を間隔をおいて描く。124は口径9.8cm、器高2.2cm、高台径6.2cm、灰色を帯びた白濁色の釉がかかり、花弁の釉溜まりは白色化している。見込み内底に染付の文様がある。125は口径16cm、器高2.9cm、高台径7.7cm、全体に青みを帯びた釉がかかり、口縁部内側は青みが濃い。型打ちで中心に花芯と120の花弁を浮き出させている。高台内には同心円の整形痕が見られる。

126～129は凹型蛇の目高台を持つ鉢である。126の高台は径6.5cm、蛇の目露胎の幅は1.4cm。見込みの山水文は帆掛け舟、山稜、樹幹などを線描きした後、薄い呉須を加えている。127～129は明治期以降と思われる型紙摺りの文様をもつ。127は蛇の目露胎の内壁はわずかに茶褐色に変色している。



高台径10.4cm、見込みは中央に花文、その回りに細かな青波文や蔓文で埋めている。コバルトの発色が悪い。128の蛇の目露胎幅は2.5cm、高台径は10.4cm。見込み中央に松竹梅、その外側に連続鋸齒文の帯を巡らし、さらに青波文や草花文などの各種の文様で構成する。蔓文様の一部が残るが、全体は不明。129は高台径10cm、釉がかかった蛇の目の中央は直径4.1cm。見込みは大小の花文の下地に扇形や心臓形の窓を開けている。扇形の中には竹林に雀、心臓形には石榴の絵柄である。130と131は蓋。130は口径9.6cm、天井は摘みではなく高台状をしている。外側に花文の帯、中に岩に松をきわめて細い線で描いている。131は口径17cm、草葉を描くが線描きではない。段重の蓋であろう。132は瓶で、胸部の最大径は8.2cm、内面は凹凸が目立つ。外側に簡略化された山水文。呉須は発色が悪く黒みを帯びる。鶴首になるのだろう。133は首の短い形で油壺か。外面は細かな貫入がある。134は口径7.8cm、白磁壺の口縁部。口縁端部は露胎。135は玉葱状の胸部に径5.3cmの高台を削り出している。胎土は灰色で透明の釉をかけている。136は直線的な胸部の下にわずかに段をつけて、そのまま高台を削り出している。疊付きは露胎だが白色砂が着着している。137は4花弁状に型打ちし、見込みに濃淡の異なるコンニャク印判で花文を重ねているが、釉が流れて失敗作であろう。高台は糸切り細工で、全体に白濁色の釉が厚くかかる。紅皿か。138は箱型で高台の一

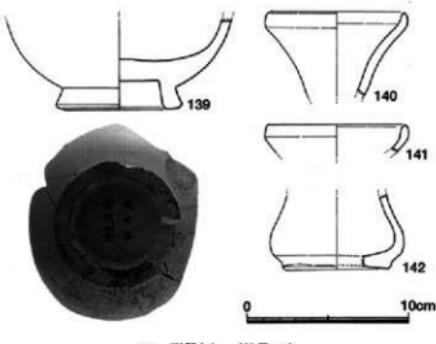
部が残るが全形を知りえない。角皿か。外面は花唐草文、高台にも文様帯がある。内面底部は呂須で塗り潰している。139はハ字形に開く分厚い高台をもつ大型の碗。白色の胎土はきめが粗く、釉にも気泡が目立つ。高台内に「大日本安武製」という銘があることから、旧陸軍時代のものであろう。

青 磁 (140~142)

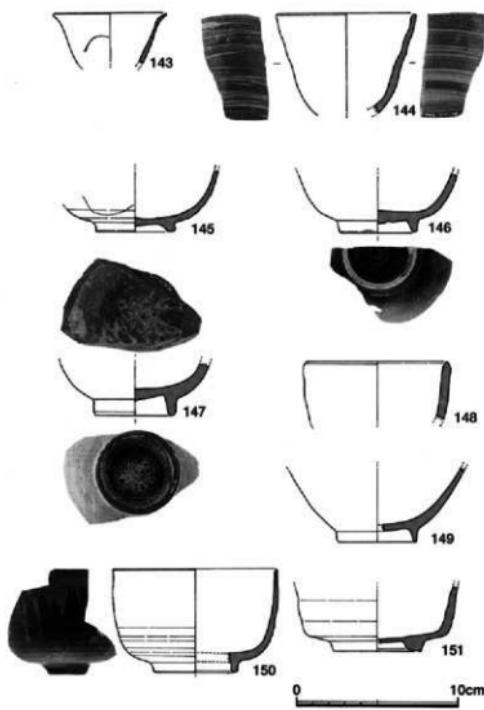
3点とも青磁の破片。140は漏斗状の頭部に小さく直立する口縁部がつく。破片のために器形の傾きは不正確。口径8.8cm。141も同じような口縁部の小破片。花生であろう。142は下膨れの体部に上げ底がつく。底部はわざと鉄錆を塗り赤みを帯びた茶色とする。底径6.4cm。

陶 器 (143~213)

143は口径7.2cm、外に黒色の草葉の一部がある。蓋か。144は濃灰色の胎土で、内外面とも濃灰緑色の地に白化粧土による横刷毛目。口径8.6cm。145は高台径4.7cm、釉は灰色で見込み内底に砂が着着している。露胎部は灰茶色である。146は内外面とも黒色釉、高台疊付きに砂目、見込みに目跡がある。高台径4.7cm。147は赤色を帯びた茶白の胎土。濃緑灰色釉の上に黄灰色釉の刷毛目。高台径4.9cm。148は碗口縁部の破片。口径9.2cm、厚くかかった白灰色釉には部分的に貫入がある。149は高台径4.8cm、胴部は湾曲しながら開く。内外面とも黒褐色釉、見込みには油滴様の斑点がある。胎土は灰白色で堅緻な焼成である。150は口径10.2cm、器高6.5cm、高台径5.2cm。薄くきわめて整った器形で美しい姿の茶碗。内外面とも黒褐色釉、口から褐色釉が流れる。151は筒形の茶碗。高台径5.5cm、疊付きは内傾する。外部だけ透明釉。露胎の一

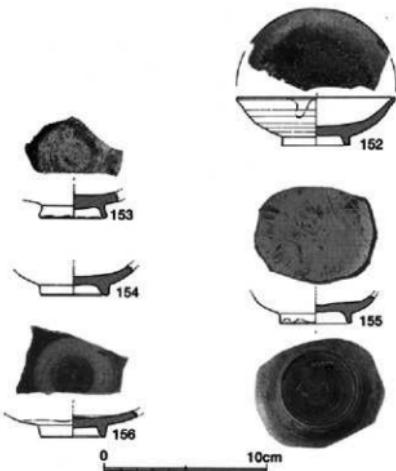


41 陶器(6) (縮尺1/3)



42 陶器(1) (縮尺1/3)

部は赤茶色となる。152の胎土は146と同じような灰白色、釉調もよく似ている。口径10cm、器高3cm、高台径4.2cm、胴部外側は細かいカンナ痕が趣を添えている。153の高台は小さく、八字形に開く。高台径4.1cm、黒褐色釉は胴部下半と高台部は薄い。154は灰色胎土にかけた透明釉には、細かい買入がある。見込み内底は気泡が多い。155は細身の高台で、径4.4cm。黄白色の刷毛目を施す。高台の露胎は茶色、高台の作り、刷毛目の調子が他とやや異質である。156の見込み内底は、釉を欠き取って径5cmの蛇の目になる。釉は淡い赤色を帯びた茶色で、釉端は濃い赤色である。157は見込み内底に砂目4個を持つ皿。胎土は灰色。高台は雑な削り出しで低い。高台内は指押さえの後、削りが加えられていないので、中央に小さく山形の粘土が残る。外に大きく内湾しながら大きく開く胴部は、さらに反転して口縁部となるのである。高台にも砂目の痕跡がある。釉は透明釉に近く、大小の買入が見られる。外側は不完全な施釉で、下半部は露胎に釉が流れている。高台径4.5cm。158は高台をのぞいた全体に灰色釉を厚くかけている。胎土は灰色で、高台露胎部は灰茶色となる。高台径4.6cm。159は口径11.2cmの碗。丸みのある胴部は凹凸も少ない。内外面ともに灰緑色と白濁色の刷毛目で、見込みは線状となり、外部は鶴を象徴したような効果を出している。160は高台径5cm、器高4.5cm、口径12.2cmの碗。中位はやや凹凸が目立つが、全体に丸みのある姿をしている。外側は暗緑色釉、見込みから口縁部外側まで灰色釉、疊付きから高台内にも釉垂れがある。露胎の疊付きは赤茶色となっている。胎土は緻密で薄い茶色。見込みには買入がある。161は口径10.7cm、器高2.8cm、高台径4cm、見込み内底は平坦面を広く作る。八字形に外に開く高台は薄い作りで、疊付きは施釉の後に削りで細丸となっている。胎土は濃灰色できめ細かい土を用いている。口径に対して高台が小さいことから碗の蓋か。白化粧土で見込みは右回りの引き刷毛目、外側は褐色釉を高台内までかけ、口縁部は打ち刷毛で木の葉状文が全周する。さらに舟須で見込み内底に片寄せて松葉を一つ、口縁部外側に松葉と折れ松葉を交互に描いている。見込みは水に流れる松葉のように、外側は木の葉の中に落ちた松葉のような風情である。全体的に成形、施釉、絵付けとともにきわめて洗練された作例で、他の陶器とは趣を異にしている。福岡市美術館の尾崎直人氏によると、168と2点は長崎市現川町で元禄～寛延年間ごろに生産された現川（うつつがわ）焼ということである。162もほぼ同じような大きさだが、胴部の立ち上がりが緩やかである。口径9.6cm、器高5.5cm、高台径3.6cm。胎土は灰色、水平な疊付きだけが露胎である。全体にかかる褐色釉の上に口縁部に茶色釉を流している。その釉端は白い粉末状のような発色をしている。163は高台径4.5cm、高台の削り出しは、疊付きを平坦に、内は断面山形であるが、削り土が残り丁寧ではない。胎土はわずかに黄色を帯びた白濁色、外側の釉は灰色がかかった透明釉、見込みは灰青色釉で、直径6cmに蛇の目状に欠き取っている。この露胎の蛇の目と疊付きには4個の目跡が残っている。164も同じように見込み内底に釉を欠き取って蛇の目状をなす。釉は透明釉で全体に黄色を帯びた白濁色となる。高台は厚

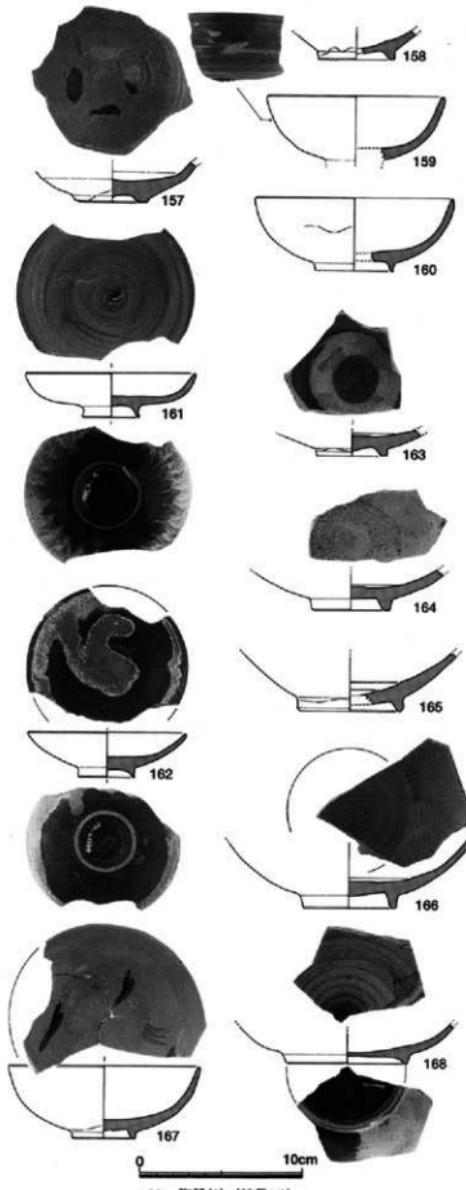


43 陶器(2) (縮尺1/3)

註9 相川淳「現川焼の系譜」

「現川・長与・龜山屋一つかきコレクションによる長崎の陶磁一」 福岡市美術館 1993年

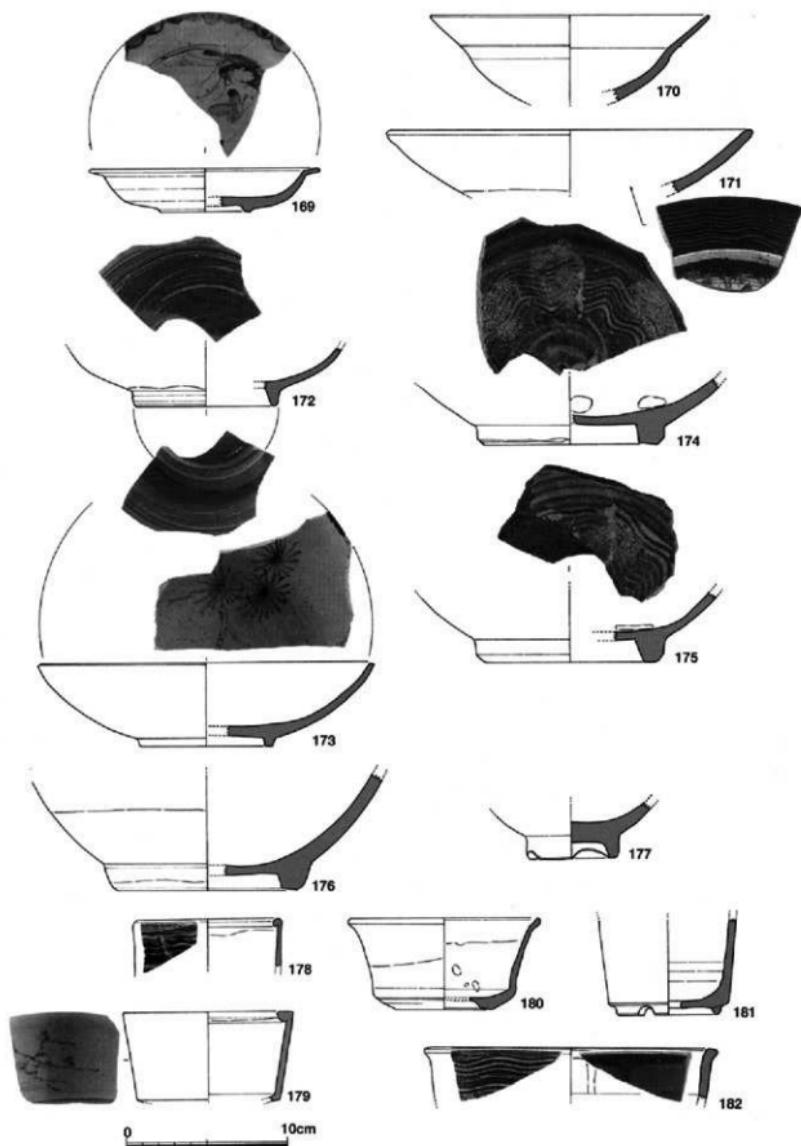
みをもって削り出し、高台内にも施釉される。高台径4.7cm、166の高台は面取りされ、豊付きから高台内は露胎。緩やかに湾曲しながらのびる胴部は、碗形となるのか。見込み内底は蛇の目に輪を矢き取り、この部分だけ赤茶色に変色している。釉は黄灰色で、全体に細かな貫入がある。167は口径12cm、器高4.5cm、高台径4.1cm。大きな口径の割りには小さめの高台である。うすい灰緑色の釉は、高台脇にはかかるない。見込み内底には、赤絵で草葉様の文様を描いている。その大半は剥離しているので絵柄は不明。168は長崎市現川焼の鉢。161と同じように薄手の作りである。径7.4cmの高台は背が低く、施釉の後に削りとて豊付きが丸くなっている。胎土は緻密だが161と異なり、淡い茶色である。外側は紫色を帯びた暗褐色釉を高台内まで均一にかけ、上方から白濁色釉を吹き流している。見込みは白濁色釉の刷毛目を地文にして、この上に魚(鮎)を釘彫りし、輪郭と背鱗は呉須で、腹と尾の内は白土でうめて描いている。急流に躍る鮎という意匠か。見込みは一段と紫色が濃く、内外面とも細かな貫入がある。169は口径14.4cm、器高5.2cm、高台径5.5cm、胎土は灰色できわめて緻密である。高台の削り出しあは浅く、豊付きはわずかに内傾し、内縁線に砂目が2か所に認められる。口縁部は胴部から強く引出しておらず、内面に灰黒色の弧線文帯がある。見込み内底は草花に蝶か。簡略化されているので絵柄は不明。



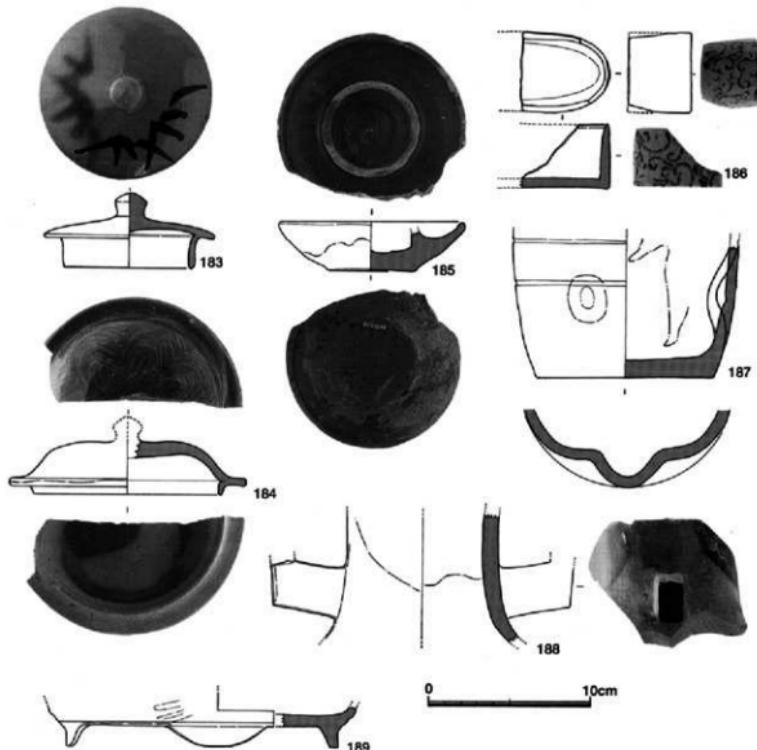
170は口縁部を斜め上方に長く引き出した器形をした鉢。いま高台部を欠く。内外面に透明釉が施釉され、口縁部内側に褐色釉が流れている。口径17.6cm。171の胎土は茶褐色でよく焼き締まっている。底部から大きく開いて口縁部となる。見込みの文様が面白い。見込みは茶褐色釉をかけ、口縁端から下へ3cmは9本の櫛齒で波状文を巡らす。その下方には薄く白色釉をかけ、さらに茶褐色釉を流している。172は径8.5cmと大きな高台をもつ鉢。高台は豊付き外端を面取る。内外面とも刷毛目文で、細かな貫人がある。胎土はうすい灰色で堅い焼成となっている。173の高台は断面方形に近く、高台径8cmを測る。胴部は外湾しながら大きく開いている。断面方形の口縁部は、図では水平に復元したが山形に波うつようである。胎土は黄色を帯びた白濁色で緻密。高台内は露胎であるが、脛付きまで透明釉がかかり、口縁端部は鉄錆のように茶褐色となる。見込み内底に灰黒色で松葉と枝を描き、京風の意匠となっている。内外面ともに細かな貫人がある。174～176は同じような作りの高台をもつ。174の内底の器壁は胴部に比べて薄い。豊付きのケズリ回転は逆時計まり。胎土は赤茶色。外側は露胎。見込み内底は8本の櫛齒波状文の上に灰茶褐色釉を難にかけている。また大きな砂目が3個残っている。高台径11cm。175の高台も外端を面取りしている。胴部の立ち上がりは強い。胎土は赤みが薄い。見込み内底の文様も、砂目もよく類似している。高台径10.6cm。176の高台はさらによく厚く頑丈な形状をしている。高台内はほぼ平坦となる。高台径11.3cm。胴部下半から高台外側まで茶褐色釉をかけ、内面は濃緑色釉を均一に施釉している。3点とも深みのある大型の鉢で、唐津焼か。177の径5.4cmの高台は、3カ所を半円形に切り抜いている。胎土は茶色、内外とも施釉されていない。器面の調整、高台の削りとも難だが、焼成はよい。178～180は口縁部を内側に折り返したもので、火入れか。178は口縁部の小破片で口径9.2cmと復元した。内側への折り返しは丸みを持つ。胎土は灰色、内側は茶褐色釉、外側は濃緑色釉の上に灰白色釉の刷毛目文。濃緑色釉は口縁端部から内側に流れている。179は筒形の胴部で、口縁部は内側に水平に突出している。口径10.5cm。底部屈曲は観い穂がつき、底部と内側は露胎。口縁上端面に釉溜まりがあり、ここは薄い茶緑色である。胴部外側に線描きで山並み風の絵を描いている。173と同じように京風の意匠であるが、胎土はやや粗い。180は筒形ではなく、口縁部が外に開き、内側への折り返しも小さい。胎土は濃灰色、胴部下半から底部にかけて削りで高台を作らない。底部中央はさらに窪ませる。胴部上半の内外面に濃緑色の釉をかける。口径12cm、器高5.6cm、底径6cm。181は高台中央に焼成前に穿たれた径1.5cmの小孔があることから植木鉢とした。胎土は現代の植木鉢と同様に赤茶色、砂粒を含まず堅緻。高台径は6.3cm。筒形の最大径は8.5cm。高台の3カ所に半円形の切り込みがある。182は直立気味の胴部に外に肥厚した口縁部が付く。胎土は濃灰色、外側に濃緑色と灰白色釉の刷毛目の波状文をゆるやかに描いている。口径18.4cm、器形は不明。183と184は蓋。183は天井部径10.3cm、高さ1.8cmのつまみは直立して貼りつけている。天井部に濃緑色と黒色で二様の竹籠を描き重ねている。胎土は小砂粒が多く、表面に露出している。184の天井部摘みは失われている。天井部の形状は、端部で水平に引き出され183と異なる。濃灰緑色の上に灰色釉を花弁様に刷毛目で描く。濃灰緑色は内面にも流れている。土瓶の蓋にしては大きいことから蓋の蓋であろう。天井部径10.6cm。185は灯明皿の受け皿。土師質であるが焼成はよく、堅く焼き締まっている。まず口径10.4cmの皿を作り、この上に受け部を重ね貼りつけている。底部は糸切りで径5.4cm。内面に褐色釉をかけているが外面の口縁下にも流れている。186は幅4.8cm、高さ3.8cmの長楕円形をしている。外面に茶褐色の簡略化した唐草文を刷りこみ、透明釉をかけている。平坦な底部は露胎。破片であるが、髪つけ油や整髪料を入れて、糊を漬けて用いた髪水入れ（びんみずいれ）であろう。美濃焼か。187は底径10.8cmで、胴部は中位でやや膨らむ筒形をしている。ここに1条の沈線が巡り、親指と人指し指で押されたような窪みがある。淡い黄茶色の胎土で、やや粗い。外面は芥子色釉を薄くかけている。底部は露胎、内面は焼成時に大きくひび割れている。39、40のような徳利か。188は図のように筒形の頸部両端にコマ形の把手がつく花生の形状に復元した。灰色の胎土を使い、分厚い器壁を作る。内外面とも灰緑色釉をかけ、把手と上方から黒褐色釉を流している。高吸焼によく似た器形がある。189は底径18cmの底部

註10 『城下町大発掘』 名古屋市見晴台考古遺跡館 1995年

註11 『福岡の陶磁展』 佐賀県立九州陶磁文化館 1992年

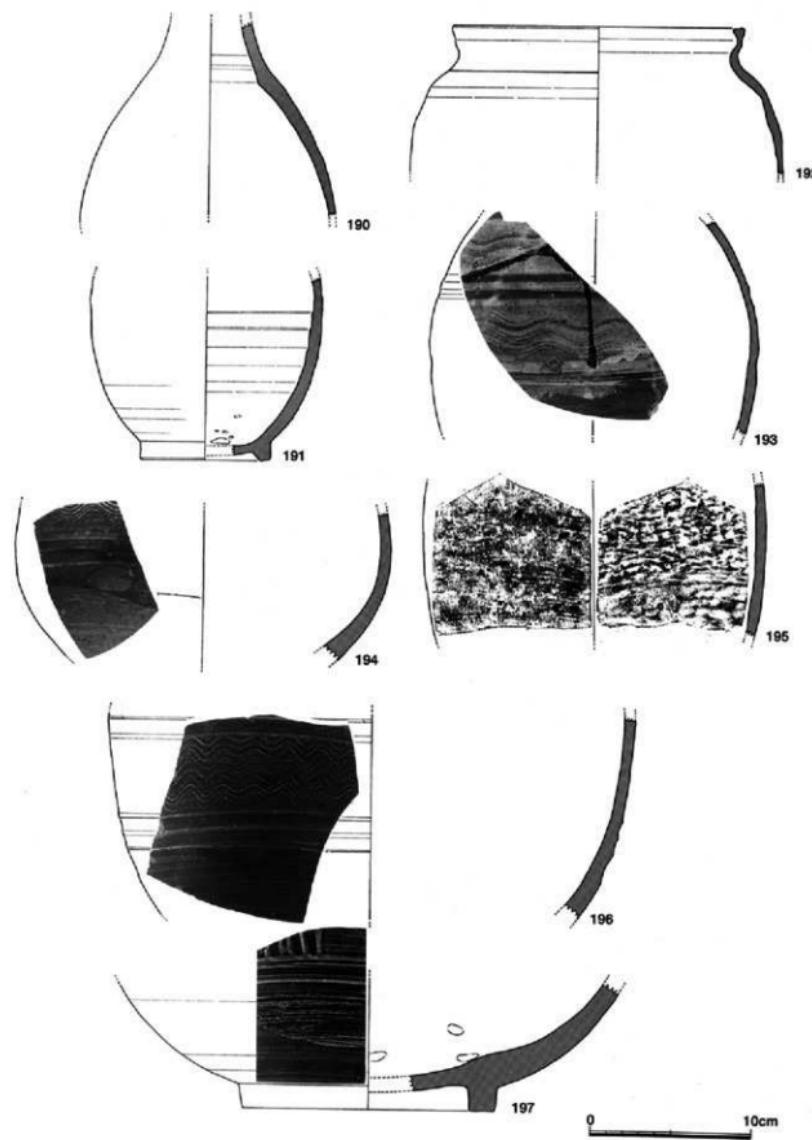


45 陶器(4) (縮尺1/3)

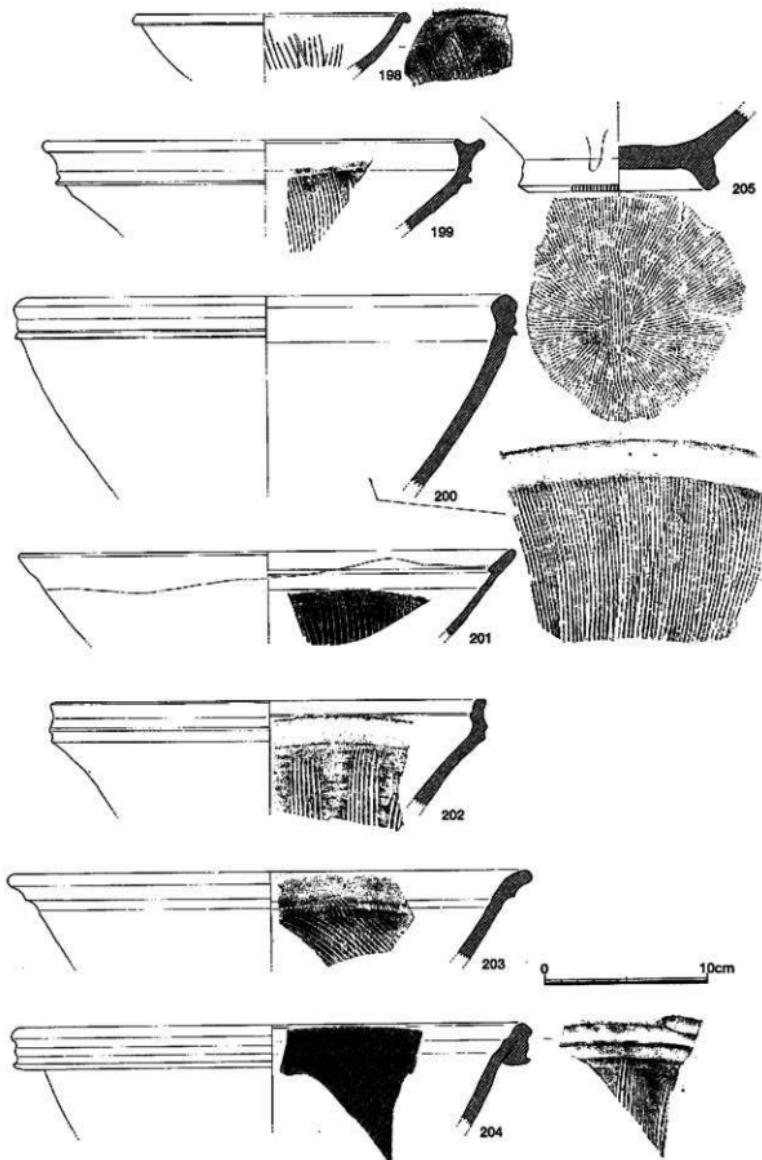


46 陶器(5) (縮尺1/3)

に扁平な円弧の脚を貼り付けている。足つきの盤を考えた。足に接して沈線状の挟りがあるが、文様になるのが不明。外面だけに灰緑色の釉をかける。底部外面に丸棒の刻印があり、文字は吉か。190は瓶、灰色の胎土に砂粒なく、焼成もよく堅緻。外面は須恵器のような色調を呈し、多量の灰を被っている。内外面とも凹凸がある。191は高台を削り出した瓶。胴部下半は粗い削りで細かい沈線が巡る。胴部中位まで黒色釉がかかり、釉端は白色となる。見込み内底にも釉滴が落ちていることから、ある程度の口径があったのであろう。192の胎土は白色で粗い。綺まった頸部から微妙に湾曲しながらびて口縁部をつくる。口縁部は肥厚し、上端は瘤んでいる。外面とも濃茶色釉がかかり、小砂粒が無数に吹き出している。口径18.4cm。193の胴部最大径は21.4cm、赤茶色のきめ細かい胎土を使っている。外面は上半分に白濁色の刷毛目で波状文を描き、さらに茶色の釉をかけ流している。194の胎土は褐色でさらには緻密である。器面の調整も丁寧である。薄い褐色釉をかけて櫛齒の波状文を巡らし、その上に濃緑色釉を重ねている。小破片だが確かな作りである。195の内面は青海波文、外面は横条痕の叩き技法で形成している。両面ともナデ消し、褐色釉をかけている。胎土は暗褐色でわずかに砂粒を含んでいる。最大径21.6cm。196の胴部は最大径で33.4cmもある。灰色の胎土は焼成でよく綺まっている。内外面とも茶色釉をかけ、外面の凹線に挟まれた櫛齒の波状文帯は渦った茶色となっている。197は

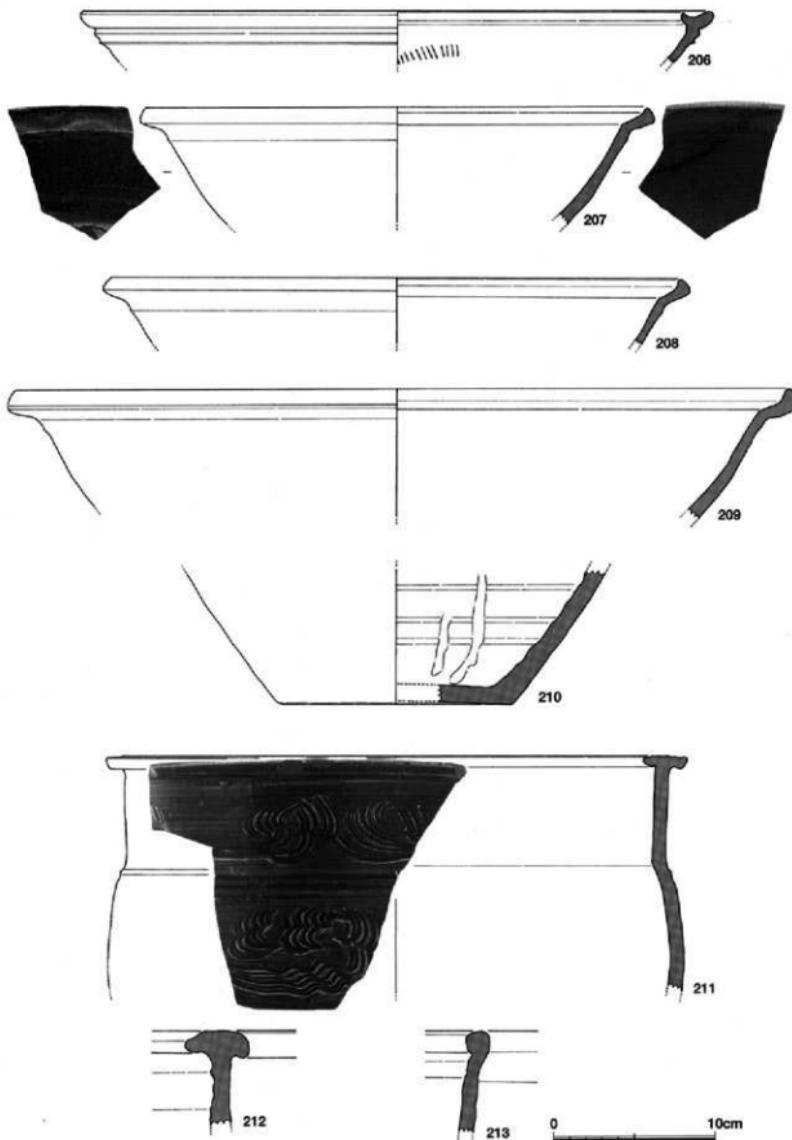


47 陶器(6) (縮尺1/3)



48 陶器(7) (縮尺1/3)

断面方形のがっしりした高台を持つ。内面に灰を被っていることからすれば壺ではなく大型の鉢であろう。厚い作りの高台脇の器壁断面は、中心が灰色で両面が茶色となっている。内外面に薄い茶褐色釉がかかるが、外側は中位より上方に太いス線による文様帶があり、ここには白色釉を重ね、さらにやや黄色気味の茶褐色釉を流しかけている。目跡が高台脇付きと高台内、および見込みに2段になって残っている。大振りにもかからず、作り、釉とも丁寧で風格がある。198~206は擂鉢。198は口径17.1cmしかなく小型の擂鉢である。口縁部は外側に折り曲げ、丸い断面をなす。両面とも丁寧な横ナデの後、内面に5本の櫛歯の鉤し目を逆時計回りに鋭く入れている。胎土は褐色で密。内面と口縁部は褐色釉、灰を被っている。小鳥用の鉢擂鉢体か。199は口径27.4cm、胴部は直線的にのび、口縁部で立ち上がり上端は四状になっている。而曲部の外側には断面楕円形の小さな突帯が巡る。胎土は赤褐色で、白色の微粒砂を多く含み、表面には3mm大の砂粒が露出している。内面の櫛歯は7本。200は口径31.2cm、胴部は深みのある作りで、口縁部断面は丸く肥厚し、外側下には強く横ナデして断面円形と断面三角形の突堤2本を向す。内面の櫛歯は隙間がない。櫛歯を入れた後に口縁部に横ナデを加えているので、櫛歯の先端が水平に消されている。赤茶色の胎土にはわずかに小砂粒を含んでいるが、表面は丁寧な調整で端出していない。201の胴部は直線的で逆ハ子形に開いている。口縁部は内側に折り返し、2.2cm幅の帯状となる。内面の櫛歯は10本単位、逆時計回りにつけるが、彫りが浅く鉤し目としての効果は弱いだろう。口縁部だけ褐色釉を厚くかけている。口径31cm。202は口径27.2cm、胴部上半はわざかに外湾し、直立する口縁部がつく。口縁部の外側には断面蒲鉾形の突堤、内面に小さな突帯が巡っている。胎土は灰色で白色砂粒が多い。8本櫛歯。内外面とともに薄い茶色釉。口縁上端だけに煤がかかっている。203は胴部からそのまま湾曲してのび、丸みのあるL字縁部となる。胎土は赤茶色で砂粒は含まない。内面は直線の櫛歯に斜行の櫛歯で重ねる。内外面に灰色がかった褐色釉をかけている。口径32.6cm。204は口径31cmと復元したが、小破片のため不正確である。口縁部は外側下方に垂れて独特な断面となっている。赤茶色の胎土は密で焼成もよい。櫛歯は10本か。口縁部内側の一部がへこんで、片口状となる。205は擂鉢の底部。ハ子形に開く高台で、脇付には細かな刻み目がある。底部内面は粗い7本櫛の筋で逆時計回りにつける。胎土は赤茶色で、1~3mm大の砂粒を含む。高台外側の一部に砂がついている。206は199と同じような口縁部をもつが、口径は39.4cmと大きい。口縁内端は先が尖り、外側下のつくりは202に似ている。胎土は灰色で、小砂粒を多量に含んでいる。207~209は上方に断面三角形に突出する口縁部をもつ大型の鉢。3点とも赤茶色の胎土で、視覚的には区別が困難である。それぞれの口径は32cm、36.6cm、50cm。207と208は内面の文様構成もよく似ている。口縁部は白色釉で二重の波状文を巡らし、胴部は放射状の縦線を入れる。釉だけが異なり、207は黄色を帯びた灰緑色、208は緑が濃く、口縁部だけに施釉されている。209の見込み上部は10本の波状文、その上下に横線を巡らせる。外側も薄い灰色釉がかかる。210は底径14.5cm、鉢の底部か。平坦な底部から直線的にのびる。内面は凹凸が目立つが、外側は滑らかに調整している。胎土は灰色で緻密。濃茶色釉を内外面にかけ、きわめて重厚なつくりである。211~213は甕。211の胴部上半は直立し、T字形のL字縁部がつく。半坦な口縁上端は3条の凹線が巡る。胎土は灰茶色できめ細かい。内外面とも白色釉の上に青釉を刷毛目施釉。外側の櫛描き文はダイナミックである。口径36.4cm。212もT字形の口縁部である。内外に粘土を貼りつけていることが断面でわかる。上端は平坦でなく丸みがあり、L字縁外端部は下方に垂れ気味。胎土には白色土が練られてシマ状になっている。口縁上端から内面にかけて灰白色釉を流している。213の口縁部は内側に折り曲げ、上端は内傾している。灰色の胎土は内面は明茶色に窪変している。口縁部内側から外側は茶褐色釉をかけ、上に黄茶色釉を流す。212、213は小破片のために口径不明。



49 陶器(8) (縮尺1/3)

土製品 (214~229)

土製品として土師皿、焼塙壺、素焼き甕、土鉢が出土し、そのすべてを図示した。

土師皿 (214~222)

9点とも破片で磨耗も進んでいることから、調整痕は不明瞭。傾き、口径なども不正確である。214、215の底部は板目、2点とも明茶色で胎土に小砂粒を含む。内面はナデ調整。口径は8.2cmと9cm。216~222は糸切り底。口径は6.4~9.4cm、体部は外湾しながら小さくのがて、丸みのある口縁部となる。口径の小さい3点は平底であるが、口径の大きい4点はわずかに上げ底気味。217は底部外縁は丸みがある。口縁部には炭素が付着し、灯明皿に使われている。

焼塙壺 (223、224)

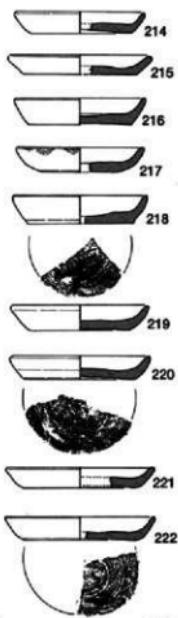
蓋と身は別地点で出土した。223の蓋は口径8.8cm、高さ2.1cm、茶色の胎土には1~3mm大の砂粒を含んでいるが上面は丁寧にナデ調整している。内面は細かな布目痕。224の身は底部を欠く。口径7.1cm、口縁部には蓋受けの段がつく。胎土は221に比べて赤茶色で別個体であることを示している。内面の布目は粗い織りの布である。体部外面に方形刻印があり、「御塙壺師塙淡伊織」と読める。同じ刻印の焼塙壺が三の丸御應屋敷でも出土している。

素焼き甕 (225)

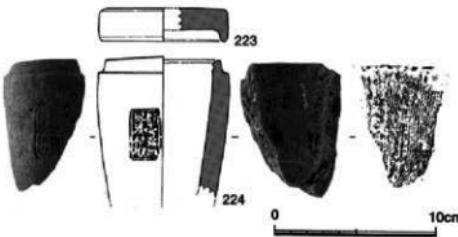
225はL字形の口縁部は43cmと大型の甕。黄色を帯びた灰色で1mm大の砂粒を多く含んでいる。口縁部は横ナデで上面は平坦となる。胴部はナデ調整。内面は横方向の粗いハケ目。

土鉢 (226~229)

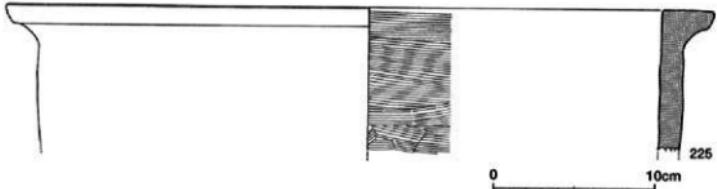
4点出土したが、どれも半分以下の破片である。精良な土ではないが、砂粒の少ない粘土を用いて無花果形の胴部を作り、中に土玉を含ませ、さらに切れ込みを組穴に直交して底部より胴中程まで入れている。外面には彩色や刻印などは認められない。226の胎土は砂粒が少なく、焼成もよい。球状の胴



50 土師皿 (縮尺1/3)



51 焼塙壺 (縮尺1/3)



52 素焼き甕 (縮尺1/3)

部の上方に摘みあげて頭部を作り、乾燥前に棒状のものを水平に差し込んで孔を開けている。外面は指ナデの調整のままで特別な調整を加えていない。227は胸部中位まで入れた切り込みの一方が残っている。尖り気味の頭部が特徴で、外面は丁寧にナデられている。228も内面に頸部の絞り痕がよく残っている。孔の直径は6mm。229は4点の中ではもっとも深い茶色である。胸部径は約5.7cm。同じような土鉢は福岡城三の丸御座屋敷西下の広場や博多遺跡群などから出土例がある。

ガラス製品 (230~234)

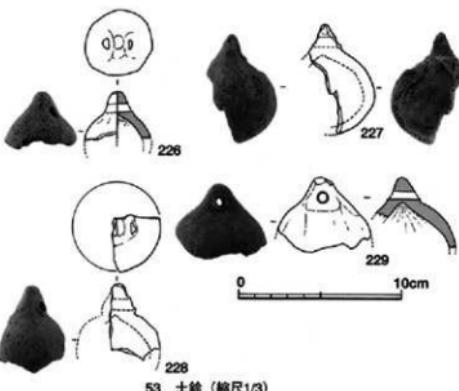
5点とも擾乱層から出土した。230は茶褐色で気泡はない。胸部は1辺2.5cmの正方柱状で面取りがある。高さは6.3cm、底部は円形状にわずかに上がり、数字の3が型だしされている。口縁部は円柱状になり、蓋のねじ山が斜めに一周している。薬瓶か。233は気泡の多い透明ガラス。胸部は3.6cm×4.8cmの長方形、頭部に方形の段があり、円柱状にのび

肥厚した口縁部がつく。インク瓶のような形状だがやや小さい。口外縁径2.1cm、内径1.4cm、器高4.7cm。蓋は王冠やねじ蓋ではなく木栓を差し込む方式である。232と233は一段厚い帯状にした口縁部や青み帯びた色調がよく類似しているが、首の長さや口徑など微妙に異なる。

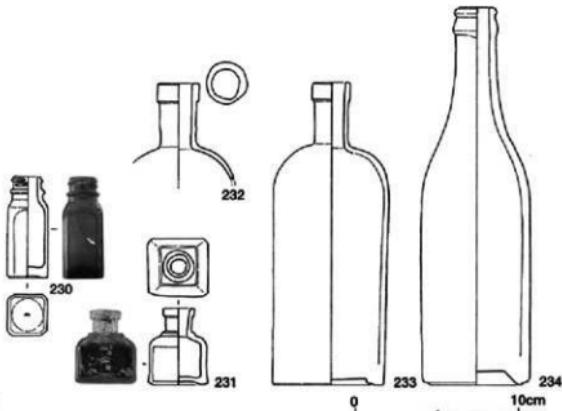
232は口径2.6cm、内径は1.7cm。口縁部の帶の厚さは均一でなく片寄っている。233は底径6.9cm、器高18.6cm、口径2.3cm。円柱状の胸部は丸みのある肩がつき、気泡は231よりも少ない。234は撫で肩の瓶。底径6.6cm、器高23.2cm、口径2.6cm。深緑色で全体に気泡がある。底部は9mmの上げ底で、内面は盛り上がってない。口縁部には王冠を被せた段がつく。

石製品 視 (235)

235はA区東端瓦溜めの上部土層より出土した。長方形で、陸側が欠け現在長は8.6cm、海側短辺6cm、厚さ1.3cm。石材は硬質で小豆色



53 土鉢 (縮尺1/3)



54 ガラス製品 (縮尺1/3)

をしている。欠損部は研磨を加え、海、陸部ともに無数の条痕がある。

金属製品 (236~242)

金銅製品として銅鏡、煙管、水差し片などが出土し、このうち銅鏡と煙管を図示した。

煙 管 (236)

236は羅字きせるの雁首であるが、刻み煙草を入れる受け皿部が欠けている。青銅製で縫が進み、たいへんもろくなっている。竹を挿入する右端部の径は1.1cmを測る。

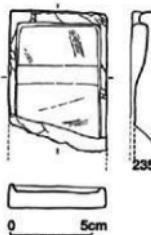
銅 鏡 (237~242)

計6枚の寛永通寶が出土した。237は単独で、他の5枚は重なっていた。6枚とも全面が緑青で覆われているが、寛文字の鋳出しあはよい。裏面は無文。文字、直径、方形孔などにそれぞれ微妙な違いがある。238は直径2.44×2.455cm、方形孔0.57×0.55cmを測る。

碍 子 (243~245)

243は頭部を欠いているが、ノップ (Knob) 碍子と呼ばれる低圧屋内配線用の磁器製碍子である。円筒状の体部の下端に丸にアオキのスタンプが染付されている。これは佐賀県有田町に昭和12年から昭和39年まであった窯業会社の商標である。現在は株式会社「セイブ」となり、同社によるところの碍子は戦前の製造という。244と245は同じように透明釉を厚くかけた白磁製品である。ローマ字で「KORAN」と蘭のマークが染付され、佐賀県有田町の株式会社「香蘭社」の製品であることを示している。244は中空ではなく、電線を通すような機能ではない。245は円盤を4段重ねたような形状をしており、多溝(たこう)碍子と呼ばれている。これは低圧電線や電話線の引き込み用として家屋の軒下などに使われるものである。碍子については、「香蘭社」より関連資料を送付していただいたので63ページで詳述する。

「香蘭社」の現在の商標



55 石製品 穏(縮尺1/3)



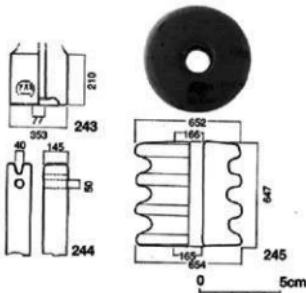
56 金属製品 煙管・銅鏡 (縮尺1/2)



244 昭和初期~昭和17年まで



245 昭和17年以降



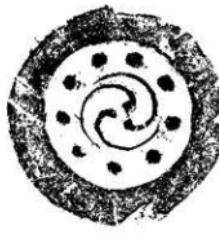
57 碍子 (縮尺1/3)



246



247



248



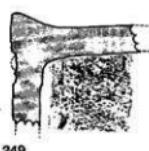
249



247



249



250



251



252



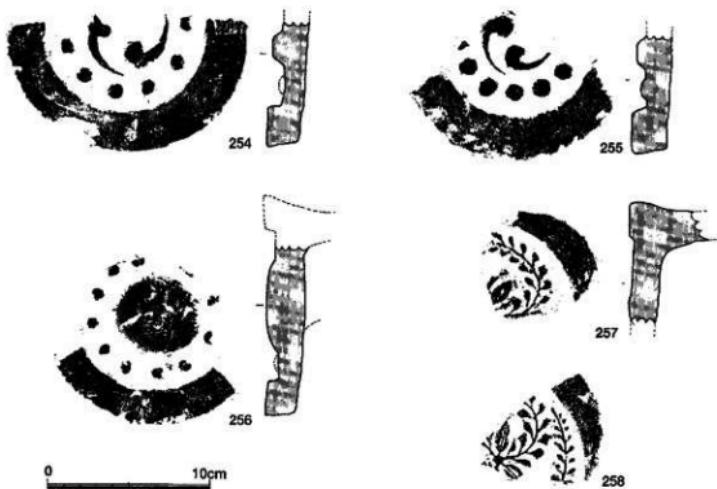
253



251 滅次



252 卷吉與吉



59 軒丸瓦(2) (縮尺1/3)

瓦類(246~267)

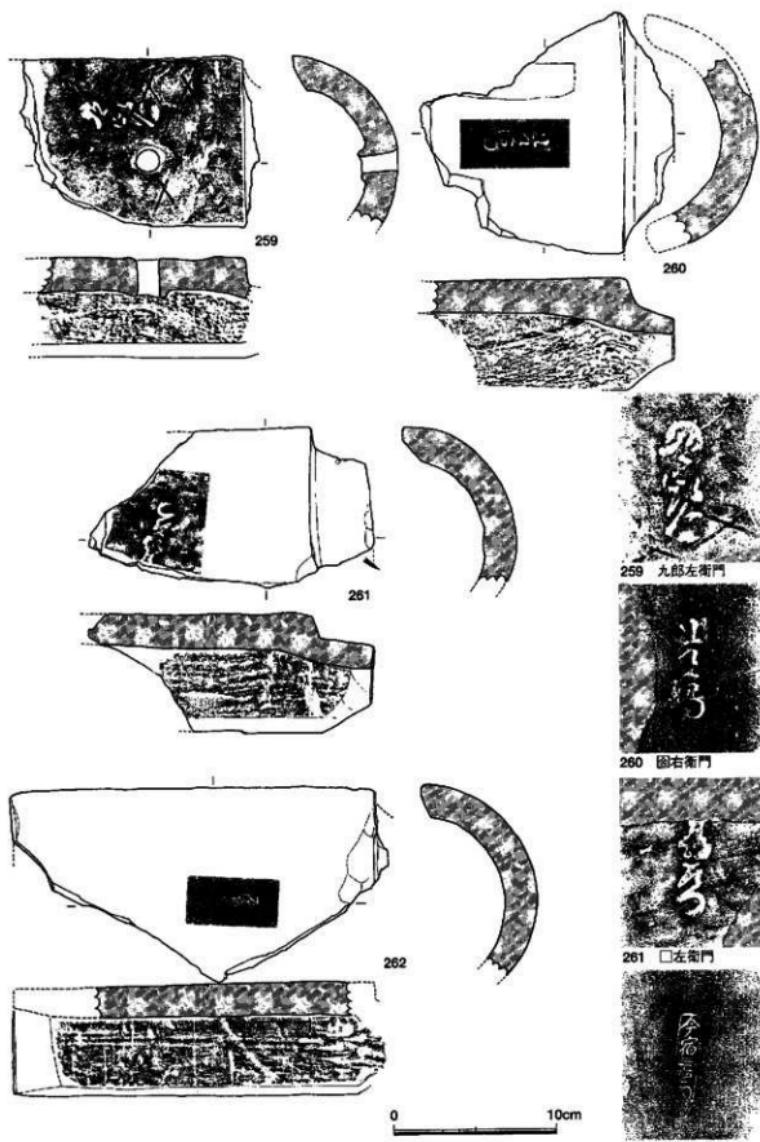
A、B区で瓦溜め造構の瓦を除いた軒丸瓦13点、丸瓦4点、軒平瓦6点、平瓦2点の計25点を実測、図示した。

軒丸瓦(246~258)

瓦当文で三つ巴文、三つ巴藤文、墨絵文の三種に分けた。

三つ巴文(246~255)

246の三つ巴文は尾が細長く次の巴の中程に接し、全体的に連続して一つの円形となっている。巴の頭は丸く、尾に稜はない。外区には径は9mmの連珠文11個が巡っている。瓦当面径は14.5cm×14.9cmとやや横に大きい。周縁幅1.9cm~2.3cm、外面は灰黒色、瓦当面に極小の雲母が多量に露出している。内部は中心が濃灰色でその外側が灰色の2層をなす。胎土に4mm大の砂粒を含んでいる。247は外面、内部も灰色で、焼成はよく堅い。巴の頭は丸きを増し、頭部が強く曲がっている。連珠文は盛り上がっているが、内区はあまり深くない。248は内区三つ巴文は尾が短くなり、次の巴と離れている。また三つ巴文の直径が小さいのが特徴である。その分、外区幅が大きい。連珠文は径1.2cmと大きめで9個を数える。丸瓦部は接合部からきれいに外れ、瓦当面は風化が進んでいる。瓦当面径13.5cm。249は246と同じような色調、焼成、胎土である。巴は平らで幅広いが、連珠文の大きさは不揃いで、整った円形でもない。瓦筋や製作技術上の結果だろう。250は瓦当面より丸瓦の背が風化が激しい。巴の尾は大きく離れている。焼成はよいが、胎土に砂粒が多い。251は焼成で黒色となり光沢がある。巴、連珠文とも肉厚で、連珠文は12個と多い。周縁に「清次」の刻印がある。252は瓦当面の小片だが、周縁に「春吉興吉」の刻印があるので実測した。外面は焼成で黒色、胎土に砂粒をわずかに含んでいる。253の瓦当面径は13.8cm、連珠文は14個が巡る。巴の頭は尾に比べ異様に大きくなっている。外面、内部とも灰色。焼成はよく、堅い作りとなっている。254は瓦当下部の破片。内区は7mmと深く、巴と連



60 丸瓦 (縮尺1/3)

珠文の盛り上がりも大きい。連珠文の数は12個であろう。外面は濃灰色、内部は灰色、胎土は砂粒少なく、練りもよい。周縁の刻印はいま「新」1字のみが残るが、「漸新」か。

255の巴、連珠文とも今回図化した中ではもっとも大きく、連珠文は直径1.5cm、巴は5mmの高さに盛り上がっている。外面灰黒色、内部は灰色。

黒餅文 (256)

256は黒田家家紋の一つである黒餅文を表現した瓦と言われている。半縁の中に珠文があり、中央が餅のように丸く隆起している。珠文は小さく12個を数える。中央の隆起部径は5.8cm、高さは7mmを測る。焼しあげなく外面、内部とも灰色、焼成はよく、堅く仕上がっている。福岡城内では普通に出土するが、数量

は三つ巴文瓦や三つ巴藤文瓦に比べてきわめて少ない。

三つ巴藤文 (257・258)

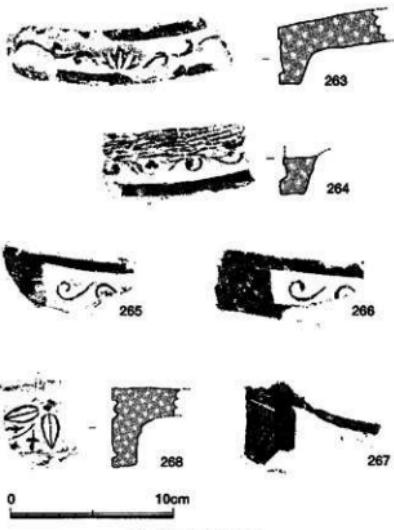
257は風化で文様の輪郭が磨耗しているが藤の房も細部までよく表現している。やや軟質な焼成。258も同様に房の先端まで細かい。焼しあげない。

丸 瓦 (259~262)

刻印のある4点を図示した。259は玉縁を欠く。背に釘穴があり、斜格子の叩きと刻印の後にナデを加えている。内面も繩目をナデ消す。釘穴は最後に背側から開けている。外面、内部とも灰色。焼成はよい。260の丸幅は14.8cm、玉縁は短く2.4cm、背は縱方向の丁寧なヘラミガキ。背と平行に刻印を押す。わずかに焼し。261の玉縁は長さ3.1cm、横ナデ調整。背は縦のヘラミガキの後に刻印を押す。焼しあげない。内面は繩目、縁の幅は1.7cm。262は焼されて黒色となる。背は丁寧なナデ調整で平滑となる。「今宿三右衛門」の刻印は玉縁側に向けて押している。

軒平瓦 (263~268)

263の瓦当幅は3.5cm、中心飾りは上向きの三葉文で、左右に唐草文を流す。長さ2.1cmの額は丁寧な横ナデ調整。内外面とも灰色で、堅い焼成となっている。264は平瓦が外れた瓦当の下半部。中心飾りの文様が分からぬのが、均整唐草文である。外面は灰黒色、内部は中心が濃灰色、その外は灰色の2層をなす。265、266は同じ瓦当左端の破片で、文様もよく類似している。どちらも外面は濃灰色、内部は灰色、胎土は砂粒が多く緻密である。267は内区の文様帯の大部分が欠落しているが、その一部から84と同じ構図が考えられる。残側の左端に「今宿三右衛門」の金属性を押す。外面は焼しで黒色となる。268は焼しのよくきいた瓦で、軒丸瓦の三つ巴藤文に対応するものであろう。中心飾りは下向きの三葉を置き、左右は藤の房をのばしている。周縁は失われているが、文様は明瞭な輪郭で鋭い。額の長さは3cm、強く横ナデして鈍い段がついている。

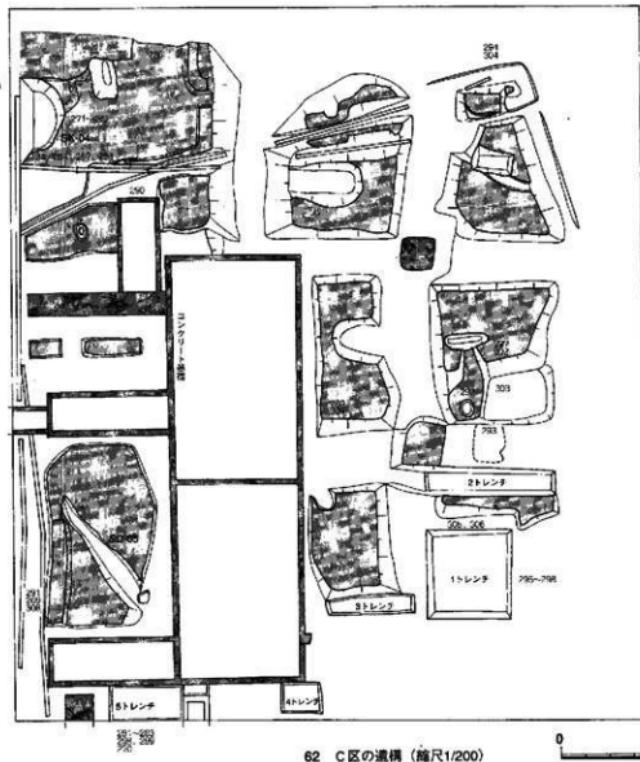


61 軒平瓦 (縮尺1/3)

4. C区の調査

C区は付属舎の東側にあった平屋建車庫を中心にして、東西26m、南北29mの長方形をした発掘区である。旧庁舎建物の配置図によると4棟の施設が近接して建っており、その基礎工事などで地山面は相当深く削平され、遺構の存在はないものと考えられた。しかし、前に記したように発掘区の西寄りに設定した試掘トレーンによるとコンクリート舗装の直下で地山面に掘り込んだ円形や溝状の落ち込みが確認されたことから、基礎工事による破壊は最低限度に抑えられているものと予想された。このため車庫の解体、舗装除去の慎重工事を依頼し、その後に本調査に入った。

試掘の所見通りに深さ約60cmで地山面が現れたものの、幅1m～1.5mのコンクリート混じりの擾乱土が縦横に走り、地山は図62のように9か所でブロック状の高まりとして残っていた。これら9ブロックの総面積は限られているが、擾乱土より江戸期の陶磁器類に混じって点数は少ないものの占喰時代の須恵器片や余良・平安期の瓦類が発見されたことから、地山面を精査し遺構の検出に努めた。また明治期以降、特に旧陸軍と米軍関係遺物が含まれ、また基礎や重なった埋設管などから明治期以降の建物の変遷などを検討した。発掘の結果、古墳時代の溝状遺構(SU-05)と江戸時代の土塹(SK-04)の遺構を確認した。また擾乱土から弥生時代から昭和に至る多種多様な遺物が出土した。これら二つの遺構と擾乱土とに分けて記す。



62 C区の遺構 (縮尺1/200)



63 C区の全景（北から）



64 C区の全景（北西から）

(1) 溝状遺構 (SD-05)

発掘区の西南隅のブロックで発見した。このブロックは四方を付属室や基礎で囲まれており、地山は東西4m、南北7mの面積が残っているに過ぎない。地山の深さは現鋪装より約1m、地山面はわずかに南側に傾いている。

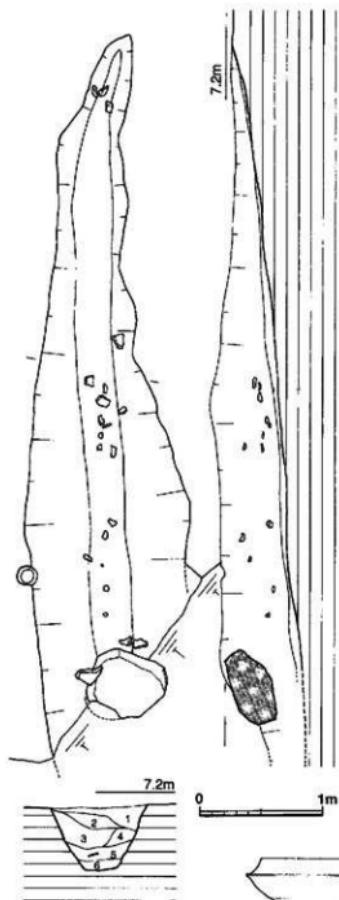
SD-05は、このブロックの北西から南東方向の全長約5.5mの溝である。中程の断面は逆台形に近く、壁は直線ではなくやや膨らんでいる。北西端は6cmと浅く、次第に幅と深さを増して伸び、南東端は基礎の掘り込みで切離されている。南東端は上幅は1.4m、深さ65cm、底幅30cmである。埋土は6層に別れ、4、5層に握り拳人の石や須恵器片が含まれている。南東端には60cm大の石があるが、埋土上から被さっていることから直接の関係はない。

遺物

埋土より出土した破片を接合したところ須恵器坏身2個体に復元できた。

須恵器 (269・270)

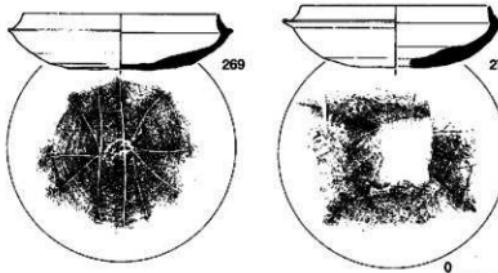
269は北西端部で出土した。口縁部の約30%を欠いているが、ほぼ完形品に近い。口径11.3cm、受け部径13.3cm、器高3.4cm。受け部は斜上方に小さく突出し、先端は丸く尖り気味。たちあがりの端部内面はさらにもう少し尖り、長さは1cmである。底部のヘラ削りは粗く、約1/2に及んでいる。底部にはヘラ記号があり、受け部にかけて灰を被っている。胎土に小砂粒を多く含み、外面は黒みを帯びた灰色、内面は濃灰色。器面の調整は丁寧とは言えないが、焼成はよい。270の坏身は269に比べて底部に丸みがある。SD-05の中程で細片になって出土した5片を接合した。口径11.2cm、受け部径13.4cm、器高4cm。斜上方に突出した受け部の端部は丸みがある。1~2mm大の砂粒を多く含み、外面は濃灰色、内面は灰色。底部のヘラ削りは約1/3を占めている。焼成はよいが、調整が粗い。底部にX様の大きめのヘラ記号がある。



65 溝状遺構の実測図 (縮尺1/40)

土層名

- 1.褐色土
- 2.灰褐色土
- 3.茶褐色土
- 4.黒褐色土
- 5.褐色土
- 6.暗褐色土



66 須恵器 (縮尺1/3)



67 溝状遺構(1)



68 溝状遺構(2)

(2) 土壤 (SK-04)

発掘区北西端のブロックで不整半円の土壤の一部を検出した。直径3.2m。円形の井戸を想像したが、大部分が発掘区の東側に隠れているために、全体の形状はわからない。地山の風化頁岩をほぼ直に掘り込んで、平坦な底面をつくる。深さは217cm。埋土は風化頁岩がブロック状に混ざった茶褐色土で、陶磁器や瓦類などの遺物が出土した。これらには明治期以降の遺物ではなく、江戸期の遺物に限られている。

遺 物 (271~280)

土壤の性格を判断する上で重要であることから細片でもできるだけ実測するようにし、磁器5点、陶器2点、土製品1点、瓦2点の計10点を図示した。

磁 器 (271~275)

5点とも染付の白磁である。271は丸形の湯飲み碗。高台径4.6cm、高台脇は腰の張りがなくそのまま口縁部になる。見込み内底と外面に草花文の染付。高台内は方形枠の裏銘であるが読めない。272の高台は細く、見込み内底が平坦であることから碗の蓋の可能性もある。内底に「大化□□」、高台内に角福の銘がある。高台径4cm。273は口径10.2cm、外面の染付は細かな斜格子文に二輪の窓を開け、竹を描いている。274は型打ちの輪花皿、高台径5.9cm、器高2.9cm、口径10.2cm、口縁部は鉄錆で茶褐色となる。275も同じ型打ち皿。高台径5.6cm、器高2.8cm、口径9.6cm、見込みの山水文はA区瓦溜め出土の14によく類似し、同一窯場の生産であろう。

陶 器 (276~277)

276は高台のない小皿。上げ底からわずかに外溝しながらび、そのまま口縁部となる。口径6.7cm、器高1.8cm、底径3.5cm、胴部は約5mm幅のカンナ削り痕が残る。見込みには褐色釉を厚めにかけているが、口縁部から外面は露胎である。胎土は茶色、焼きもよい。277はどうしりした高台を削りだしている。高台脇も粗いカンナ削りのままである。胎土は灰色で、焼成もよく、堅練な仕上がりとなっている。胴上半は灰緑色釉がかけられ、その軸端は茶褐色となっている。見込みは無釉。高台径11.2cm。

土製品(278)

278は外面灰茶色、内面赤茶色の博多七輪。胎土に1~3mm大の砂粒と雲母を含んでおり、内外面とも丁寧に横ナデ調整されている。胴部は逆八字形に内側に傾き、口縁部上面に小さな粘土塊を貼りつけ、強く指で押さえている。内側にも三角形の粘土塊を貼りつけている。口径は19.2cm。同じ形状で大型製品がA区瓦溜めで出土している。

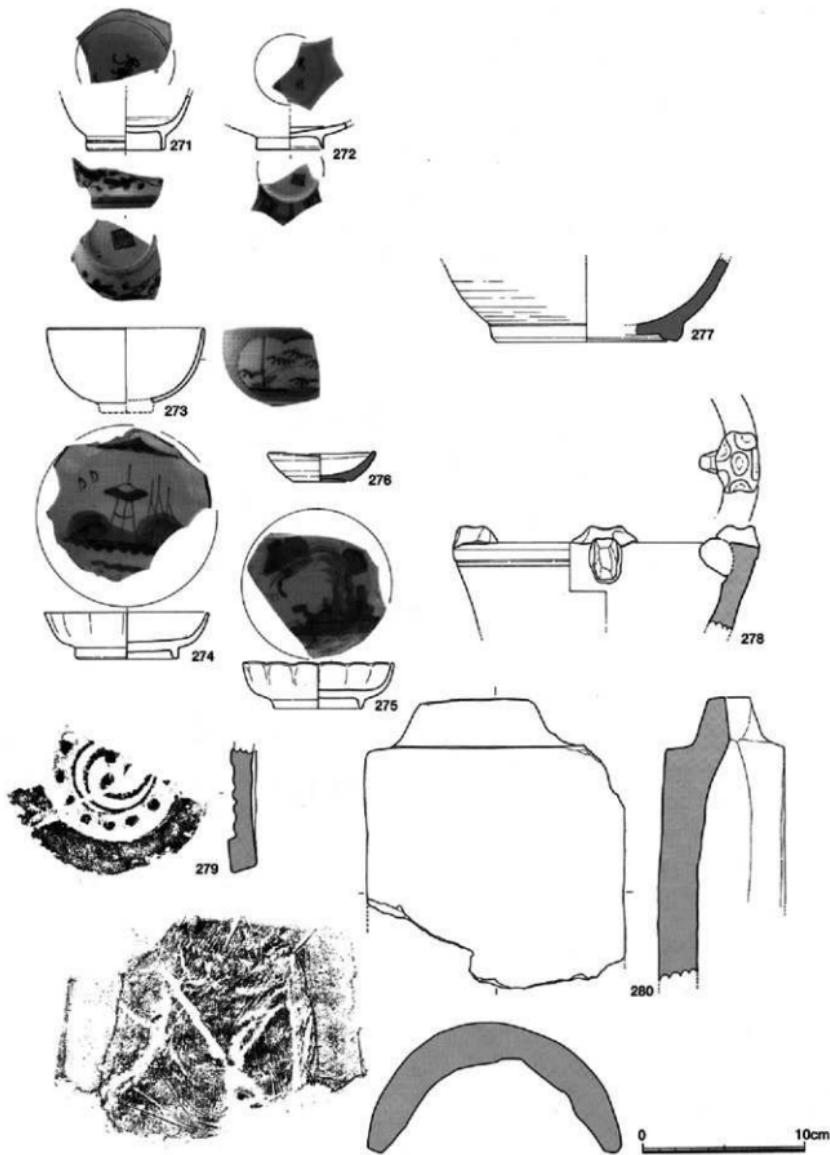
瓦 瓢 (279~280)

279は三つ巴文の軒丸瓦。巴の尾は細長く連接して円闊となり、径9mmの連珠文は12個と多い。煙されて黒色となる。280は丸瓦、幅は18.5cm、背は斜格子叩き痕をナデ消し。内面は1.8cmと幅広く縁取りし、吊り紐痕が残る。内外面とも灰色、胎土に砂粒を多く含んでいる。

なお、この遺構より出土した陶器破片のうち、瓦溜め出土の水注(38)と接合するものがあり、同じ時期に廻業されたと思われる。



69 土壤 (SK-04)



70 土壤の遺物 (縮尺1/3)

(3) C区の遺物

C区攪乱土より出土した遺物を次にまとめて記す。なお明らかに明治期以降と思われる陶磁器、ガラス製品などは別に一括した。

弥生土器 (281)

281は風化が激しく胎土の砂粒が露出しているので、器面の調較は不明。外面は明茶色、内面は剥離して内部の黒色面が出ている。弥生時代後期の二重口縁をもつ壺の頭部より上の破片¹。器形は球形の肩部がつく。弥生土器の破片はこの1点のみであるが、福岡城内ではきわめて珍しい。

須恵器 (282)

282は須恵器の坏身。背の低い高台を底部外縁より1cm内側に貼りついている。高台径10.6cm。平底から全体への肩曲部は丸みがある。外面は灰色、わずかに小砂粒を含む調整、焼成とも普通。

陶磁器 (283~289)

283は口径9.2cmの白磁合子の蓋。天井部外面に陽刻文様の一部が見られ、釉は外面だけに施釉されている。中国産であろう。284は白磁の壺。内面は轉轍焼き痕が顕著であるが外面は横ナデ調整で凹凸がない。高台から胴部は段を作らずそのままびている。内面にも灰色がかった透明釉がかかっている。高台径7.4cm。285は白磁染付の皿、高台径6.5cm、見込み内底の文様は草花に蝶であるが、鼻須の発色が悪く輪郭が滲んでいる。286の背の低い高台は、あらい削りだしで外縁を面取りしている。胎土は灰色で磁器風の堅い焼きとなっている。釉は緑灰色で高台脇は露胎となる。高台径は11cm。287は平底から大きく外に湾曲する肩部がつく。底径11cm、胎土は粗いが焼成はよく締まっている。外面は灰茶色に窯変し、灰を被っている。内面は胎土と同じ灰色。288は直立する肩部に内傾する平坦口縁がつく。胎土は灰色で、堅い焼成となっている。口縁部下には2条の沈線と波状文が巡る。外表面とも灰緑色釉をかけた後に灰色釉を流している。小破片のため口径はわからないが、直徑30cm前後の大きさになるであろう。289は口径25.6cmの擂鉢。口縁端は外表面下方にわずかに垂れて三角形の断面をなす。卸し日の櫛目は8本1単位、内外面に褐色釉をうすくかける。口縁下に浅い沈線が2条巡っている。

土製品 (290)

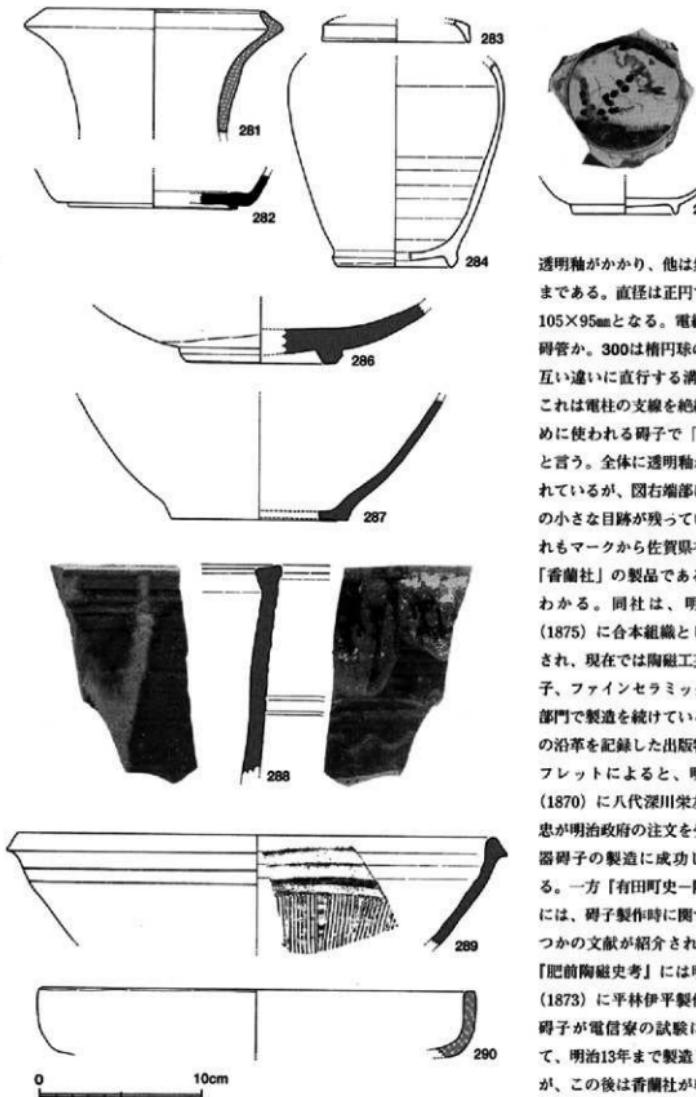
290は口径27.4cm、焰塔であろう。口縁外面に煤が付着している。胎土は砂粒が少なく精良土に近いが、小さな雲母が表面に露出している。焰塔であろう。

瓦 瓢 (291~295)

291は丸瓦。胎土は砂粒が少なく、黄色を帯びた明茶色をしている。背は斜格子の叩き痕をナデ消し、内面には粗い布目が残る。焼成はよいが、やや軟質。292は平瓦で胎土は砂粒が少なく精良。風化が進んでいるので谷の調整痕は残っていない。裏には繩目痕。小破片のために谷の深さ、幅などは不明。293は平瓦の破片。薄い灰色で胎土は精良である。小口は小さく面取りしており、団では谷を浅くしていたが、切り口は垂直に近く起きるのだろう。谷は布目をナデ消し、裏は格子の叩き。294は胎土に1mm大の白色砂粒を多めに含んでいる。焼成は堅く、須恵質に灰色となる。谷に平織りの布目、裏に斜格子の叩き痕。295は中心飾りに三つ巴文をもつ軒平瓦。左右に蕨手文を4個流している。焼しはなく外表面は灰色。瓢は横ナデ、焼成は普通で、やや軟質。

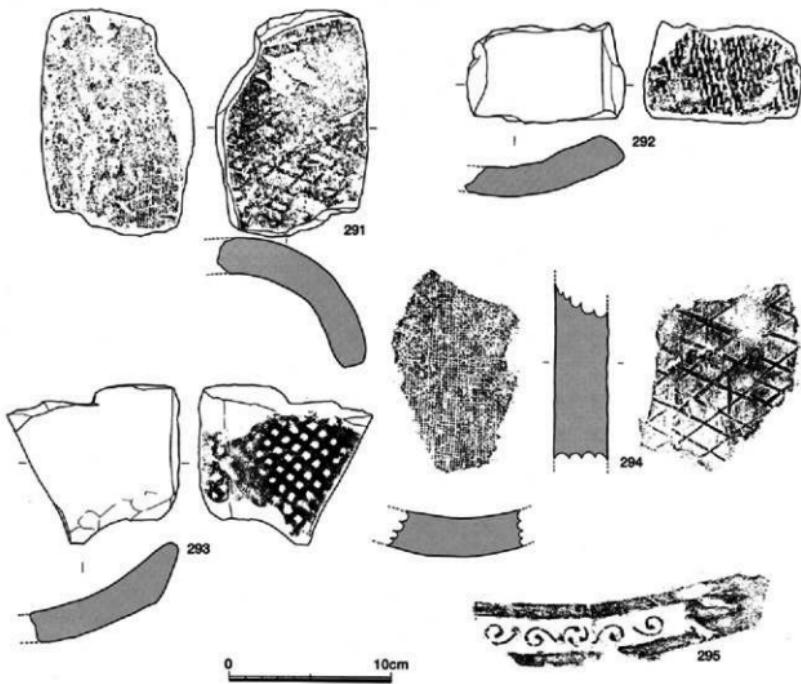
明治以降の遺物 (296~307)

磚 子 (296~300) 296~298はノップ磚子と呼ばれる白磁製の低圧屋内配線用磚子で、C区東南隅の1トレンチから出土した。3点とも直徑35mm前後の円柱状であるが、頭部と中心の孔の作りに違いがある。296の頭部は丸く突出しているのに対し、297と298は平坦で、しかも凹状となり中心の孔が貫通している。底面以外には厚く釉がかかる。299は円筒状の白磁製品で、一端を欠いており長さ11.8cmが残る。団上端部だけに

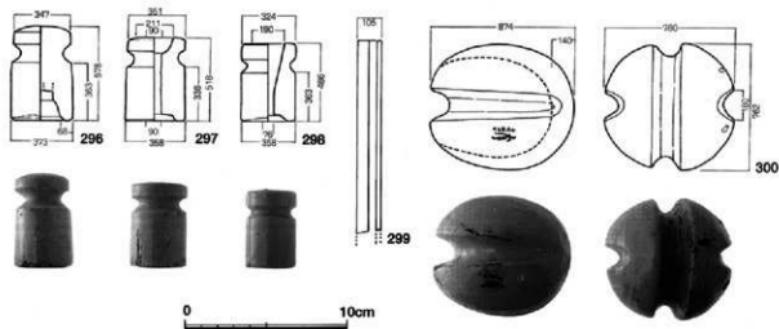


71 C区の遺物(1) (縮尺1/3)

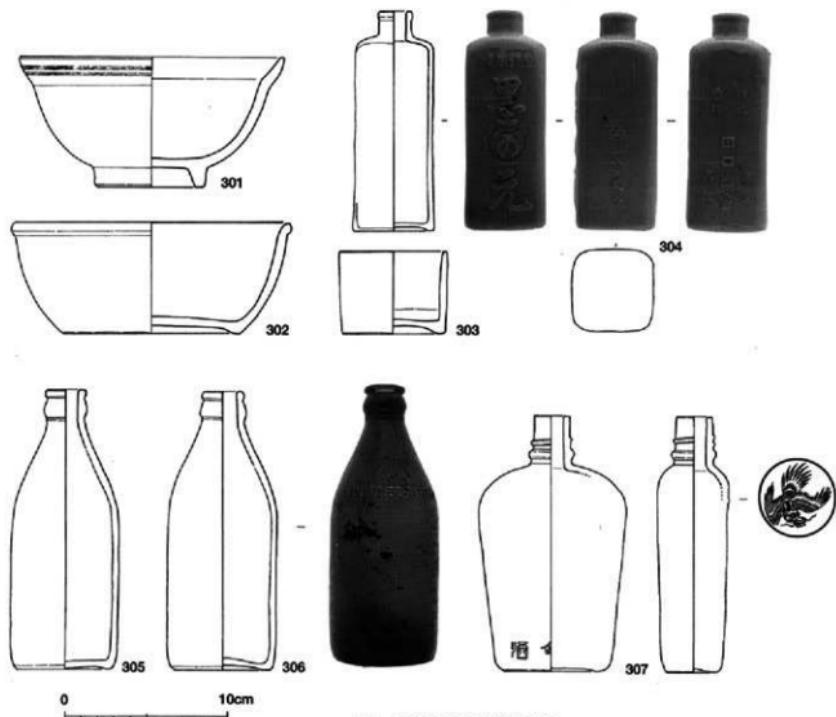
透明釉がかかり、他は無釉のままである。直径は正円ではなく $105 \times 95\text{mm}$ となる。電線を通す
碍管か。300は梢円球の外側に互い違いに直行する溝がある。これは電柱の支線を絶縁するために使われる碍子で「玉碍子」と言う。全体に透明釉が施釉されているが、図右端部には4個の小さな目跡が残っている。これもマークから佐賀県有田町の「香蘭社」の製品であることがわかる。同社は、明治8年(1875)に合本組織として設立され、現在では陶磁工芸品、碍子、ファインセラミックスの3部門で製造を続けている。同社の沿革を記録した出版物やパンフレットによると、明治3年(1870)に八代深川栄左衛門真忠が明治政府の注文を受けて磁器碍子の製造に成功したとする。一方「有田町史-陶業編」には、碍子製作時に關するいくつかの文献が紹介されている。「肥前陶磁史考」には明治6年(1873)に平林伊平製作の電気碍子が電信家の試験に合格して、明治13年まで製造していたが、この後は香蘭社が専門的に製造していたと記述されてい



72 C区の遺物(2) (縮尺1/3)



73 C区の遺物(3) (縮尺1/3)



74 C区の遺物 (3) (縮尺1/3)

る。また、「日本電気事業発達史」には、明治5年ごろ工部省より試作を命じられた深川栄左衛門は、明治7年より碍子の製造を開始したらしい。このように資料によって開始期に違いがあるが、明治4年から着工された東京一長崎間の電信線架設に深川製の碍子が全面的に採用されていることからして、同社の記録がより事実に近いのであろう。

ところで、福岡城東の丸より出土した碍子のうち、マークから香蘭社製とわかるのは、244、245、300の3点であるが、このマークの変遷から製造期間を絞ることができる。碍子製造当初は「フ」の一文字を鼻須で手書きし、明治43年に商標登録して大正末期まで使用。昭和になって蘭となり、輸出することからローマ字で社名を併記するようになった。ただ昭和17年からはローマ字の位置が蘭の下になっており、このことから244と300は昭和17年以前、245はそれ以降の製造ということになり、その出土位置や共伴遺物などから終戦直後に軍関係施設が取りこわされ廃棄されたと思われる。

磁器 (301~304) 301は口径16.3cmの碗。高台置付きだけが露胎で、全体に厚めの透明釉がかかることで、口縁部外に巡る2本の条線は、灰色に発色している。高台径6.5cm、器高7.9cm。302は口径17.2cmの深鉢。口縁部の断面は丸く肥厚している。上げ底気味の底部には、社名と思われる「名陶」の裏銘がスタンプされている。303はコップ状の器形で、口径6.5cm、器高5cm。見込み副部のみに透明釉がかかるだけであることから、別用途を考えるべきか。304は5.1cm角の筒形の墨汁容器である。商品名、社名、内容量などが型出しされている。

註12 中山成基 「有田窯業の流れとその足あと」 一香蘭社百年の歩みー 1980年

ガラス製品（305～307） 305は底径6.9cm、器高17.3cm。褐色ガラスで、丸みのある肩部に「NO DEPOSIT NO RETURN」、「NOT TO BE REFILLED」と読める。306は透明ガラスで、底径6.8cm、器高17.1cm。肩部の文字は同じだが、底部の文字が異なる。307は水筒型のガラス容器で容量は190mlある。表裏に飛龍のマークと「養命酒」の文字があることから、同社に問い合わせたところ、このようなポケットサイズの小瓶は、昭和5年に150ml、昭和10年に190ml、昭和25年に180ml、昭和32年に120ml入りが発売されており、本例は昭和10年から昭和18年まで販売されていた商品ということである。

第3章 おわりに

発掘区は明治以降に全面にわたって激しい破壊を受けていたが、A区では瓦溜め（SX-01）、溝、土塁、C区では古墳時代の溝（SD-05）、江戸時代の土塹（SK-04）などを検出でき、東の丸における地山層の削平が定説よりも深くなかったことが明らかになった。またA区で検出した瓦溜めや櫻乱層から発見された各種の遺物は、この地の歴史的変遷を考える上で貴重な資料となった。東の丸は前述したように、上屋敷として利用されてきたことが城絵図から知ることができ、墓末には家老の立花家敷地となっていた。三木隆行氏作成の「福岡城関係資料年表稿」によると、明治4年（1871）の鹿児島藩置県後、人津公園側の下屋敷に福岡県庁が置かれた。明治5年には城内の荒れ地を開墾して桑茶生産試験場にする計画が立てられ、民間への払い下げが大蔵省から許可されている。同年三の丸上屋敷の黒田、郡の屋敷と並んで、東の丸の立花家屋敷の建物は、司兵局などの官舎として、またその瓦が必要ということで、建物自体はまだ現存していたようである。ところが同年、どの建物か不明だが瓦9万7千枚が払い下げの対象になり、さらに明治6年には、花見櫻、塙見櫻や久野、野村、立花の家老屋敷に残っていた建物、石垣、立木などの払い下げ願いが出ており、遅くともこの年には取り壊されていた可能性が高い。瓦溜めはこの間の事情を示すものと考えた。出土した瓦類に、完形品がなく、また破片の陶磁器や生活道具が混在しているのもそれを裏付けている。それらが18世紀後半を主とし、19世紀中ごろまでの製作年代であることも大きく矛盾しない。

また櫻乱層からの出土遺物を合わせると、三の丸家老屋敷のようすを具体的に推測できるようになったことは、成果の一つである。例えば食器の陶磁器ばかりでなく、鉢鉢（199～204）、こね鉢（207～210）、七輪（49.278）、焰灯（290）などの調理具、調味料入れの焼壺（223.224）、暖房器具の大火鉢（189）、照明具の灯明皿（185.217）、喫煙の火入れ（178～180）、煙管（236）、喫茶具の湯飲み碗や土瓶（32.33）、紅皿（95）や蓄水入れ（186）などの化粧具、玩具や信仰具としての土鈴（226～228）。そして花生（188）、植木鉢（34.181）、餅搗鉢（198）、篠利（39.40）などは、季節の変化を味わい、余裕のある暮らしを楽しんでいたことを物語っている。ところで先の「福岡城関係資料年表稿」によると、元文2年（1737）に三の丸上屋敷で火災があり、東の丸の古田六郎太夫の屋敷まで延焼している。その文献によると屋敷の他に長屋、玄関、馬屋、台所、大工木屋などが焼失したと記録されており、いま、これらの規模や配置は明らかにできないが、今回の出土品によって三の丸の風景だけでなく、家老の家族や下働きの人々の日々の暮らしまで想像できるようになった。

紙面の制約から陶磁器個々の年代について記していないが、肥前系の白磁染付に混じって、唐津焼、高取焼、小石原焼、美濃焼、現川焼など各地の製品が含まれているのが特徴である。これらは江戸時代全期間に渡って製造されたもので、ある特定時期に偏ってはいない。このような傾向が、城内という特殊な理由によるものかどうか、城下や博多湾出土品との比較が今後の課題である。

史跡

福岡城跡

—東の丸の発掘調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 546集

平成 9 年 (1997) 2 月 28 日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区大神一丁目 8・1 TEL(092)711-4666

印 刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区東那珂一丁目 10・15 TEL(092)451-0027

